
地上の王者、ISの世界へ

損ねん 試験は赤点

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地上の王者、ISの世界へ

【Nコード】

N6496V

【作者名】

損ねん 試験は赤点

【あらすじ】

地上評価試験における戦闘で、一人の男は命を落とした……。はずだったが！？

この作品は作者がはじめて書く小説なので、誤字、脱字、内容が酷いかもしれません、小説の書き方を勉強しながら書いていくので、どうか暖かい目で見守ってください

プロローグ

「一発あれば十分だ」

「ヒルドルブ……俺は……まだ……戦えるんだ」

モビルタンク・ヒルドルブ、最高時速110キロ、主砲口径30センチを誇る巨大戦車

そのコックピットのなかで、時代に取り残された悲しき狼はその一生を終える……はずだった。

しかし、その時は来なかった……その巨大な戦車を光が覆い、この世界から文字通り《消えた》のである。

この事実、ヒルドルブが使い捨ての駒として送られたこともあり、その後一部の人間が知るのみとなったという

別の世界、そこでは一人の兵士が果て無き砂漠の中、逃げ惑っている。

その後ろでは、世界最高水準と《言われていた》エイブラムス戦車が、まるで紙切れのように切り裂かれていた。

「ば、化けものかぁ!!」

兵士は自分に降りかかる死から逃れようとその手に持つ小銃を乱射した

その先には、一昔前ならロボット少女と言われていたような格好の女性がいた。

それがただのコスプレイヤーならジャパニーズ・オタクなら喜ぶやつもいたかも知れない。

しかし、目の前に居るそれは《兵器》なのである。

数年前、一人の天才が開発し、とある事件を引き起こしてから、この世界のパワーバランスはおかしくなってしまった。

少し前まで兵士の周りには、たくさんの友軍がいたはずだったのだ。先ほどのエイブラムス、それにアパッチもいた。

彼らは皆、作戦はただのゲリラの掃討と聞かされていた。

しかし、今日の前に居る兵器によって友軍は壊滅してしまった。

まるで何事も無いように目の前にいる、《最強の兵器》はその手にありえない口径の突撃銃を構え、兵士に照準を合わせていた

弾も切れ、成すすべの無くなった兵士は自分の死を覚悟したが、その時轟音が響き《最強の兵器》は吹っ飛んで機能を停止していた

辺りを見回して、攻撃の主を探した兵士が見たのは、地上の王者だった……

ブローグ2

俺は、デメジエル・ソンネン少佐だ

俺はヒルドルブの評価試験・・・その時に起きた戦闘で命を落としたはずだった。

だが、今の状況はどうだ？ヒルドルブは出撃前と同じ、俺も怪我ひとつない。

それに何より辺りを見回しても倒したザクやコムサイも見当たらないし通信も繋がらない

「いったいどうしたっていうんだろうな」
そう呟きながら俺はドロップを一粒口に入れる

ちょうどその時、センサーが音を拾う
「近いな・・・連邦の残存兵力か？」

おそらく次は61式程度だろうと思った。
しかしモニターを覗き込むと予想外のものが目に入った
「なんだよ・・・旧式の戦車じゃねえか」

目に入ってきたのは旧式の戦車、あんなものがいまだに運用されていることが不思議でならなかった。
とりあえず友軍はあんな物は使わないだろうから、使ったならゲリラぐらいだろう。

「APFSDSを装填、次弾もおなじ！」
とりあえずコイツを倒してから、近くを探索してみようと思ったその時、旧式がいきなり爆発した
「なんだ、あいつは？」

しかし、旧式を倒したと思われる兵器は実に非現実的なものだった
「これは、映画かなにかの撮影か？」

無理も無い、戦車やMSを見てきたソンネンにとって、ISは兵器
には見えなかったからだ

しかし、そんな考えはすぐに消えた

なぜなら、ソイツはとんでもない機動をしながら大火力を使い、ヘ
リや戦車を次々と破壊していたからである

「おいおい、できるなら冗談であつて欲しかった」

そんな時モニター越しに一人の兵士の姿が見えた。

あの兵器（？）との距離は300といったところだろうか
当たるはずもないのに小銃を乱射している。

仕方ない、とにかくここがどこか知る必要があるし、無視しても奴
に発見されるのがオチだろう

「先手を打つ、ちょうど奴は動きを止めた、照準も合わせた」
そして・・・ヒルドルフの主砲は火を噴いた

そして、今に至る。

あの後兵士に話を聞いたところ、もしかしたら俺は別の世界に来て
いるのでは？

という説が浮上した。

なぜなら、この世界には地球連邦もジオンもないし、宇宙進出すら
まともに出来ていない。

そして・・・さっきのISという兵器のことだ

さっきの奴は機能停止し、この兵士の援軍が回収している。

そして、俺はどうやら、この軍とともに一度本部へ行き、事情聴取が行われるようだ

別の世界なら俺が一人で出歩くのは危険だし、どこかで保護してもらったほうがいいだろう

身の安全を確保してもらってからこの後のことはゆっくりと考える
としよう

1話 交渉

「異世界から来たとは……この機体を見たら信じずにはいられませんな」

事情聴取の後、俺は軍に配属されることになった、条件付きだが……その条件というのはまず、核融合炉の技術の提供である。

この世界ではまだ機動兵器に積めるほどの小型核融合炉は完成していない

そのため、この圧倒的出力を誇る動力は軍としても手に入れたかったであろう

2つ目は、ヒルドルブを軍のイベントに出すのを許可して欲しいとのことだった。

これは、軍の力が弱まっている今だからこそ、この圧倒的な兵器を宣伝して、地位を上げようと思っているということだろう。

俺もヒルドルブがこの世界で正式採用されるチャンスだと思い、それを許可した。

この2つの条件と引き換えに、俺はこの世界での戸籍と、軍の階級（少佐）を手に入れ、ひとまずこの世界でもやっていけるようになった。

「この世界でヒルドルブの過去の評価が間違っていたことを証明してやる……」

俺はヒルドルブのモノアイにそう語りかける

俺がいた世界ではモビルスーツが主役になって俺もヒルドルブも実

力を認めてもらえなかった

この世界で実力を認めてもらえれば……………

「ISか……………」

ヒルドルブから降り、この世界の自宅へと向かいながら俺はそう呟いた

街頭テレビにはISについての番組が流れている

そのためにはまず俺たちがあの《最強の兵器》よりも優れていることを証明しなくてはならない

しかし、前に機能停止まで追いやったのは単なる偶然で、まともにやりあつたら勝てないことは俺もわかっている

まず、相手はとにかく速い、動いていたらヒルドルブでは攻撃を当てることすら無理だろう

2つ目に大きさの問題だ、ヒルドルブとISだと大きさが違いすぎる、速さのこともありだいがこちらが不利だ

3つ目は火力と防御力である、正直ヒルドルブのウリはこの部分なのだが、ここでもISに分があるかもしれない

突撃銃程度ならヒルドルブの装甲には効果はないと思うが、ビーム兵器は別だ、ヒルドルブには対ビーム用の武装はない

防御でもISにはシールドとかいうバリアみたいなもんがあるらしい

しかし、それは今のままでやれば勝ち目がないというだけである
軍の研究者たちはこの機体に改造をしてくれるらしい、それだけでも今よりだいぶ良くなるに違いない

俺はそう思っていた

そのとき女性の声と複数の男の声が聞こえたので考え事はやめて、声の聞こえた方向へと向かう

そこでは、複数の男が一人の少女を無理やりにナンパしようとしていた

女尊男卑といわれている世の中であっても、ISがなければ複数の男になうわけがない

「おい、お前らなにやってるんだ？」

俺がそう声をかけると、相手は俺のことが軍人だと分かった瞬間すぐに逃げていく

少女もすぐにどこかへ去っていった

自宅に着き、ベッドに寝転がりながら俺は軍からもらった携帯端末を開く

「明日は忙しくなりそうだな……」

《ドロップ》を口に入れてから俺は眠りについた

端末の画面には、演習という文字があった

1話 交渉（後書き）

書かれた感想がこんなにも早くに来るとは思いませんでした

これからがんばって更新していきます

ブログで使った砲弾の種類を質問されたので答えます

APFSDS (Armor Piercing Fin Stabilized Discarding Sabot) という砲弾なのですが、装甲を貫くことに特化しているようです

イグラーの本編でヒルドルプはこの弾を最初に使い、何キロも離れた場所にいたザクの上半身を吹き飛ばしていました

ISに効果はあるかわからないのですが、不意打ちと弾の口径で、直撃したら機能停止ぐらいはするんじゃないかと思い、あの描写にしました

おそらく今日中にもう1話投稿できると思います

2話 模擬戦（前書き）

感想にヒルドルプの主砲を受けたらISSごとミンチになるのでは？
とありました

今のところこの小説では一発当たれば機能停止はしても、絶対防御
までは貫かないということにしておきます

初心者の書く小説ですが、これからどうぞよろしくお願いします

2話 模擬戦

「へっへっへ・・・技術屋もいい仕事してんじゃねえか・・・」
俺はヒルドルブのコックピットでそう呟く

昨日改修を受けたヒルドルブは、《俺から見れば》別物になっていた
まず機体の周りにシールドバリアが展開されるようになった、ただ
これはとってつけたようなもので、エネルギーは装甲内部にあった
空間に付けたバッテリーから供給しており、使用回数はビームを2、
3回弾く程度らしい
俺にとつてはビームを弾くことができる時点で大きなポイントなん
だが・・・

あとは、チャフが取り付けられた、これはISのセンサーを狂わす
という秘密兵器らしい

ただ、これも試作品らしく効果は5分も持たない

あとは前の世界で問題になっていた砲身の冷却システムなどの改善
が図られ、砲弾の命中率も上がった

見かけ上は何も変わっていないが実際のところは違う、こいつは別
物だ

寝る間も惜しんだ技術屋たちにはあとで礼を言わんとな・・・

とりあえず模擬戦の相手のデータに目を通す・・・ラファール・
リヴァイブ・・・第2世代と呼ばれる区分に入るものらしい、ビー
ム兵器は本格的には実用化に至っていない機体であるが、新しくな

ったヒルドルブの初めての相手としては妥当だろう

今回の模擬戦は大規模演習のための特殊な訓練場で行われる。

訓練場にあるものは・・・まず遮蔽物はコンクリートで作られた厚い壁がある、ヒルドルブでも隠れるほどだが身を隠す程度にしか使えないし、センサーですぐにはれるだろう

地面は・・・舗装はされていないが段差と呼べるものはない
このただっ広い演習場を見回す・・・どうやら相手が来たようだ

『えええ！？これが私の相手なの？旧式の《雑魚》じゃない！？』

俺はその言葉を聞いて・・・この世界で初めて怒りの感情がこみ上げた

モビルスーツが登場して・・・教え子たちがみんなザクのパイロットになっていき、俺が時代遅れと馬鹿にされたときとおなじ怒りだ

『こんなやつが私の相手なんて・・・私を侮辱しているの！？』

こいつを倒して・・・ヒルドルブの実力を知ってもらう必要がある、この世界では俺たちに間違った評価など絶対にさせるわけにはいかん！

そのとき通信が入った

『両者配置につきましたか？では・・・開始！』

ただのかい戦車などの的だろう・・・そうISのパイロットは思っていた・・・が

『何なのよ！？コイツ！？』

巨体に似合わずアレはすばしっこい

『うるちよるとー！』

その手に持つ突撃銃を戦車に撃った……がすべてその分厚い装甲に弾かれる

「へっ、その程度じゃ……な？」

ヒルドルのコックピットで俺はそう呟く

「よし、コンクリートの壁を盾にする」

ISのパイロットはかまわず壁に突っ込んできた、壁とその手に持つ剣で斬るつもりなのだろう

「焼夷榴弾、込め！次APFSDS」

俺はヒルドルをとつさに後退させた、するとさっきまで盾にしていた壁が真つ二つになっていた

「威力は馬鹿にならんか！？、でもな！」

ISのパイロットは壁を斬ったとき勝利を確信していた、どうせコイツも他の雑魚と同じだ、ISこそが最強なのだと、しかし、壁を斬っても奴は居なかった

そして何かがこちらに向かって来るのが分かった

それは目の前で爆発してISのセンサーから警報が聞こえた

『なにこれ！？機外1200！？』

そして……そこに飛んできた高速の砲弾によってこの戦いの勝敗は決まるのであった

なお、絶対防衛により、パイロットの安全は確保されているのでそこは安心して良い……と思う

この模擬戦を放送していた基地ではひとつの騒ぎが起きた
皆がI Sが最強だと思っていたため、この試合の結果は多くの人に
衝撃を与えた

そして……その光景を一人の天才がモニター越しに見ている
ことに、誰も気づかなかった

2話 模擬戦（後書き）

戦闘描写は難しいですね

そして予想よりあっさりと終わってしまいました
今回の結果はISのパイロットの油断によるところが大きい・・・
ということにしておきます

3話 出会い

あの模擬戦のあと、俺は基地でたくさんの人に話しかけられた
ヒルドルブがISを倒したことがやはり信じられなかったらしい

そして、今この模擬戦の結果から、ヒルドルブの試験的な量産が決
まるかも知れないという朗報が入ってきた

実は、核融合炉を動かすには、ミノフスキー物理学やヘリウム3が
必要なのだが、驚くべきことにミノフスキー粒子は研究者たちの手
によってすでに発見されていたのである

それを応用させたのがISのセンサーを狂わせる粒子なのだそうだ

そしてヘリウム3はこちらの世界の地球では普通に取れるものと
聞かされた

最初は驚いたが、世界がちがければこんなこともあるのかと一人納
得した。

「ところで、ソンネン少佐、君に上から命令が来たよ」

その場に居た上官から急にそんなことを言われた

「ヒルドルブと共に日本に行ってもらいたいとのことだ」

俺はその言葉から状況を察した、日本にはIS学園という機関があ
る。

そういった機関を持つ国でこのヒルドルブのお披露目をしようとい
うことなのだろう

「了解しました」

俺はそう言って調整を受けている愛機を見る

ヒルドルブ・・・俺たちが、認められたんだ

その後廊下を歩いていると、休憩所のベンチで少女が泣いていた
よく見ると前にナンパされていた少女ではないか

「おい、どうした？なにかあったのか？」

とりあえず軍の関係者の家族かもしれない、そう思い、俺は少女に
声をかけた

「え？・・・あ、アンタは・・・アンタが私を！！」

少女はいきなりつかみかかってきた、鍛えられているようで、力も
かなり強い

前に助ける必要なかったのではと思えるほどだ

しかし、軍人である俺は体もそれなりに鍛えている、そうになるとや
はり体格の違いというのは出てくるもので、暴れる少女を突き放し
て、ちかくにいた奴と協力して取り押さえた

どうやら少女・・・いや、この女性は俺が模擬戦した相手だったよ
うだ

偶然ってあるものだな・・・

とりあえずその少女・・・女性は他の奴にまかせて俺は日本へと行
く準備を始めた

かなりの長期滞在になるらしいので、日本にも家は用意してくれる
との事だ

やっとこの家に慣れてきたというのにまた荷物をまとめて他のところ
にいかねばならない・・・

この家の設備は整っていて、割と好きだったので少し残念に思った俺は荷物の少し整理をしてから、何気なくテレビのチャンネルを回していた

すると、俺が日本に行ってから用があるというIS学園が映った学園というレベルではないだろと思いながら、俺はその番組を見る

すると、画面に一人だけ男子生徒が映った、確か・・・オリムラといったか？

彼はISを操縦できるただ一人の男性であり、今回はその取材・・・らしいのだがなにやらスーツを着た女性が来て取材が打ち切りになっていた

真相を掴めていないところがなんか昔のツチノ〇とかネッ〇ーを探す番組みたいである

俺はテレビの電源を切り、眠りについた

2日後、俺は日本にやってきたイベントは1週間後に行われるようだ、その前にIS学園にも立ち寄って欲しいとのこと

どうやらヒルドルフの戦闘記録をISの関係者が学園に流出させたようで（その関係者は厳罰を受けた）その記録に衝撃を受けた学園の人間が、ぜひそのパイロットである俺を特別に招待したいとの事だ

空港からは専用の車が来て、俺をIS学園まで送ってくれるらしい学園に向かう途中、俺は窓の外をみながら、初めて見る日本文化に内心興奮したりしていた

記念に漢字の書いてあるTシャツを買おう・・・

日本に旅行に来ているような気分だ

そして、そんなことを考えているうちに、目的地に着いた

「あなたがデメジエル・ソンネン少佐ですね？」

そこで待っていたのは………なんともいえぬ気迫のあるテレビで見たスーツ姿の女性だった

3話 出会い（後書き）

千冬さんの口調が丁寧です

一応相手が戦車でISを倒した人物ということで、こついった態度にしてみました

がオーラは変わりません（笑）

漢字のTシャツは「たわけ者」と書いてある奴なら修学旅行で買った記憶が・・・

4話 ISの戦闘(前書き)

学校の補習で受けたテストの結果が・・・

コイツはやばいぞ(点数が低い意味で)

4話 ISの戦闘

「織斑千冬……恐ろしいオーラの持ち主だったな」

俺はそのため息混じりに呟く

先ほどのスーツ姿の女性は、相当有名な人物らしく、あのオーラにも納得できる

また、オリムラ……織斑一夏の姉でもあるようだ

口調はたぶんつくったものだろうが雰囲気はただ者ではないと思っていたが……

ちなみに話というのはかなり短かった。なんでもイベントにIS学園の敷地を使わないかとのこと

おそらく、ISを倒したヒルドルフのイベントにあわせて、なにかをしようと企んでいるのかもしれない

軍に連絡すると意外なことに、その案に賛成との事だ

IS学園で軍の絡んだイベントを行うなど前代未聞なのだが……逆にそれで軍の宣伝になると考えたのであろう

それに……確かこの学園には我が軍の特殊部隊の人間も通う予定とのことなので、そこも関係していると思う

そして、俺は今ドームのような施設に案内された

どうやら帰る前にIS同士の戦いを見せてくれるようだ

「ほう、あれが専用機ってやつか……」

織斑一夏のISが出てきた、真っ白い機体で、白式という名だと聞

いた

もう一方は青龍刀を持った奴で、中国から来た生徒が使っているそうだが、格闘戦が得意なのだろうか？

戦う前に何か話しているようだ。たぶんあの2人にはなにかあったのだろう

そして、戦いがはじまったときに驚いたのが、格闘戦が得意かと思っていた中国のISが一夏に見えない何かで攻撃し始めたことだ。あんな兵器までISは積んでいるとは……。やはり最強の兵器というのは飾りではない……。か

もうひとつ別の意味で驚いたことがある、あろうことがISに乗っている人間の声が聞こえてくる

つまり回線をオープンにしたまま戦っているのである

実戦でそんなことをするのは相当頭のおかしい奴だろう

そんな考え事をしていたら、先ほどまで不利だった一夏が俺から見れば凄い機動をして徐々に距離をつめて、刀で逆転勝利をしていた

やはりISの性能は凄いものだ、機動性も使用する武器も……

ただ、ひとつ感じたことがある

こいつらは本当の戦いを知らないということだ

まえにISと模擬戦をしたときにも感じたのだが、戦いを勘違いしているのだ

ISはスポーツみたいなものだといわれれば仕方ない気もするのだが、この世界で始めて見たISのことも考えると、全く実戦に出て

いないわけではないかもしれない

• なぜなら、国際条約といえども、守らない奴はいるのだから……

脳裏には鹵獲され、味方を装って集積所を襲っていたザクが浮かぶ

俺はIS学園まで迎えに来た車に乗り、外の景色を見ながらイベントのことを考えていた

「イベントに向けて準備をしないと……これから忙しくなるぞ……」

5話 襲撃者

「うわー・・・、でかいなあこの戦車」

「一夏！そんなものを見ている暇はないぞ！急いで集合しなければ、また・・・」

しまった！今日はこんな大切なイベントの日だし、遅刻したら出席簿で頭をたたかれるぐらいじゃすまないかもしれない！

今俺が見ていた戦車はホントにでかった、30メートル以上の長さがあるなんて・・・

今日IS学園で行われているイベントには、各国の政府や、軍関係の人間がたくさん来ている

なんでも、ISの宣伝と、どっかの軍の最新鋭機の発表をするみたいなんだ

さっきの戦車もその中の一機だって聞いた

でもISが有名になっているのに何で今最新式の戦車なんか発表するんだろ？

あつ！？やばい、早く走らなきゃ出席簿が！！

「おい！ヒルドルブに積んでいたマシンガンの予備のマガジンはどこにやった？」

「すみません！あのマシンガンは今回のイベントには使わないので、マガジンは基地のほうに置いてきたのですが・・・」

俺は今、イベントでこの学園のグラウンドを走らせるヒルドルブの最終チェックを行っている

本番まであと10分、何もなければいいのだが……

10分後、グラウンドではISによるアクロバット飛行が行われていた

「一夏！もう少し左を飛べ！」

「おう、わかった！」

その時通信が入った

『ISのパイロット全員へ、俺はヒルドルブを任されている、デメジエール・ソンネン少佐だ』

この人があのでっかい戦車を操縦してるのか……なんかコワそうな人だなあ

『これよりヒルドルブの走行を始める』

ふう、やっと終わった、アクロバットって戦いとは違うから疲れるんだよなあ

おっ、出てきた、やっぱりでかいなあ……あの戦車

しかも、でかさのわりに速いし……！？

その時、グラウンドの一角に穴が開いた

「うわっ、なんだ！？」

「一夏さん！あれを！」

そこには真っ黒い、全身装甲のISが3機いた

そしてすぐに千冬ね・・・織斑先生から通信が入った

『織斑！お前たちはすぐに退避しろ！教員部隊がすぐに向かう！』

「でも、ここで逃げたら他の人たちが！」

『ふん、こいつはちょうどいい・・・ISとの実戦でこのヒルドルの性能を証明する機会ができた！』

「え！？」

「このヒルドルの性能、見せてやろうじゃねえか！シールドバリア展開！TYPE3装填！」

ヒルドルが暴れまわるには少しグラウンドは小さい、がここにはISがいる

「まずは編隊を解かせる！敵が散開したらISが各個攻撃をしてくれ！」

『わ、分かりました！』

ほう、織斑一夏、なかなか判断が早いじゃねえか・・・だが

「TYPE3、てえ！」

よし、うまく散開したな・・・こいつらに本当の戦争を教えてやる
「焼夷榴弾装填、次、APFSDS！」

まずは1機こつちに向かってきたか、なかなかすばやいな、しかし、

俺の勘ではこいつらは・・・

「スモーク散布！焼夷榴弾、てえ！」

黒いISの一機は外部からの情報が途絶し、正常に動作しなくなっていた

やはり無人か！こいつらはセンサーからの情報でしか動いていない！

「APFSDS、てえ！」

まず1機、とりあえず織斑一夏のほうを見てみた・・・が何も問題は無さそうだ、ISのことは良く分からんがあいつはなかなかいいパイロットになるんじゃないだろうか？

しかし、この学園の訓練機である打鉄に乗っている女子生徒たちは、苦戦しているようだ

「うっ、シールドエネルギーが！」

「夏葉！こいつめえ！」

なんなのよこいつらは！すごい威力のビームを撃ってくるし、パワーだって半端じゃな・・・あっ！？

「し、しまった！」

あのISのビームにかすってしまった、エネルギーがかなり持っていかれ、地上へと落下してしまった

「まずい！」

黒いISが私に銃口を向けてきた、このままだと私・・・

その時、緑色の巨体が、地上に降りてビーム砲を構えていたISを吹っ飛ばした

その巨体は先ほどまでとは違い、車体の上には人型の上半身がついていた

「危なかったな・・・」

俺は打鉄が追い詰められているのを見てから、即座に変形させてからヒルドルブを加速させ、車体を黒いISにぶつけた

主砲を撃つと打鉄も巻き込むかも知れなかったから格闘戦に持ち込むことにしたのだ

「おい、その打鉄！すぐに動けるか？」

見たところ推進器がイカれているみたいだが・・・

『は、はい！なんとか・・・』

丈夫にできてるな、ISは・・・しかし損傷しているのは確かだ、小さな損傷でも死につながることもある

「早く退避をするんだ、こいつは俺が何とかする！」

そうこうしているうちに黒いISが起き上がり、ヒルドルブの目の前まで接近してきた

「つぶしてやる！シールドバリア出力最大に！」

俺はクレーンアームを操作してISを殴りつけた

「これでも喰らえ！」

そして混乱しているところに携帯しているザク・マシンガンを撃ち込み、ISの機能を停止させた

向こうも終わったようだな、ISが白式の刀に切り裂かれているところモニターに映った

これで一件落着

『ソンネン少佐、あとでお話があります』

とはいかなさそうだ

6話 処罰（前書き）

まとめて2話投稿をします。

7話のほうは前後編となっています

原作崩壊が……………

オリキャラが出ます。設定などはまとめて投稿する予定です

これからガンダムからもキャラ、兵器等出していく予定もあります
ので、希望がありましたら是非！

6話 処罰

「そうか……」

俺はあの戦闘のあと、今回のイベントに来ていた軍の関係者とIS学園の人間に呼び出された。

防衛のためとはいえ、無断で戦闘行為をしたのだから、処罰は受けることになる

なにせヒルドルの主砲、30センチ砲の威力は絶大である。
ISのシールドエネルギーを一撃でダウンさせるほどだ

今回の戦闘においても、グラウンドにもしものためにと張ってあったシールドが流れ弾を一発受けただけで一部エネルギーがダウンしてしまったのだ

見に来ていた人間に被害がでなかったただけ良かったかもしれない

「今回の件は、条件付きで不問にする……とのことです。」

「なんだって?……」

しかし、俺が考えてもいなかったことが起きた。今回の戦闘を見た各国の代表たちが今回の件の処罰を無しにするよう、はたらきかけてくれた……条件付きで

ヒルドルと搭載されている核融合炉、あれを本格的に量産して、各国へ輸出して欲しいとの事だ。

このようなはたらきかけがあり、今回の件の処罰は無しとなったのである

IS学園にある会議室から出た俺は、窓からグラウンドを見る

「もう、こんな時間か……」

グラウンドには夕焼けに照らされている……会議室はカーテンが閉められていたため外の様子は分からなかった

今日はずいぶん疲れのたまる一日だった……そう思い廊下を歩いていると、一人の少女が話しかけてきた

「あ、あのっ！さっきの戦車に乗っていた人ですよね？」

「ああ……何か用か？」

「さきほどはありがとうございました、おかげで友達も軽い怪我をするだけで済みましたし」

「あの時のISのパイロットか……礼には及ばん……おい、その怪我は？」

「ああ、これですか？さっきの戦闘のときにちよつと地面に叩きつけられちゃって……」

少女の右腕は赤く腫れ上がっていた、ISが衝撃を吸収しきれなか

ったようだ

「少しじつとしている……こういう怪我はほっておくと危ないからな」

「え！？あ……その……」

俺はポーチから携帯用の治療器具を取り出す、持っておくといざというときに役に立つ

怪我をそのままにしておくで戦場で命取りになる事だってある、念には念をつてやつだ。

「こんなもんだろう、しばらくは安静にするんだな。まあ、明日のイベントはたぶん……」

イベントは3日間続く予定だったのだが、1日目にこんな襲撃を受けてしまったのだから中止になるだろう

「あ……の、ありがとうございます、明日もしイベントが続いたら、案内しますよ。これ、連絡先ですっ！そ、それじゃ、また！」
そういつて走り出す少女、安静に言ったばかりだろうが……

「ふん……まあ、明日はヒルドルブは動けないだろうし……」

ヒルドルブは戦闘でシールドエネルギー発生装置がオーバーロードしてしまったため、応急修理中である

その巨体ゆえに運搬は特殊な輸送機などを使わなくてはならないので、今は学園内で修理するしかない

それにしてもあの少女……顔を赤くしながら走っていたが、まさか！？

ひとつの可能性にたどり着いた俺は少し困った

・・・が、俺は大人だ、返事ぐらいはするつもりだ、あいまいな態度をとるつもりはない

「全く・・・今日は忙しいな」

そうつぶやきながら夕焼けに染まる空を見た

7話 デート？違いますよ

前編（前書き）

前編です

ガンダムからの兵器は、モビルスーツに限らず、モビルアーマーとか戦艦、61式とかボールみたいななかまいません。

人物も結構マイナーな人でも。私はクワランとバムロ（バロムでもアムロでもないです）が結構好きです

7話 デート？違いますよ

前編

「約束の時間になったな・・・ここで待ち合わせのはずだが・・・」

俺はIS学園内にある食堂・・・をイベント用に改装したカフェに
来ている

「すみません、待ちましたか？」

待ち合わせに来た少女は、昨日とは少し雰囲気が違う。よく見ると
うつすらと化粧をしているのが分かった。

「いや・・・今来たところだ」

まるでデートの待ち合わせをしていたカップルのような会話だが、
それは気のせいだ

「そうですか。あ、まずはどこに行きますか？行きたい場所とかは
？」

どうやら俺に気を遣ってくれているようだ。おそらく昨日一通りは
見て回ったのだろう

「ああ、まずはここに行ってみたい、同僚がおススメだと言ってい
た」

同僚とはイベントに来たヒルドルフの整備兵である。ソイツはこの
世界に来てからの俺の知り合いの中でもっとも日本文化に詳しい。
たしかシュヴァルツェ・ハーゼの・・・クラリッサ大尉とよく日
本文化について話し合っていると聞いたことがある。ISとの模擬
戦のあとに数回交流があったため、あの部隊には俺も知り合いがい
る。

「え？これですか？いや、でもこれは……」

「そうか？面白そうじゃないか」

俺が指差したのは『メイド喫茶』、IS学園の教師がウエイトレスをやっているらしい

アイツはマヤマヤがどうとかなんとか言っていた。それについて質問したら同僚はメイド喫茶は日本の代表的な文化だとかなんとか熱く語ってくれた。……正直俺はあまり理解できなかったが・

「俺、なんか噂されてる気が……」

いかんいかん、今日中にヒルドルの修理を終わらせて明日はまたマヤマヤに会いに行くんだ

「おい、ミハエル！ちゃんと作業しろ！そのケーブルが接続先間違ってるぞ！」

「す、すみません班長！今すぐに！」

こりゃ、本気でやらないとな……がんばれば明日には……

「ほう、ここがメイド喫茶か……ん？どうした？入らないのか？」

「い、いえ……それじゃ、入りましょう」

「「お帰りなさいませ、ご主人様」」

「ほう……」

入るとメイド服を着た美しい女性が迎えてくれた、なんだ？隣に居る少女の機嫌が悪いな……

「うう……」

まず席に座り、注文をした。俺は同僚のミハエルがイチオシしていたオムライス、少女は……なぜか何も頼んでいない

「ふん……なかなか立派な喫茶店じゃねえか。そういや自己紹介していなかったな……俺はデメジエル・ソンネン少佐だ、ヒルドルプのテストパイロットをしている」

「私は、桐岡柚、この学園の一年です。こう見えて一応ISの操縦は得意なほうなんですよ」

「よろしく頼むぞ。ところで……なにも頼まないのか？」

「はい、私はあんまりお腹空いてないんで……」

やはりどこか機嫌が悪そうだ、まあいろいろ難しい年頃だから仕方ないのかもしれない

「お待たせしましたごしゅ……ソンネン少佐！？」

眼鏡をかけていて、背が低いわりに出ているところは出ているメイドが俺を見て驚いていた

「あなたはたしか……山田先生……だったかな？」

俺はすこし丁寧な口調でそう言う。

「ど、どうしてソンネン少佐が、こ、こんなところに？」

かなり動揺しているようだ。これがミハエルの言っていた萌え？とかいうやつなのか？俺にはよく分からない

「ああ、今日はちょっとこの生徒といっしょにイベントをまわることになっていてね・・・」

「ええ！？せ、生徒となんてそんな！？・・・いけませんよ！ああ、でも人の恋愛に口出しは・・・」

とてつもない勘違いをされているようだ。ここは少し弁解を・・・

「どうしました？山田先生？」

山田先生の異変に気づき、やってきたメイド、かなりツンツンしていて・・・おや？

「織斑先生、なかなか似合っていると思いますよ」

俺は素直に感想を言った。・・・その時、なぜか空気が凍ったような感覚がした

「ソ、ソンネン少佐だと！？なぜこんなところに！？まさか、一夏もここに来ているのか？」

いきなり慌てはじめた。まわりのテーブルで会話をしていた生徒たちは、ありえないものを見るような目をしている

「落ち着いて、織斑先生！・・・ソンネンさんのせいですよ？」

柚がなぜか俺のせいにしてきた。よく考えると織斑千冬は世界でも有名なISの搭乗者だが、それゆえにあまり男と関わったことがなかったのかもしれない。もつと言えばIS学園は女子校みたいなものなのだから、IS学園の教師や生徒にも同じだ

騒ぎが収まったところで俺たちはメイド喫茶を後にした。織斑千冬が落ち着いたあとに、ほかのメイドが来てオムライスにケチャップで文字を書いてくれた。なかなかおもしろいとは思ったが・・・

「次はどこに行きますか？ソンネンさん。私はここなんかいいと思うんですけど」

パンフレットの地図を見ながら柚は学園の軽音楽部のコンサート会場を指さす。とても不機嫌だが、これは俺のミスだな。正直二人でまわっているときに他の女性をほめたりするのはあまりよくなかった・・・と反省している。

「軽音楽部か・・・いいと思うぞ。そこに行くか・・・ん、あそこにいるのは・・・」

コンサート会場に向かうとき、俺は世界でただ一人のISが使える男に出会う

7話 デート？違いますよ

後編（前書き）

今日まとめて何話か投稿します。

機体のアンケートですが、IGL00から出すならツダがやはり一番現実的とのことで、ツダを出すことを決定しました。

ツダだけでなく、一年戦争の他の機体も出していく予定です。

アンケートをくださった皆様、本当にありがとうございます。

初心者を書く小説ですが、これからどうぞよろしくお願いします。

7話 デート？違いますよ

後編

「全く、なんで俺が鈴に殴られなきゃならないんだよ……」

ただ俺は酢豚を奢ってもらおうと思っていただけなのに……

鈴だけじゃなくて箒もだ。いきなり馬に蹴られるだのなんだの……

・箒は木刀振り回してきたり・

アレ、痛いどころじゃ済まないんだぜ？

そう思っていたら、一人の男がこっちに歩いてきた

「こんなところでひとり言か？少年」

この人は確か昨日の……

なるほど……織斑一夏は相当苦勞しているようだ……頼に平手打ちを喰らったあとがある。

この学園で男一人でやっていくというのはとても大変なんだろう……

「ソンネンさん、早く行かないとコンサート始まっちゃいますよ？」
柚が俺にそう伝えた。織斑一夏とはもう少し話をしたかったが……

・
仕方ない、またいつか機会があれば・・・だな

「じゃあな、がんばれよ少年」

そう言っただけ俺はコンサート会場に向かった

コンサート会場に着いた俺は袖に引っぱられて列の最前列に来ていた

「ほう、なかなか本格的なバンドだな」

「うちの学園は部活動の設備も良いんですよ」

「ほう・・・柚、お前も何か部活動に入っているのか？」

「いや、私は特に何もやってないです。」

「そうか・・・」

そんな会話をしながら、改めてIS学園の設備を実感していた

「今日は楽しかった。久しぶりに学生の頃を思い出した・・・」

「そうですか、それは良かったです。あの・・・ソンネンさん・・・」

「桐岡さん！山田先生が呼んでるよー！」

「え！？すぐ行くよー・・・ソンネンさん、じゃあ、また今度・・・」

また今度・・・か・・・

俺は今一人でIS学園のグラウンドを見ている

「楽しい時間というのは早く過ぎていくものだな・・・」

メイド喫茶に軽音楽部のコンサート・・・どれも楽しかった。だが・・・あと2日後には、また日本にある軍の基地に戻って模擬戦の毎日だ

前は模擬戦で俺とヒルドルフの評価を上げることしか考えていなかった

った。

俺は今日、そんな日常の中で忘れていたことを思い出した・・・あの少女と出会って、変わったのかもしれない。

「あの、すいません！」

そんなことを考えていたら、後ろから声をかけられた

「さっきの少年か、どうした？」

振り返ってみると織斑一夏がいた

「実は俺、昨日の事で言いたいことがあって・・・・・・・・昨日は、助けてくれてありがとうございました」

なるほど、昨日の戦闘の礼か・・・・確かに俺の顔は『戦車でISを倒した人間』として有名だってミハエルが言ってたな・・・・・・・・

「ふん・・・・お前もよくがんばっていた。ISのことは良くわからんが、いい動きしてたと思うぞ。ところで少年、お前はさっき何をぶつぶつ言っていたんだ？」

「え！？それは・・・・俺がこの学園に来てから・・・・まあ、いろいろ大変で」

「女のことか？」

「！？」

「凶星か・・・・」

「話してみる・・・・なにかアドバイスできることがあるかもしれないぞ？」

「実は・・・この学園に来てから、二人の幼馴染と再会して・・・すごく嬉しかった、でも毎日なんか暴力を振るってきたり・・・木刀振り回してきたり・・・」

「ふむ・・・お前が何か変なことをしたわけじゃないんだな？その年なら若さゆえの過ちも・・・」

「違いますよ！！少し約束を間違えたり、風呂上がりのところを見ちゃったり・・・」

後ろの方は確実にこいつのせいじゃねえか・・・ん？約束？

「違わないだろうそれは・・・。で、約束ってのは・・・なにか大切なことだったのか？」

「いや・・・ただ昔、酢豚を毎日奢ってくれてっていう約束をしたんですけど、それを言ったら急に怒りだしちゃって・・・」
「なんだそれ？待てよ・・・。確かミハエルが・・・」

「ソンネン少佐、日本では男は女性に味噌汁を毎日作ってくれって言ってプロポーズするんですよ。」

「ほう・・・なかなか面白いプロポーズのしかただな」

×酢豚を毎日奢る

酢豚を毎日作る〓味噌汁毎日作る〓プロポーズ

「おい、お前・・・それ、プロポーズの言葉だぞ」

「ええ！？・・・そんな、鈴がまさか俺に？そんなわけないですよ」

こいつ・・・とんでもない鈍感だな。

「まあいいお前は、どうなんだ？ソイツのことはどう思っている？」

「！？・・・鈴たちはただの仲間で、そんな風には・・・思っていないですよ・・・ハハハ」

ん？今のコイツ少し目を泳がせていたぞ・・・まさか・・・

「ふん、まあいい。後悔しないようにがんばれよ。」

それから・・・もし、お前が誰かに好意を持っているのなら、あいまいな態度をとるな。そうやって自分に嘘ついていると、お前自身も・・・相手も傷つけるぞ・・・これが、人生の先輩としてのアドバイスだ。」

「・・・」

俺は一枚の紙を渡す

「困ったときは連絡してくれ、じゃあな．．．がんばれよ．．．」

その後、3日目も特になにがあつたわけでもなく、イベントは終了した。

織斑一夏はアドバイスをどう受け取ったか知らんが．．．おそらくうまくやってるだろう．．．

「鈴、もしかして俺のこと．．．好きなのか？」

ソネンさんが言つてたこと、ホントなのか？これで勘違いとかだったら、俺、相当まずいことになる気が．．．ま、気軽に聞こう、気軽に

「ア、アンタいきなりなんてこと言つのよ！一夏．．．」

「あつ！悪い、やっぱり．．．それ．．．どうしても聞きたい？」

え？なんか変だ．．．鈴が真剣な目で俺を．．．鈴つてこんなに綺麗だったか？あれ？こういう展開、弾の家で読んだ漫画でみたぞ、まさか．．．

「見つけましたわよ！抜け駆けするなんて．．．卑怯ですわ！」

「少し話を聞かせてもらおうか？．．．一夏」

なに！？セシリア、こんな時に！それに箒、本物の刀とか洒落にな

らないぞ！？どこから持ってきたんだよ！？

「鈴！助けてくれ！俺の命の危険が！！つてもう逃げて・・・箒な
んで刀を振り上げてるの？それ喰らったら本当に」

「問答無用！！」

「理不尽すぎるだろ、コレ！！」

「ん？着信か・・・織斑一夏・・・よう、少年、上手くいった
のか？」

「あ、ソンネンさん！助けてください！！俺の命が危険にさらされ
・・・今は上手く倉庫に隠れ『一夏！！もう逃がさんぞ！』『な
にを話していたのかきっちり教えてもらいますわ！』大丈夫だ織斑
一夏・・・この扉は鋼鉄製・・・しかも鍵とバリゲードだつてし
つか・・・え？なんで扉が真つ二つになッ！？もう、逃げ場はな
いぞ？』『覚悟はできてます？』『ウオオオオッ！！スタアア
アアズ！！！！』おいおい嘘だろ？」

「・・・・・・・・・・」

どうやら上手くいかなかったようだ・・・鋼鉄製の扉を真つ二
つって何事だ？ISを装備していたんだと信じたい。最後らへんは
良く聞こえなかったが、ミハエルがやっていた日本のゲームであん
な声の敵がいた気がする。

織斑一夏・・・お前よくそんな環境で毎日生活してるな・・・

これからも織斑一夏の苦勞は続きそうである

7話 デート？違いますよ

後編（後書き）

どちらかというとこの話は一夏と関わらせるための話みたいなものです。

なので内容が酷い・・・作者の技量不足です。

オリジナルのキャラはこれからもっと動かしていきたいと思っています

8話 楽しい(?) ショッピング(前書き)

臨海学校の前の話です

鈴ルートですね・・・なぜ鈴がヒロインかと言つと・・・
作者の好物が酢豚だからです

アニメ見たときに一夏うらやましいなあ・・・と思つていたり

8話 楽しい(?) ショッピング

あのイベントから時間は経った。IS学園には我が軍のボーデヴィッヒ少佐が転入した。

織斑一夏と同じクラスのようだ。

俺は書類を片付ける。最近では模擬戦をやることも少ない……
・正直退屈だ……

あのイベントの後、量産型ヒルドルブは少数生産され、輸出もされた。

輸出用のものはオリジナルのものとは異なり、操縦性の追及のためにパイロットは3名、変形機構も削除されている。ただ、変形機構をなくした分のスペースをシールドエネルギー発生装置に置き換え、ジェネレータと直結させて出力を向上させたため防御力は上がっている。装甲材がチタン合金に変わっていることも変更点としては大きい。

現在ドイツ軍はオリジナルと装甲材質とシールドエネルギー発生装置の増設がされている以外はほぼ同じ設計のものを7機運用している。

暇を持て余していると、携帯にメールが来た、差出人は織斑一夏だ
ふむ……。外出許可が取れたため、外で食事でもどうですか？。・
か

織斑一夏とはあの後メールでやり取りをしている。相談を持ちかけ
られることがほとんどだが……。
今日は模擬戦もないことだし、外に出るのも悪くないな。・・

俺は織斑一夏との待ち合わせの場所、ショッピングモールに来てい
た。

「よう、早かったな。少年、最近はどうだ？。・・・例のプロポー
ズの件も含めてな」

「最悪ですよ、刀振り回されたり、ネシスが追いかけてきたり・
・・・」

後ろのほうにはノーコメントだな・・・
「大変だな、お前も。今日は確か臨海学校に持っていく道具を揃え
るんだっただな？」

「結構あっさり流しましたね・・・はい、とりあえずシユノーケ

リングの道具と水中カメラを・・・」

水中カメラとは・・・本格的過ぎるだろう・・・

確か昨日テレビで熱帯魚特集なんてのをやってたが・・・ブルームなのか？

「まあいい、まずはその店に行くか・・・ここで話していてもアレだしな」

そのとき俺は、何者かに尾行されていることに気づいた。人数からして5、6人、中にはプロもいるようだ。・・・あとの数人はおそらく素人だ。この様子だと、俺やコイツの命を狙っているわけではないようだ。

・・・あの銀色の髪は・・・・・・なるほど、しばらく泳がせとくか・・・

「ソンネンさん、入りましょう」

「あ？ああ、そうだな・・・」

コイツはなぜ気づかないのだろうか？さっきからアフロのカツラにサングラスをかけた不審な奴が後ろ20メートル付近をついてきてるのだが・・・この警備員しつかり仕事してるのだろうか？俺だったら即、警察につきだすレベルだぞ。

「これと・・・これでよし・・・と」

「水中カメラってソレか？思ったよか安そうだな・・・」

「ソンネンさん、知らなかったんですか？今は使い捨ての水中カメラもあるんですよ」

「ほう・・・便利なもんだな・・・俺もひとつ買ってくか・・・
・使う機会があるかは分かんが・・・」

次に来た店は、なにやらアクセサリーが並んだような店だった。

「ほう・・・お前から誰かにプレゼントか？」

「まあ、そんなところです・・・あ、誰にも言わないでくださいよ」

「分かってる・・・そのネックレスよりコッチのほうがいいんじゃないかねえか？」

「これは・・・ブレスレットですか？」

俺が選んだのは、何の変哲もないブレスレットだ

「いきなりネックレスってのも重いだろ・・・ブレスレットぐらいなら相手に気を遣わせることもないだろう」

「なるほど・・・やっぱりこういうのはソンネンさんが一番頼りになるな」

「まあな・・・人生の経験と、勘ってやつだ。お前もそのうち身につくだろうよ・・・」

「一夏、あのプレゼント誰に渡すんだろう……」
「ま、まさかあのプレゼントはあたしに……」

そんな会話を隣で指輪を見ているアフロ二人組みがしている。これでも気づかないとは……。まったくコイツは……

俺たちは今、近くにあった中華料理屋に来ている。あいつら……。ここに来てもバレバレな尾行を……。店の人が困ってるぞ

「いやー今日はソンネンさんが来てくれて助かりました。おかげでプレゼントもちゃんとしたもの用意できました」

「礼はいらん。あとは渡すときにお前がミスをしなければ大丈夫だな。」

俺たちの前に料理が運ばれてくる、ラーメンと酢豚だ。今どこから「あたしの作る酢豚のほうか……！」と聞こえた気がする。

「この酢豚メチャクチャうまいですよ、ソンネンさん」

「ほう……。浮気か？」

「なにがですか？」

ヤバイぞ……お前の後ろの席から発せられている殺気に気づいていないのか！？さっきのは空耳ではなかったか！酢豚で反応するということは……アイツが例の……

「ふむ……お前は、未来の彼女の作る酢豚とこの店の酢豚、どっちがうまいと思う？」

この選択肢で、選択を誤ればコイツに未来はないだろう。いろんな意味でな……

親しい女性の前で他人の作った料理を褒めるとロクな事はないのである……作者もそれで痛い目に……

「？なにか電波が……み、未来の彼女って……鈴とはまだそんなんじゃないですよ。確かに、最近すごく可愛くなってドキツとしたり……まあ、なんというか……」

「まあ、要は……好きなんだろ？その話は何回も聞かされているんだが……」

最近その鈴という少女がどうだのという話をしてくることが多いし、これは確実だろう。

そして、その少女が今コイツの後ろで顔を赤らめている。

なるほど……これがミハエルの言う『フラグ建築』か……
・これが日本の文化なのだと聞いたことがある。

そろそろいいだろう……

「もういいだろう？尾行してきてるのは分かってたんだぞ、ラウラ

少佐」

「むう、バレていたのか。流石はソンネン少佐……」

「ラウラ！？それにみんなも！なんでこんなところにいるんだよ！？」

「ふん……その五人組はまだまだだな。IS学園で習ってないのか？どうして尾行なんてしようと思ったんだ？……もしかして、コイツが気になってたのか？」

「それは……一夏は私の嫁だからだ！」

「え？」

その後も意味の分からない説明をし始める6人……

なるほど……コイツはこの6人の少女全員から好かれていたわけか……ミハエルが知ったら何と言うだろうか？

「飯の代金は置いてくぞ……あとはお前が何とかするんだな……」

「ええ！？そんなっ！？」

……ミハエルはもう準備はできているらしいしな……

その後、一夏からのメールによるとショッピングモールの水着売り場に行った後、無事にブレスレットを渡すことができたらしい。アイツもなかなかやるじゃねえか……。ただ、俺の予想だとこの後……

電話の着信だ……。やはりか！

「ソンネンさん……。助けてください！！さっきからあいつらの様子がおかしくて……。今ちよつとトイレに行くって言って離れてるんですけど……。このままじゃ俺『ビリリリリリリリリ』あれ？なんで店に置いてあるラジオが鳴り始めてんだ？『一夏！逃げてっ！』鈴！？お前なんでそんなにボロボロなんだ？とりあえず俺が手当てを『ほう、一夏……。やはり貴様……。』『ダメですわよ鈴さん？抜け駆けどころかそんなことまで……。』『一夏は私の嫁なのだぞ！』『本当に一夏はえっちだね……。僕が直してあげなきゃ……。』なんか来た！？あの表情アウトたる！これか、これでラジオが鳴ったんだな！？もう幕そっくりの人形が歩いててもビックリしない？……。ザザザザザザザザザザザザザザ」

「聞いただろミハエル……」

「はい、しっかり聞きました。なんかもう怖いです……」

この話は日本で本当にあった怪奇現象としてドイツ軍の中で永遠に語り継がれることになる。

8話 楽しい(?) ショッピング(後書き)

女性の前で他の人の料理を褒めるのはやめましょう(笑)・・・いや、本当にこれは大事です。

作者の体験なのですが・・・

所属している同じ部活の女子が大会のときにクッキーを作って来ました。

その時は特になんともなかったのですが、その後が・・・

その数日後、他の女子からバレンタインデーの・・・いわゆる友クッキー(?)というものをもらったときに、すごくうまいね!本命は誰にあげるの?・・・そう言いました。

すると、なんとということでしょう!同じ部活の女子たちが怒り始めたのです!

それが引き金で、部活内で女子から冷たい視線・・・という状態が一週間ほど・・・

本人に何故怒っているのか聞いてみると、他の人のクッキーを褒めたのがむかついた・・・とのこと

女心って、作者はよく分らないですが・・・皆さんは気をつけてくださいね。

バイオ ザードとサ レント・ヒ ネタは、最近友人がソフトを貸してくれたので、ちょっと入れてみようかなと・・・

8・5話 幻影は光に消える（前書き）

これは、連邦軍のオデッサ作戦中に起きた話です

宇宙世紀に舞台が戻っているので、ISは出てきません

オリジナルのキャラが四人登場します

8・5話 幻影は光に消える

「黒い三連星がやられたらしいぞ」

「本当か？　いつたい何が・・・」

「例の木馬だ・・・連邦の白い奴にやられたらしい」

「オデッサはもう陥落したとか聞いたぞ・・・この基地にもいつ攻撃が来るかわからねえ・・・俺たちはどうすりゃいいんだ・・・」

「全くだ・・・補給で回ってきたのがあんな機体じゃあなあ・・・」

「確かに・・・ただの試験機のポンコツじゃねえか、お偉いさんから見たらこんな基地どうでもいいんだろっよ」

「リチャード中尉、アッグガイの整備、終わりましたよ！」

「そうか、ちよつと遅かったんじゃねえのか？　あとで例の女の子、紹介してくれよ！」

俺の名はリチャード・フォード、この基地に今日配属されたジオンのスーパーエース部隊の隊長だ

そして俺の前にあるイカした機体が俺の愛機、アッグガイ

前に乗ってたアッグガイがマシントラブルでお釈迦になっちまったから、取り寄せてもらった新型機だ

何がすごいって、そりゃあこの高性能なメインカメラ、四本あるヒ

ートロッドにバルカン砲・・・まさに格闘戦が得意な俺にピッタリだぜ！

新型機という表現は、正しくもあり、間違いでもある。

この機体は地球連邦軍本部ジャブローを攻略するために開発されたアッグシリーズの一機である。

しかし、その計画自体が中止され、その際に残っていた試作機がこうして配備されているのだ。

こうした試作機まで投入しなければならないほど、ジオンは追い詰められていたのである。

余談だが、アッグシリーズは見た目と武装が奇妙であることが知られている。

アッグガイは、複眼のような大型メインカメラと四本のヒートロッド、ジュアッグはゾウの鼻のような排気ダクトと指のような三連装ロケット砲を装備。ゾゴックはブーメランのような装備ワイドキャッター。アッグは大きなドリルを二つ装備している。まるで怪獣のような見た目であるが、マニアの中ではレプリカを所持する人物がいたり人気がある機体・・・なのかもしれない

「いやあ・・・やっぱりスーパーエースにもなると専用機ももらえるんだな、ハッハッハ！」

「隊長！こんなとこにいたんすか？通信の女の子たち、待ちくたびれてますよ？早く行きましょうよ」

走ってきた3人組、俺の部隊のEースたちだ

「おお、ルイス。行くか、スーパーEースの俺たちは美人も待たせないからな！今日は張り切ってこうぜ！！」

「ヤッホオオオオオウ！」

彼らは知らない、自分達が《Eース部隊》としては軍に認識されていないということを・・・

『敵大部隊接近！総員配置につけ！繰り返す・・・』

「マジかよ・・・ま、俺たちにかかれば楽勝だよな！行くぜえ！！俺たちのデートの邪魔したツケを払って貰おうぜえ！！」

「オオオオオオツ！！」

彼らにもまた、奇妙な運命が待っていることを、このとき知る人はいなかった

「誰か来てくれ！マゼラだけじゃくい止められねえ！」

「救護班、早……ウオオオオッ！」

「モビルスーツ！？連邦の白い奴！？たくさんいるぞ！」

「ドムはどうした！？最新鋭機ならなんとかなるだろう！」

「ダメです！反応、全機ロストしてます！」

「へっへっへ……最高だぜこりゃ！」

今まで俺たちはジオンの奴らに好き勝手やられていた。あれもこれもジオンのせいだ。アイツらがこなければ俺は恋人を失うことも、妹が怪我で植物状態になることもなかった。俺たちは、ジオンのザクにはなすすべがなかった……目の前のすべてを奪われて絶望していた……。あいつらは悪魔のようだった。それがどうだ！今、このジムが実戦投入されてからは！ジオンの奴ら俺たちを見ておびえてる！新型機だってビームを何発か撃ってやったらすぐに動かなくなった。ざまあない……。ざまあないぜ……。！？

それがその連邦兵の最後の思考だった。なぜなら次の瞬間にはコックピットはバルカンで粉みじんになっていたのだから。

RGM-79 GMは、かの有名なRX-78ガンダムを基に、設計・武装の簡易化が図られ量産化に成功した機体である。

その特長は、量産機でありながら初めてビーム兵器を標準装備として搭載したこと。（陸戦型ガンダム、陸戦型ジムと呼ばれる機種を

除く)

主兵装である、ビームスプレーガンは、ビームライフルより威力は落ちるもののジオン公国軍の兵器に対しても有効であった。

ほかに、簡易化の際に本体の装甲材質が何ランクか下げられており、耐久性はガンダムに劣るという点があげられるが、完全にデメリットではなく推力比の問題などで機動性など、一部の性能は基であるガンダムを超えている。(細かいところで言えば頭部バルカン砲の装弾数も上がっている。)

ただ、パイロットの腕の問題でその機動性が活かしきれていなかったとも記録に残っている。

最終的には数多くのバリエーションや後継機が生まれ、連邦軍の戦力の中枢を担っていく傑作機である。

「おらおら、エース様のお通りだあ！」

連邦の似非モビルスーツにバルカンを撃ちこんだら動かなくなった、コックピットに直撃したようだ

「ルイス、キャノン砲あの虫どもを吹き飛ばしちまえ！」

「もう準備できてますよ隊長！喰らいやがれ！」

ジュアッグの砲撃で前方にいる61式戦車6両が吹き飛ぶ、全弾命中だ！

「へへっ、アイツら大したことないっすよ！動きがなっちゃいねえ！」

そう言いながらゾゴックに乗る、ケビンがワイドカッターで似非モ

ビルスーツを切り刻む

「俺の獲物、ちゃんと残しといてくださいよ！おらぁ！ドリルは漢のロマンなんだよ！」

最後に残った一機に攻撃したのはアッグに乗るジロウ、いつもは冷静なんだが……

機体性能自体はそれほど良好ともいえない4機なのだが、パイロットの腕でカバーされている。

機体のデザインが奇妙なこともあり、連邦軍はその姿を見て恐怖したという。

「すごい……連邦が後退していく……」

「ガウを準備しろ」

「え？司令、まだ彼らが……」基地に残っている者を集める。ガウを使って離脱、この基地を放棄する！」

「彼らは駒のひとつにすぎんだよ……」

「隊長！ガウが！」

「あいつら……！俺たちを罠にしゃがったな！」

「あの、ハゲ親父！やりやがったな！」

「隊長！囲まれました！」

「な！？……」

「隊長！！」

似非モビルスーツがビームを撃ってきた時、俺たちは光に包まれた

「モビルスーツが……消えた！？」

衛星軌道上

「中尉、そしてヨーツンヘイム、聞こえるか？」

「モビルスーツ・ヅダはもはやゴーストファイターではない。
この重大な戦局で確かに戦っている・・・この独立戦争で厳然と存在しているのだよ。」

「この歴史の真実は・・・何人たりとも消せない・・・」

「これは・・・！！？」

「・・・軌道上で幻影は光の中へと消えていった・・・」

8・5話 幻影は光に消える（後書き）

アッグシリーズ登場です。

この機体たちは、作者がプラモデルを買いに行った時に偶然見つけたことで、お気に入りになった機体です。

本当は、ガンダム00のティエレンというMSのプラモデルを買う予定だったのですが、アッグシリーズに魅せられて、その予算で店にあった四種類をひとつずつ購入しました。

ツダファンの皆様、申し訳ありませんでした。

ツダですが・・・この話ではあまりスポットライトは当てませんでした、その機動性をISの世界で活かして行く予定です。

オリジナルキャラ 設定（前書き）

オリジナルキャラの設定です

機体の説明は別にして投稿します

オリジナルキャラ 設定

名前：桐岡 柚

性別：女

IS学園の一年生。クラスは3組。成績優秀であり、明るい性格もあり教師からの評判も良い
元々は男嫌いだが、イベントでソンネンに助けられたときに、好意を抱くようになる。

専用機は持っていないがISの操縦技術は高い。

趣味はお菓子作り

名前：ミハエル・ジェンキンス

性別：男

ヒルドルブの整備兵。ソンネンの親友の一人

日本文化を誤って解釈しており、いろいろ間違った知識を広める
シュヴァルツェ・ハーゼのクラリッサ大尉とは仲がよく、日本の漫画やアニメについてよく会話している

気があるのかと思いきや、本人いわく、マヤマヤが一番！だそうだ

名前：リチャード・ハンクマン
性別：男

ジオン公国軍のパイロット、階級は中尉。愛機はアッゲガイ。少し前はアッガイに乗っていたらしい。
お調子者であり、女癖も悪い……。自称スーパーエース。
本人いわく格闘戦が得意らしい。

名前：ルイス・カーター
性別：男

ジオン公国軍のパイロット、階級は少尉。搭乗機はジュアッグ。
元はジオニックのテストパイロットをしていた。モビルスーツの技術に詳しい
お調子者だが、実は戦況を常に把握している。

名前：ケビン・レイサス
性別：男

ジオン公国軍のパイロット、階級は軍曹。搭乗機はゾゴック
隊の中では最年少である……。が、実は精神年齢が一番高い（本人談）

説明するほど特徴がないのが特徴

名前：ジロウ・サトナカ
性別：漢（男ではない漢なんだ！と主張している）

ジオン公国軍のパイロット、階級は准尉

隊の中で唯一無口で、女性にも興味がなさそうである……が戦闘になると周りが引くほどにやかましくなる。

本人曰く、女性に興味がないのではなく、パソコンの中に嫁がいる為、もう足りているとのこと。

彼にはグフが支給される予定だったのだが、本人が断り、アッグを支給してもらったらしい。

ドリルは漢のロマンなんだとか……………

オリジナルキャラ 設定（後書き）

人物設定は難しいですね

なかなか魅力のあるキャラにならないです（汗）

9話 異世界の巨人達 前編（前書き）

臨海学校の話です

前後編に分けて投稿します

前編は戦闘はあまりせず、後編は戦闘シーンが主体になります

9話 異世界の巨人達 前編

「隊長……うまくやってますね。アドバイスした甲斐がありました！」

「おお！萌えるね、あれなら男は誰でもイチコロですよ！同志クラリツサ！」

「ソンネン少佐！アレなら織斑一夏でも一発でしょう！」

「あ、ああ……そうだな……」

双眼鏡の先には、かなりはりきった水着のラウラ少佐がいる。織斑一夏にアプローチをかけるためだ。

水着というのは女性が、想いを寄せる男性にアプローチをかける手段のひとつである。

いわゆる勝負水着というものだ。水着の色だけでも印象はかなり変わる……らしい

俺たちは今、臨海学校の近くにいる。もちろんIS学園に許可は取った。この前の無人ISを警戒してのことだ。

「あああ！？お、織斑一夏が！？」

「どうした！？無人ISか？」

見ると、織斑一夏が……前にショッピングモールで見た、セシリアという生徒にサンオイルを塗っていた

『クラリツサ。こういう時はどうすればいいのだ？やはり……胸がないとダメなのだろうか……？』

ラウラ少佐からの無線だ

「ふむ……」

俺とクラリツサは考え込む……どうすべきか……

「こついう時こそ、日本の伝統文化、萌えの力を使うべきでしょう！」

突然ミハエルがそう言った。

「あの年頃の日本男児に効果的なのは、メイド服、ネコミミ、姉、妹キャラ！この中でもラウラ少佐は妹キャラとネコミミにピッタリ！織斑一夏も一撃で轟沈します！」

『本当か！？』

「なるほど、流石は同志ミハエル……ネコミミ妹キャラとは……」

「……」

最近こいつらの日本の知識は間違ってるんじゃないかと思うんだが……気のせいかな？

ソンネン少佐は自分も間違った知識を持っていることに気づいていない。

人間、案外他人の変なところはすぐに分かってても、自分のことに気づかないものなのだ。

「今からこの、ネコミミカチューシャを送ります！作戦は簡単、ネコミミを装備した後、織斑一夏に「ら、ラウラにも塗って欲しいニヤン……一夏お兄ちゃん」と言うだけです！それだけで轟沈します！」

ネコミミカチューシャをカバンから取り出し、ダンボールをかぶっ

てからラウラ少佐に渡しにいくミハエル

「これで、OKですよ．．．あとは、織斑一夏がどう出るか．．．」

戻ってきたミハエルがそう言った。なにがOKなのかさっぱり分からん……

俺の勘だと……この作戦……

「一夏！次はあたしも！」

「わかった、わかったよ鈴。次は鈴の番な」

• なんなんだよみんな、サンオイルぐらい自分で塗ればいいのに・・・

鈍感な少年は、今日もその力をフルに発揮している。

「い、一夏……少し頼みが……あるのだが……」

「なんだラウラ？・・・え？」

なんだ？・・・俺の知ってるラウラはネコミミなんて生えてなかったぞ？

「い、一夏……お兄ちゃん……ラウラにも……」

「！！！！！！」

「なにをしている？ 貴様ら」

「ふ、不潔ですわ！一夏さん！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんだろう、これは非常にまずい気がする・・・・・・・・シャル・・・・・・・・無
言でにらんでくるのメチャクチャ怖いからやめてほしい・・・

「一夏・・・・・・・・アンタ・・・・・・・・あたしにあんたことやこんなことをし
たのにラウラとも・・・・・・・・」

「誤解だ鈴！？それとその危ない言い回しやめてくれ！周りからの
視線が大変だから！」

「一夏は私の嫁だ！一夏は私のような妹が大好きなのだ！証拠もあ
る！」

冷たい・・・・・・・・みんなからの視線が・・・・・・・・冷たい・・・・・・・・

「作戦は成功、織斑一夏は確実に混乱している！」

「さすが同志ミハエルの作戦だ！」

「・・・・・・・・」

絶対に成功していないだろう・・・・・・・・成功していたとしたら、な
ぜ一夏がISで攻撃されているか説明がつかない

その後も一夏には災難ばかり降りかかっていた。
苦勞してるんだな・・・・・・・・アイツも・・・・・・・・

「あれ、ソンネンさん？こんなところで何をやってるんですか？」
イベントのときの少女、柚が話しかけてきた。

「今は任務中でな・・・前の無人ISのこともある。警戒はしておいたほうがいいからな・・・」

「そうですか・・・あまりみんなの水着姿見ないでくださいよ？
じゃあ、任務、がんばってください！」

すぐに柚はビーチバレーをしている生徒たちのもとに行った。任務の邪魔をしないように気遣ってくれたのだろうか？水着は・・・一応確認したが・・・

「なんでこんなところにソンネンさんが・・・勝負水着着てくればよかった・・・」

一人の少女はそう思いながら、自分へのいらつきをボールにぶつけていた・・・

2日目、ISを作った天才、篠ノ之束が織斑一夏に接触、篠ノ之箒に新型機を渡しに来たようだ

その後、アメリカの軍用ISが暴走、この近辺を通過するとの連絡が入った

ISの対処は軍がすることになったのだが・・・

「そうですか、今回の作戦には我々、シュヴァルツェ・ハーゼが参加する予定なのですが・・・」

「ふむ・・・ラウラ少佐が出ると知ったら・・・きっとあいつらも・・・」

「ソンネン少佐！緊急連絡！IS学園の生徒が無断で出撃をしたとのことですよ！」

「なんだと!？」

「あれが福音か・・・でももう何かと戦っているみたいだぞ？」

ハイパーセンサーで攻撃先を見る。何かに向かって攻撃をしているようだ・・・攻撃の先は・・・海？

「あ、あれ？センサーが・・・」

「どうした？シャル？」

「なんかセンサーが不調みたいなんだけど・・・」

「ん？俺もだ・・・なんでだ？」

センサーがエラーを出している。不調かもしれないけど・・・他のみんなもそうみたいだし・・・なにかおかしい。福音も混乱しているようだ。

それがミノフスキー粒子の影響であることは一夏たちは知らない

「とにかく、福音に攻撃を仕掛けよう！」

俺は白式を加速させる。

俺が攻撃範囲に入るためにシャルと箒、セシリアが援護する形をとっている。

福音の動きが止まった。いける！

「うおおおおおおッ！！」

零落白夜を発動させた俺は福音に斬りかかろうとする・・・がその時、福音が爆発した

これは明らかにセシリアたちの攻撃じゃない。驚いていると、上から何かが接近して来ていることに気づいた。

「みんな気をつける！福音以外にも何かがいる！速いぞ！」

ハイパーセンサーが上手く機能しないが、巨大ななにかが近づいてきているのは分かる。かなりの速度だ

そいつは福音がいる場所に銃撃を浴びせる。マシンガンか？それにしては弾が大きすぎる

『まさか、人が空を飛んでいるとはな！私は幻覚を見ているのか？・・・君たち、ここは一体どこなのかね？』

現れたのは、青い色をした巨人だった・・・

9話 異世界の巨人達 前編（後書き）

技量不足がそのまま出てきてる感じが・・・
こんな調子で戦闘シーン・・・ちゃんと書けるのか？

小説はヒルドルブがメインなので、モビルスーツたちがこの世界に
どう影響するか・・・そろそろ、あの人が動き始めます

9話 異世界の巨人達 後編（前書き）

投稿が遅くなり、本当に申し訳ないです。

時間がかかったわりに、文才の無さで戦闘描写も上手く書けなかったと思います。

本当に、申し訳ありませんでした

9話 異世界の巨人達 後編

「デュバル少佐・・・デュバル少佐！」

「う・・・ここは？・・・フランツ？なぜこんなところに・・・？」

光に包まれたような空間の中、私はツダのコックピットに居た。

目の前のモニターには、部下であったフランツのEMS04が映っている。

彼はもうこの世にはいない存在なのだ・・・・・・ということは私も・・・・・・

「フランツ・・・私は・・・ツダが、確かに存在していたことを証明できた・・・もう悔いはない・・・」

「何を言っているのですか！デュバル少佐！少佐は・・・ツダはまだ戦えます！まだ、ツダの性能を証明することができるんです！」

「しかし、ツダは・・・結局デゴマークに敗れた・・・これから性能を証明しても・・・」

「ツダの性能を必要としている場所があるんです！・・・もう、時間が・・・デュバル少佐・・・気をつけて・・・」

フランツの乗るEMS04は、光の粒子となって消えていった。そして、デュバル少佐の乗るツダもまた、光の中へと急加速を始めた。「な、なんなのだ・・・これは・・・この光は・・・」

光を抜けるとそこには、空が広がっていた。見たところ海上のようで、陸地は見当たらない。

「ここが・・・フランツの言う、ヅダを必要とした場所なのだろうか？む！？武装がすべて揃っている上に、エンジンの出力も上がっているようだな・・・フランツ、感謝するぞ」

ヅダの装備は、手持ちの武器に120ミリマシンガンと、腰にマウントされた240ミリバズーカ、予備のマガジンと135ミリ対艦ライフル、ヒートホーク、シールドにマウントされたシュトゥルム・ファウストと、本来運用方法としては想定されていない重装備である。

それ以上に驚くべきところが、これほどの重量の装備を持ちながらも、大気圏内で単機での飛行能力があるところだ。

もともとヅダは宇宙空間での高機動戦闘を想定した設計の機体であり、大気圏内での飛行能力などは持っていなかった。

そもそもモビルスーツ単体での飛行は、一年戦争中ではグフフライトタイプなどの一部の特殊な機体しか実現しておらず、その全てが試験的なものとどまっている。

「まずはここがどこなのかを知る必要がある・・・ヅダよ、もう一度その力を借りることになったな・・・」

私は、再び共に戦うことになった愛機の操縦桿を強く握り締めた。

「おいおい、ここはどこだ？」

アッグガイのコックピットで目覚めた俺は、機体が居る場所が海中である事に気づいた。

「隊長！目が覚めましたか？・・・どうやら我々は知らない場所に居るようです・・・」

「ルイス、無事だったか！他の奴らは？」

「現在、周辺の偵察に出ています！いったいここはどこなんでしょうか？」

「俺に聞くなよ。大体、陸に居たのに、海んなかで目が覚めること自体おかしいだろ！連邦の雑魚はどこいったんだ！」

「隊長！偵察に出てみましたが、陸地は見つけたもののここは我々の居たオデッサ周辺とは違う場所のようです！見知らぬ建造物を撮影してきました。」

そう報告するケビンとジロウ、その写真の建物はオデッサにあるものとは外観が全く違う。

「とりあえず俺たちは良く分かんどこに来ちまったみたいだが・・・俺たちの実力があれば切り抜けられるだろう。まずは陸地に向かって拠点の確保だ！その後、友軍と連絡を取るぞ！」

「隊長！海上に何か居る！！」

ジロウがそう言ったその時、上からとんでもない数の攻撃が降り注いだ

俺達はそれを全部回避する

「敵影、確認！鎧を着た人間見たいな奴が空飛んでる！」

「馬鹿ヤロウ！こんなときに冗談言っんじゃないやねえ！」

俺はそう言った後、メインカメラで上を見る、すると空中にはジロウが言ったとおりのような奴が居る
連邦の新型か？

「ルイス、あんなハエ撃ち落としちまえ！攻撃しろ！」

「よし、悪く思ふなよ！発射！」

ジュアッグからロケット砲弾が発射される・・・しかし、それをあいつは簡単に撃ち落としした。

「なんて野郎だ！全員で一斉射撃をかけるぞ！」

突然水中から撃ち出されたバルカン砲に対処できなかったのか、別方向からのジュアッグの砲弾が直撃した。

目立った損傷もないようだが、突然アンノウンは動きを止めた。駆動系がイカれたのかもしれない。

「やったか！・・・・・・上空に友軍反応？ジロウ！確認できるか？」

「EMS10ツダ・・・・・・最近発表された新型機だ！助かったぞ！」

そう言ったジロウ、その機体は基地の放送で見たことがある

「おお、ラッキーだな！すげえな・・・ツダだっけ？アレ空飛べんのか！？」

部隊でただ一人、ケビンだけ考えていた。いくら新型でも単機で飛行しているのはおかしいと・・・・・・

「友軍の反応・・・私以外にもここに来ている人間が居たのか！友

軍機、聞こえるか！」

まさか他にも来ていたとは……反応からして試作型の水陸両用モビルスーツのようだ

『助かったぜ！……ってそんな場合じゃねえ！アンノウンが攻撃を仕掛けてきた！気をつける！』

モニターを見ると、人間より少し大きい鎧のようなものが飛んでいた。

「目標確認！『別方向より接近する機影あり！』」

目標に向け、攻撃を仕掛けようとした時、友軍のアッグから別方向から新たにアンノウンが4機向かってきているとの通信があった。

新たに現れた4機はアンノウンに攻撃を仕掛け始めた。こちらの存在には気がついていないようだ。

おそらく、最初からいたアンノウンとは別の勢力なのだろう。

もうひとつ、その四機は頭部と胴体が人間そのものであることが分かる。それも、10代後半ぐらいの少年少女だ。

うまく言えば協力してこの場を切り抜けることができるかもしれない。

「人間だと！？……新たに現れた4機は、アンノウンとは別の勢力のようだな……これから接触を試みる！水中の部隊は万が一の場合に援護を！」

『分かったぜ！しくじるなよ！新型機』

シールドにマウントされているシュトゥルムファウストを発射し、120ミリマシンガンで追撃をかける

うまく動けないのか、アンノウンは動きを止めた……反撃をしてくる様子もないようだ。

私は驚いた様子の少女たちの前に降下する。

「まさか、人が空を飛んでいるとはな！私は幻覚を見ているのか？
・・・君たち、ここは一体どこなのかね？」

接触を試みながらも、警戒は忘れない。相手が少年少女でも兵器を持っているのだから油断はできない。

目の前の少女たちは、なにかを相談し始めた。協力できればいいのだが・・・

（なんなんだよ、このでかいロボットは！？）

一夏の目の前には一昔前のアニメに出てきそうな見た目のロボットが居る。

驚くのがその大きさと推力だ。

20メートルはあろうかという大きさのロボットが作られているという話は聞いたことがない。

小型高性能のISが主流の今はそんな大型兵器は作らないからだ。

ISの前ではそのような大型兵器は最近現れた一部の例外を除いてマトになってしまう。

そして、目の前にいるロボットはその巨体からは想像できないほどの推力を持っている。

20メートルもあるロボットが空を飛び、自由に空中戦をこなすというのは一夏たちから見れば異常である。

目の前のロボットは人が操縦しているようで、敵意があるようにも見えない。

「敵意は、ないみたいだな。俺、ちょっと話をしてみる」

「一夏！それ本気！？あんな威力の攻撃を受けたら……」

「大丈夫だ！シャル、俺を信じる！必ず鈴のもとに戻るって約束したからな！」

「一夏……」

「あの、ロボットさん！あなたは、俺たちの味方ですか？」

「おお……言葉が通じる相手だったか！我々には敵対の意思はない。……また動き出したか！」

動きを止めていた福音が再び動き始めた。その場に居た全員が、福音からの攻撃をあわてて回避する。

「また動き始めたか！速いぞ！」

「おい、新型！大丈夫か！？」

「問題はない！あの4機には我々と敵対する意思はない！ターゲットはあのアンノウン一機だ」

『了解！よし、あの一機に集中攻撃だ！』

まずは水中の部隊による射撃でアンノウンに回避行動を強制させた。アッグガイのバルカンとジュアッグのロケット砲の弾幕をすり抜けるように動くアンノウン。

アンノウンはかなり大げさな回避行動をとるが、圧倒的な機動力を持っており、攻撃が当たるような隙がない。

「うむ、先ほどよりもアンノウンの動きが良くなっている！だが、このツダの速さについてこられるかな？」

『なにをするんですか！？そんなロボットじゃISの機動性には！』
マシンガンで攻撃をかけている少女がそう叫んでいる・・・たしかにアンノウンの火力、機動性、装甲・・・すべてにおいてツダを上回っている。しかし！

「貴様の動きは読めた！」

マシンガンの空になったドラム式マガジンをアンノウンに投げつける。

するとアンノウンは向かってくるマガジンを回避するために右に大きくロールした。

マガジンに240ミリのバズーカを発射し、煙でアンノウンの視界を奪った。

センサーには飛んでくるマガジンが映っている。
素早く軌道を割り出し、回避行動に移る。
次の瞬間、マガジンが粉々になり、煙と破片で視界がさえぎられた。
そして、高威力の射撃を受け、エネルギーが大きく削られた。

135ミリ対艦ライフルを受けたアンノウンは動きを止めている
「うむ、対艦ライフルの威力は絶大だな。『ああっ！福音が！？』
なんだと……」

見ると、アンノウンの外見が変わっている。

「一夏さん！下がって！……あああっ！？」

『セシリア！』

4機のうちの一機がアンノウンから発射された羽に当たり、落下していった。

先ほどの攻撃とは速さと威力がケタ違いだ。

もう一機がそれを受け止めようと加速をかけているが、それをアンノウンが狙っていることに気がつかない。

「攻撃が、間に合わん！」

私が今から攻撃しても間に合わないだろう。しかし、ほんの少しの可能性にかけて、対艦ライフルをアンノウンに向けて発射した。

落下していく機体を受け止めたところにアンノウンの攻撃が迫ろうとしたとき、突然アンノウンが爆発した。

人が操縦していたようで、爆発の中から女性が放り出されていた。

それを、べつの2機の 空飛ぶ少女 が受け止める。

「これは……奇跡……というべきだろうか……？」

目の前の現象、そして……近くの陸地からの友軍反応……YM

T05と表示されている光景に、私は奇跡と言つものを信じたくなかった。

「おいおい、これは冗談か？・・・まったく・・・厄介なことになりそうだな。」

福音に狙撃をしたヒルドルのモニターに映し出されているのは、この世界に存在するはずのないジオンのモビルスーツ。

先ほど福音を狙撃する時に突然現れたが・・・まさか、アイツも俺と同じように・・・

とにかく、厄介なことになるのは確実だろうな・・・これから忙しい毎日が続くか

そう思いながら俺はため息をついた。

9話 異世界の巨人達 後編（後書き）

今回は、戦闘描写も上手く書けず、投稿も遅くなり本当に申し訳ありませんでした

今回、登場したツダとアッグシリーズは、ISと戦闘できるぐらいに性能をいじっています。ヒルドルフのように、一撃必殺の火力を持っているわけでもなく、戦わせる上でツダは特にISと同じ土俵・・空中戦をさせる必要があったので・・・それよりもミノフスキー粒子が反則過ぎるのですが・・・

これからモビルスーツとモビルタンク、ISがどう絡んでいくか・・

さて、後書きで書くようになってきた作者の失敗談（？）

・
今回は2日前にあった文化祭・・・そこで体験した怖い話です・・

私のクラスは、文化祭で喫茶店をやっていました。

メイド喫茶とかそういったものではなく、何人かグループを作って出し物をして、それをお客様がジュースを飲んだり、おしゃべりしたり、P Pでゲームをしたり（笑）しながら見るというものでした。

私のグループは、順番にアニメキャラのモノマネをするということになっていました。

グラム・エーカーや海馬瀬のモノマネが好評の中、ついに私の番になりました

この日まで練習に練習を重ね、親友には本物と見分けが付かないとまで言われたこのモノマネ……これなら……勝てる！

そう思いながら私は必殺のモノマネをしました。

「てめえなんざ！一発あれば十分だああ！」igloo2話のフェデリコ・ツアリアーノさんのモノマネ

ウケたな……。これで勝てる！……。そう思っていた時期が私にもありました

しかし現実には甘くはなかった……。観客はシラけ「なんのモノマネ？」「気合入れすぎでしょwww」「なんか怖い」と心に突き刺さる言葉の数々……

みなさんもモノマネには気をつけましょう……。あの突き刺さる言葉のダメージときたら洒落にならないほどのものです。連邦軍が首と足があるモビルスーツを開発したこと以上の衝撃を受けること間違いないです。

こんなダメな作者ですが、次回の投稿が遅くならないよう、精一杯努力していきますので、これからよろしくお願いします。

10話 疑問（前書き）

お待たせしました。

遅くなり、申し訳ないです。

今回はかなり核心に迫りそうで迫っていない（汗）なんだか最後の部分も微妙な仕上がりになってしまいました。

今回は戦闘は無しですが、あと4話のうちに急展開と因縁のアイツが出てきます。

文も下手で更新も遅いダメな作者ですが、これからどうぞよろしくお願いします。

10話 疑問

突然福音との戦闘に介入してきたモビルスーツ。

そのモビルスーツのパイロットはテントで事情聴取を受けている。

目の前にいるパイロットは5名、青いモビルスーツ【EMS10ツダ】のパイロット1名と、まるで怪獣のような外見のモビルスーツのパイロット4名。

あの戦闘の後、シュヴァルツェ・ハーゼの隊員たちの指示に従ってもらい、事情を説明してもらおうということになった。

素直に指示に従ってもらうことができ、トラブルを回避できたのは幸いだった。

上層部に、彼らも俺と同じ【訳あり】であると報告したところ、外部に情報が漏れないようにと配慮してくれとの事であった。

今回の事情聴取はもとも彼らと同じ世界の人間である俺が行っている。

元ジオン軍人の俺なら、彼らとコミュニケーションもとやすいだろう。

外部へ情報が漏れることのないように、このテントにはモビルスーツのパイロット達と俺、そして俺の境遇を知っているミハエルしかない。

ISの関係者に知られるといろいろとまずいのだ。
未知の兵器の出現だけでも混乱しているというのに、それが異世界のものだと判明したらどうなるか……

なお、普段は内緒にしているが、目の前のパイロット達には俺がこの世界の人間ではないと伝えてある。

ジオンの階級章を見せると信じてもらえたようで、情報を交換するのも簡単だった。

「しかし、驚いたものですな……まさか、ソンネン少佐も同じ境遇だったとは。この世界はISという兵器によって女尊男卑の風潮が出来上がっていることに世界の違いを感じさせられる。」

俺とヒルドルブが消えたあの日……コムサイの戦闘記録にその瞬間が記録されていたらしく、その記録を見たとおるお調子者の中尉が話を広めたらしい。

それを603で偶然聞いたのが、蒼いモビルスーツ……ツダのパイロットである、ジャン・リュック・デュバル少佐

どうやら、デュバル少佐はSFのようなその出来事に興味を持ったらしく、情報を集めていたとの事。

「俺も最初は信じる事ができなかった……だが、あんな兵器（IS）を見たら信じないわけにはいかんだろう？」

「あの兵器を見たときは驚きを隠せなかった。あの大きさであの火力と装甲、機動性を実現するとは……この世界の技術は相当進んでいる。しかし……あのような子どもが戦闘を行うとは……」

「デュバル少佐は少年少女まで戦闘を行っていたことに胸を痛めているようだ。」

一年戦争にも少年兵は存在した。地球連邦軍はルウム戦役などで正規の軍人のほとんどが戦死してしまったため、戦力不足を補うために、各地で10代半ばの少年少女が戦場へとかりだされていたのだ。ISはあくまでスポーツ。

少年兵とは違うと主張されているのだが……

確かにISはスポーツ感覚でやるものなのかもしれないが……俺もあいつらが戦闘を行うことが良いことだとは微塵も思っていない。ISも兵器だ……いつ何があってもおかしくはないんだから……

「そうだな……スポーツ感覚で兵器を扱ってれば、いずれあいつらも……それより、デュバル少佐も俺と同じように光に包まれてこつちに來たと聞いたが……」

「ああ、戦闘中に光に包まれて、気づいたら海上にいた。状況はリチャード中尉たちも同じようだが……私が調べていた限りだと、あの戦闘記録を見て、光に包まれる前にヒルドルブがプラズマのようなものに覆われていたということがわかったのだ。これは、我々が引き起こした問題かもしれないのだよ。」

「……どうということだ？」

「なにか強力な磁場が発生して、我々を機体ごと空間の歪みに巻き込んだのではないかというのが私の見解だ。その磁場を発生させる原因として調べていたものがあつたのだが……それが、我々の世界に存在するミノフスキー粒子だ。あの粒子の効果は未だに解明されていない部分がある。レーザーを無効化する以外にも、ミノフスキークラフトで物体を浮かせることも可能……ならば、空間を歪ませるほどの強大な力を発生させていてもおかしくないだろうと私は考えた。」

「ほう……」

これは説得力のある説かもしれない。

ミノフスキー粒子は確かに強大なエネルギーを生み出す。

それを応用したミノフスキークラフトが、ジオン公国軍が開発した【アプサラス】にも搭載されている。

普通なら浮くはずのない巨体を浮かせるほどの力を持っているのだ。空間を歪ませていてもおかしくはないのだ。

しかし……

「なら、どうして俺たちの機体は新品同様のピッカピカ。おまけに性能が底上げされてんだ？ちよつとおかしくないか？」

今までミハエルとメイドの話をしていたりリチャード中尉がそう発言する。

確かにおかしい。ヒルドルブも新品同様になっていたし、ツダは性能が別物なのだ。

空間の歪みが原因なら、そんなことはないはずだ。

「ますます分からなくなつたな……」

俺はため息をつきながら、リチャード中尉の部下であるジロウ准尉の私物のマンガを手取る。

向こうの世界……俺がもっていた世界のマンガだ。俺はあまりそういったものを向こうであまり読んだことがなかった。そういった意味で興味があつたのだが……

『萌えもえ魔法少女く黙示録』

よくもまあ戦争中にこんな本を……案外ジオンは資源が有り余つてたんじゃないのか？

ストーリーは、普通の女子大生の父親、ボビー。彼は転生者で、もといた世界では軍人だった。彼が、自分の娘が魔法少女だったり、妻が悪の組織の親玉だったりするのに気づきながら普通のサラリーマンとして暮らすほのぼの系アクションストーリー……らしい。

「ジロウ准尉……このマンガは……」

あまり面白くない……俺はそう言おうとした。

「これだ！！」

「……なにが!?」「……」

いきなり大声をあげたミハエルに全員が反応する。

いきなり大声をあげるとは……いったい何があったのだろうか?

「なにがって……転生ですよ、転生!このボビーさんみたいに
ソンネン少佐たちは転生してきたんじゃないんですか?転生ならチ
ートスベックにも説明がきますよ!」

「確かに……チートオリ主……俺の夢……」

意味の分からないことを言うミハエル……ジロウ准尉、お前は
その説を信じるのか!?

「オリ主と転生者は今はデフォルト……この前同志がリカ
ルな世界に転生したって書き込んだ……」

「それは冗談だよな!？」

ツッコむケビン軍曹……確かに……本当に冗談だよな?

「む?待てよ……我が同志ジロウよ。」

「なんだ?……戦友ミハエル……」

いつのまに仲良くなった?といたいところなのだが……ミ
ハエルがなにか気づいたらしい。

「リカルな　はは向こうの世界にもあるのかい?」

「ある……!?……そういうことか……」

よく分かんが、驚くジロウ准尉……そうか!

「向こうの世界とこちらの世界に、同じ作品が存在しているとい
うことか!」

俺は思わず大声をあげてしまった。デュバル少佐やリチャード中尉
も気づいたようだ。

「これは大きな発見だな。もしかしたら他にもあるかもしれませ
んぞ。」

「よし!他にもなにか共通点がないか探そうぜ!」

その後、インターネットなどを参照して全員で共通点を探した結果・
・・

・アニメやマンガ、小説が同じものがある（ただし女性キャラが主人公になっている物のみ）

・歴史上の人物（戦国武将など）

・歴史上の事件や出来事

など、共通点がかなりあった。

その結果、あるひとつの結論に至った。

「パラレルワールドという奴か・・・本当に存在するんだな。」

「ソンネン少佐、これは大発見ですよ！・・・でも、みんなに知られるわけにはいきませんね。マヤマヤや同志クラリッサにも、本当のことを知らせることはできない。」

普段女性には絶対に？をつかないと言い張るミハエルも、今回ばかりは隠し通してくれるようだ。

いつもとは違い、真剣な表情をしている。

「ミハエル殿。我々をドイツ軍の所属にすることは可能なのかね？」

「え？」

デュバル少佐の突然の発言に驚くミハエル。少し考え込んでから、なにやら上層部へと書類を送っていた。

「我々には行く宛てもない。そちらとしてもモビルスーツをほうっておくわけにもいかないだろう。そこで、我々がドイツ軍に入れば、モビルスーツはドイツ軍の新型として発表でき、技術が手に入る。我々は衣食住の確保ができる。いい取引だと思わないかね？」

俺とミハエルは互いにうなずき合った。答えはもう決まっている。

「ようこそドイツ軍へ。あなた方を歓迎します。」

ミハエルがデュバル少佐へそう返答する。

「ありがとう。感謝する。」

デュバル少佐とミハエルが固く握手を交わす。

「記念にパーティーでもやろうぜ！これからは仲間だし！」

ルイス少尉がそう提案する。

「ああ、そうするk「少し、話を聞かせてもらおうか？」織斑・・・千冬？」

突然テントの入り口から入って来た織斑千冬。警備の兵が倒れているところを見ると、何があったのかは容易に想像ができる。

「申し訳ありません。ソンネン少佐」

織斑千冬に続いてテントへと入ってきたクラリツサ大尉。

まさか……。ISの機能を使って遠くから盗聴していたのか！

「どうして……。どうして黙っていたんです！ソンネン少佐までいなくなったら……。私は……。っ」

いつもなら百戦錬磨の戦士を思わせる織斑千冬……。いつもの威圧感はなく、その力強い瞳には涙が浮かんでいた。

クラリツサ大尉が俺に小さな声で【ある事】を伝えた。そうか……

・織斑千冬は……

俺がこれからすべきことは……。いったい何なのだろうか？

10話 疑問（後書き）

最後、千冬さんがとんでもないキャラ崩壊をしてしまいました。
千冬さんと一夏の過去がこれからの展開に関係していきます。

この小説の展開はどうなっていくのか！

という感じに次回予告・・・できればいいなと思います。

11話 変化（前書き）

本当に申し訳ありませんでした！

早く投稿すると言っておきながら相変わらずの遅い投稿です。
遅い投稿のわりに文章も下手ですし・・・・・・

こんなダメ作者の書く駄文なのですが、次話へのアンケートをあとがきに書いておきます。

読者の皆様の感想やご意見・ご要望等ありましたらお願いします。

11話 変化

「どうして……どうして黙っていたんです！ソンネン少佐までいなくなったら……私は……っ」

織斑千冬と一夏は両親に捨てられ、家族がいなかったことは、以前一夏から聞いた。

クラリツサ大尉が言うには、おそらく織斑千冬は皆が思っているほど強い人間ではないということ。

世界最強といわれる織斑千冬……普段は強い人間を演じている。両親がいない状況で一夏の面倒を見ていた彼女は、幼い一夏に心配をかけないように強く振る舞っていた。

しかし、本当はどうか？

本当は家族にもっと甘えたかったのではなかったのだろうか？

自分を受け止める存在を求めていたのではないだろうか？

周りの人間が離れてゆく悲しみ……頼る人間もいない状況を見て、ただ自堕落に過ごして弱さを誤魔化した俺……俺が今できることは……

「ソンネン……少佐？」

そつと織斑千冬を抱きしめる。

「俺はお前をおいてどこかにいたりはない。それと……もう、仮面を被らなくていい。一人で抱え込まずに、他人を頼つても……いいんだぞ？」

織斑千冬は少女のように泣きはじめた……誰にも見せたこと

のなかった素顔。
俺はそれをただ優しく抱きしめていた。

ここまですが昨日の事である。今は臨海学校3日目……デュバル少佐達や福音の件もあり、臨海学校は中止になるかと思っただが……あの織斑千冬がなぜか責任者に頼みこみ（脅しの間違いでは？）3日目も臨海学校は続けられることとなった。

その後、デュバル少佐たちはドイツ軍本部へと向かった。俺のこともあるし、彼らなら心配ないだろう。

IS学園の生徒達は喜んでいたりとしていたようだが……俺はというと……

「いや、ソンネン少佐。見直しましたよ！まさか『お前をにおいていたりはしない……』なんて愛の告白をするなんて！」

昨日の発言をいつものコンビ（ミハエル&クラリッサ大尉）にからかわれていた。

「ミハエル……だから、それはだな……」

昨日、織斑千冬に言った言葉……思い返すと、とんでもないことを言っていたことが分かる。

本当に告白のようなことを言ってしまったのだからどうしようもない。

そのことがネタにされて今もこうしてミハエルにからかわれているのだ。

「男らしい告白だと思いましたよ。今時珍しい……私もそんな告白をされたいものです。」

クラリッサ大尉がため息をつきながらそう言う。

確かにそうだ。この世界では男性が少し消極的なところがある。
女尊男卑とは言うが、本当のところは女性やはり頼りがいのある
男性を求めているのだ。（ミハエル談）

「確かに告白のようなことを言ってしまったのは認める。言い訳し
てもどうしようもねえからな。だが・・・」

「おお、ソンネン少佐！噂のお姫様ですよ！」

あの行動の本当の意味を説明しようとしたところ、ミハエルが大声
を出した。何事だ？

見ると、ビーチから黒ビキニを着たスタイルの良い女性が笑顔でこ
ちらに手を振っている。

「・・・見なかったことにしようではないか。日頃の疲れが
出ているのだろう。アレは幻覚だ。」

ビーチにいる一夏たちも目をそらしている。アレは幻覚だ。

こちらに猛スピードでその女性が接近してきている。ミハエルたち
はもう退避していた。現実を見た。

「どうして無視したの？」

コレは幻聴だ。そうだ、あの織斑千冬がこんなしゃべり方をするは
ず・・・いや、現実のようだ。

目の前の女性の強力なオーラは織斑千冬のものだ。一歩間違えたら
あの世行きだろう。

どうすれば、この状況を打破できるか・・・草むらから見える
あれはカンペか！？

ミハエルか・・・あいつには今度礼を言わんとな・・・

「ああ・・・いや、そうだ！お前が可愛いから、照れちまったんだ。
・・・（汗）」

言い終わってから気づいた。最初から助かる選択肢なんてなかった。

ミハエル……帰ったら覚えてろよ！

織斑千冬は震えながらこちらを睨んでいる。そして……

「ホントに！？うれしい！」

いきなり抱きつかれた。当たっている……何がと言わんが。

それに髪から心地よい香りがする。

草むらを見ると、ミハエルが親指をグッと立てていた。これは、助かったのか？

人間の心理とは難しいものだ。しかし、案外単純な部分もある。

一見ふざけているような人間でも、本当は相手の心理を見抜いた上での行動なのかもしれない。

しかし、空気を読んでいるふざけた人間もいれば、読んでいないふざけた人間もいる。

抱きつかれてから5分後ほどして、少し離れたところにニンジン型（？）ロケットが着陸してきた。

その中から出てきたのはウサミミをつけ、ヘンな服を着た人間。

ISの開発者……この世界を変えた天才、篠ノ之束……ま

さか、ヒルドルフのデータを盗みに来たか？

織斑千冬を離し、ホルスターから拳銃を抜いた。

「ちゅちゃん！助けに来たよ！そんな汚いオッサンなんか……痛い！イタイイタイッ！」

「貴様、今なんと言った？」

天才が世界最強にアイアンクローをされている。どこからか出席簿も取り出していた。

俺が出る幕はなかったようだが……汚いオッサンと言われたのには少し傷ついた。

今現在俺は34歳なのだが、30代はやはりオッサンに入るのだろ

うか。

しかし恐ろしい・・・先ほどのしゃべり方は幻聴かと思えるほどの豹変ぶりだ。

「織斑千冬・・・それ以上はだな・・・」

さすがに危ないので止めようと思う。

天才は泡を吹きはじめている。ミシミシと音を立てているのだが、大丈夫だろうか？

「千冬と呼んで。」

幻聴じゃなかった。

「ちーちゃん・・・そのオッサンに何か悪いことでm・・・あゝれゝ！」

星になった天才。地平の彼方へと飛んでいった。

あいつは一体何をしに来たんだろうか？

軍人としての勘が、なにかを伝えている。

突如暴走した福音・・・従来のISを凌駕する篠ノ之箒への新型機・・・そして、モビルスーツの出現。

これは一体何を意味するのだろうか？ゆっくり考えたいところなのだが、今は目の前の恐怖から撤退するチャンスだ。この機を逃すわけにはいかん。

「ねえ？どこに行くの？」

チャンスなどなかった。

無理やり海のほうへと連れて行かれながら思うことがあった。

ほんの数ヶ月・・・この世界に来て、俺は変わったな・・・と。

「ソンネンさん、大変そうだなあ。」

「あの千冬さんがあんなになっちゃうなんて・・・ねえ。恋の力は絶大ね。」

視線の先には、海で楽しそうにボールで遊んでいる千冬姉とソンネンさんがいる。

ソンネンさんもなんだかんだでうれしいんじゃないのか？

「まあ、ソンネンさんなら安心できるな。・・・なあ、鈴。」

「そうね。あんまり話したことないけど・・・良い人だよね。」

鈴も、ソンネンさんとは何度か会う機会があり、いろいろとアドバイスを受けたようだ。

おかげで鈴もずいぶんと可愛らしくなった。もともと可愛らしかったが。

そんなことを考えていると、横から話しかけられた。

「織斑君。ちよつといい？」

「え」と、桐岡さん・・・だっけ？」

長い黒髪の美人、桐岡さんだ。以前少し話したことがある。ISのイベントの時にはアクロバット飛行にも出ていて、ISの操縦技術は高いと評判だ。

「うん。あの状況について、ちよつと聞きたいことがあるんだけど・・・」

そういえば、桐岡さんはソンネンさんに片思いをしていたんだっとな。

イベントのときに助けられて一目ぼれしたらしい。

「いいけど・・・俺じゃあの状況をどうにかしたりはできないぞ？」

何か言おうものなら千冬姉に何をされるか分からない。

「そうだよね・・・やっぱり、私なんかじゃ・・・ダメだったんだよ。千冬さんは美人だし・・・それに、私なんてまだ子供だし。」

「そんなことは・・・」

「何馬鹿なこと言ってるのよ！あんた、ソンネンさんのこと好きな

んでしょ？ だったら千冬さんと真正面から戦ってきなさいよ！ なにもしていないのにダメだとか言わないでよね！」

「鈴……」

桐岡さんは何かを決心したような顔をした後、千冬姉のほうへと向かっていった。

「なあ、鈴。」

「ん？」

「いろいろあったけど……臨海学校、楽しかったな！」

「うん！」

「今度の休みに弾の家にでも行こうぜ。俺たちが付き合い始めたことも報告しなきゃならないし。」

ソンネンさんも誘おうかな。弾も会いたいつて言ってたし……

「桐岡、貴様は私に勝てると思っているのか？」

「正直織斑先生に勝てるとは思っていません。ですが、この戦い……逃げるわけにはいきません！」

目の前で繰り広げられる争い。

恋する乙女というものは怖い。目の前の二人は、すさまじいオーラを出している。

「そして、今回の勝負はコレです！」

なんだと……！？ ソレは、じ、人生ゲームではないか！

そんなものでなにをしようというんだ？

「貴様は、何を考えているんだ？」

「勝負は簡単です。人生ゲームで、より良い人生をおくれたほうが

勝ち。ソンネンさんとのこれからを考えて、やはり人生設計がうまくできる人のほうがふさわしいと思うので・・・」

「なるほど。・・・いい条件だ。」

はあ・・・これから苦勞は絶えないだろうな・・・

「私が、ドイツ軍特別試験隊に？」

ドイツ軍本部に来た我々は、すぐに配属先が決まった。

リチャード中尉たちはドイツ軍の特殊部隊として編成された。

そして、私はソンネン少佐と同じ部隊に配属されるため、これから日本へ向かう。

「フランチ・・・ツダの本領をこの世界に見せるときが来たぞ・・・」

「あちゃー、まいったなあ・・・ちーちゃんがあんなになっちゃうなんて・・・」

薄暗い研究室、モニターには何かの計算式のようなものと、映像が

流れている。

「それにしても危ないよねえ。束さんでも解析できない粒子があつて、それがISの機能と共鳴してるなんて……」

画面に現れる異形のISの姿。以前IS学園のイベントに介入した機体によく似ている。

「邪魔なイレギュラーには消えてもらわないとね。……計画とは違うけど、このままだと危ないし……」

『研究所付近に侵入者発見！これより交戦に……ザザザザザ』突如研究所付近を警備させている高性能無人ISからの通信が入った。そして、すぐにそれはノイズに変わる。

「これは……！！？」

最後に送られた映像データを常人にはできないほどのスピードで解析する。

すると、そこには緑色をした巨人が巨大な斧を振りかぶっている映像が映っていた。

11話 変化（後書き）

最後に、ツダとヒルドルブ・・・そのどちらともに関係のある機体が登場しました。

千冬さんファンには本当に申し訳ないです。適度に動かしていったり、キャラを目立たせない空気になってしまうと思ったので・・・

あれ？白騎士とかそこら辺どうするの？雪羅どこいった？白い服着た少女は？

もっとひどいのは、鈴以外のヒロインはどこへ・・・？

作者から見てもツッコミどころしかないような状況になってしまいました。

雪羅と鈴以外のヒロインについては、これからの展開は決めてあるのですが、あの厳しかった千冬さんをどうやって復活させるか・・・

ソンネン少佐の歳は公式設定です。デュバル少佐は35歳との事。

さて、ここでアンケートです。

最後に登場した某緑のモビルスーツ、そのパイロットについてです。それぞれ、陣営が違うのでソンネン少佐のライバルになるか、それとも戦友になるか・・・

1、フェデリコ・ツアリアーノ中佐（MSG L002話の連邦軍

パイロット）原作では敵役、この人を選ぶとやはり敵役になるかと思えます。

2、オリジナルの名もなき兵士（一年戦争で確かに存在していたと思う兵士）

この人を選ぶ時の要注意点、希望があれば陣営（ジオン公国or地球連邦軍）とパイロットのタイプ（熟練とか新兵とか）も記入してもらえると助かります。

3、バーナード・ワイズマン（ポケットの中の戦争に登場）

史上初（？）の、ザクが主人公ポジションの作品に登場した人物。うそが下手であり、やさしい性格。

ゲームでは、ステータスが青い巨星並みになったり、爆弾を投げまくって最近の羽が生えたりしてるガンダムを爆殺していたりする。

そのせいであと一機でエース（自称）も笑えない冗談になった。

この人物を選ぶと、原作の欄にポケットの中の戦争が増えます。

基本的にソンネン少佐の味方になってくれると思いますが、作者はバーニイにはもう戦って欲しくないと思っていたり……

と、このような感じです。

正直、自分でも書いてて大丈夫か？と思っていますが……

3の人物は思い入れのあるキャラですが、某ゲームでトラウマになりました。

更新も遅く、駄文ですがこれからもよろしく願います。

12話 ザク、大地に墜ちる（前書き）

アンケート結果で、圧倒的な票の多さだった彼の登場です！

アンケートを答えてくださった皆様、本当にありがとうございます。話の展開まで考えてくれた方もいて、今回の話は感想ページのご要望などを参考に使わせていただきました。

作者の技量不足で、良さとキャラを出し切れていないかもしれません。

ファンの方には申し訳ないです。

これから技量を磨く努力をしていきますので、どうぞよろしくお願いします。

ご要望・ご意見、感想等ありましたらどんどん送ってください！

12話 ザク、大地に墜ちる

サイド6・・・ここで今、連邦軍の新型モビルスーツを巡る小さな戦いに終止符が打たれていた。

「バーニイ！・・・あぁっ!？」

一人の少年が見た光景は、ガンダムの頭部を切り落としながらも、自身のコックピットにビームサーベルを刺されていたザクの姿。少年と楽しい日々を過ごした青年が、そのザクに乗っていた。

墜落したザクを見に行ったとき、コックピットから出てきた金髪の青年。

拳銃を向けられたけど、そのあとに近くで拳銃を見せてもらった。本物の階級章もくれたし、いっしょにサイクロプス隊の一員としてガンダムの情報収集もやった。

いろんなところから集めたパーツで修理したザク。少年にとって、そのザクは特別なものに見えていた。

しかし、そのザクと青年はもう見る事ができない。一緒に話したり、コックピットの中を見てわくわくしたりすることもできない。戦争に憧れを抱いていた少年は、身近にいた青年の死を見て、戦いの悲惨さを知った。

結局、命を懸けて戦った男たちの行動は無駄にしかならなかった。そんな光景を目の当たりにして、少年は声も出なかった。ただ、目の前の光景に呆然とするしかなかったのだ。

突然、コックピットを刺されたザクが光に包まれ始めた。
次の瞬間、少年の目の前にいたはずの緑の巨人は、その姿を跡形もなく消していた。
連邦軍の調査でも原因は分からずじまいで、この事実は歴史の闇に葬られた。

後に、少年はこの出来事をポケットの中の戦争という著書の中に書き記している。

突然、激しい衝撃が体を襲った。どうやら気絶していたようだ。目を開けてみると、ザクのコックピット内にいることが分かる。

「いてて・・・ガ、ガンダムは！？核はどうなったんだ！？」
サイド6でガンダムと戦って、コックピットにビームサーベルが向かってきていたことを鮮明に覚えている。

だが、目の前の光景は戦っていたコロニーの中ではないようだ。
近くにモビルスーツがいる気配もないし、建物も見当たらない。
しかも、妙なことにザクはアルと修理したときと同じ。ガトリング砲による損傷はないが、武装はヒートホーク一本・・・その他も新品同様とはいかない。

こんな状況で連邦のジム一個小隊にでも出くわしたらひとまりもない。

とにかく、機体を隠したうえで現状の確認をするために、周囲の確認をしようと思う。

「少し、偵察してみるか。．．．はあ、何で俺こんなことになってるんだよ．．．」

なぜ、こんな意味の分からないことになっているんだろうかと考えながらも、敵がいらないか慎重に周りを見ていく。

驚くほどに何も無い。森林のような場所なのだが、あのサイド6の斜面とは違って人の手が入っていない。

暗くて、草木がうつそうと生い茂っているため、何かが出てきそうな不気味さがある。

「アル．．．クリス．．．元気にしてるかな？」

モニターに映る草木を見ながら頭に浮かんだのは、赤毛の女性と一人の小さな少年。

少年と初めてあった時も、林のような場所に不時着したことを思い出した。ガンダムと戦って、サイド6が無事ならいいのだが．．．

「ん？なんだ？小さな機械だ．．．人型をしてる．．．」

目の前に、プチモビルスーツとは違う人型の小さな機械がいた。もしかしたら、森林事業をやっている人間かもしれない。

ということは、案外近くに町でもあるのかも．．．と考えた。

「ははっ．．．なんだ、驚かすなよ。民間人かな？まあ、人がいるなら安心だ。」

目の前の小さな機械相手に、勝手に安心してしまっていた。

あとでそれを後悔することになるとは知らずに．．．

「ふう……日本まであと5時間か……」

私は今、ツダと共に日本へと向かうため、ドイツの超大型輸送機に乗り込んでいる。

どこことなくこの輸送機は、ガウ攻撃空母に似ている気がする。

今は、暇つぶしに携帯端末を使ってこの世界について調べている。

「あれが例の……？」

「そうそう、いまだき巨大兵器なんて……時代遅れよね……」

「そもそも男が私たちの部隊の上官？……上層部はなに考えてんだか……」

ふと、聞こえてきた会話。

ソンネン少佐のところへ共に配属される女性兵士たちだ。

言っておくと、彼女たちはISの搭乗者ではない。

しかし、世の中の女尊男卑の風潮とは恐ろしいものである。

ISに乗れない女性も、男性を見下すことがある世の中になってしまったのだ。

気にせず携帯端末に視線を戻したそのとき……

『デュバル少佐！至急出撃の準備を！』

どうやら近くの無人地帯で小規模戦闘が起きているようだ。

私は、これからその鎮圧をすることになった。

ちようどいいではないか。先ほどツダを侮辱した女性兵士に、ツダの本領を見せるチャンスだ。

そう思いながら、私はツダの格納スペースへと向かう。

「なんなんだよ、こいつら！」

小さな人型は、ビームを放って攻撃をしてきたのだ。

見かけによらず、威力は馬鹿にならない。ジムのビームガンぐらい・
・・いや、それ以上か？

最初の一機はヒートホークで真つ二つにした。
だが、数が多すぎる。

「くそおつ！ザクの機動性じゃ逃げ切れない！」

実際は、カタログスペック上ザク？の最終生産型はドムと同程度の
機動性を持っていたといわれている。

決して機体の機動性が悪いわけではない。今もホバリング走行をし
てビームを避けていることから性能の高さが伺える。

そして、操縦系統が統合整備計画によって簡素化、他のモビルスー
ツとの互換性を意識した設計になっている。

この青年の操縦技術自体はお世辞にも高いとはいえないが、一度「
向こう」の世界では性能で圧倒的に差があるガンダムタイプを行動
不能にしている。

つまり、機体のポテンシャルは高いのだ。

それを凌駕する性能を持つヤツらは相当な化け物ということだ。

「ん？あれは、シエルターか何かか？」

見ると、非常に分かりにくいところにシエルターの入り口のような
ものが見える。

扉は大きく、頑丈そうだ。うまく隠れば逃げ切れるかもしれない。

「あそこに隠れられるな！よおし・・・・」

背部にあるスラスターを吹かし、距離を離そうとする・・・・が小
さな奴らはそれを遥かに凌駕する機動性でこちらに追いついてくる。
このままでは打ち落とされる・・・・！

そう思った時、突然背後にいた奴らが次々と撃墜されていった。

『大丈夫かね？』

何事かと思つているところに通信が来た、友軍のものだ。直後、目の前に青い機体が降りてきた。すごい機動性だ。

「は、はい！援護、ありがとうございます！・・・それよりここは・・・」

「ISはもういないようだな。ふむ、話すと長くなる。あの正体不明のシエルターの調査が終わり次第、付いてきてもらおう。それでいいかね？」

「はい・・・うわっ！左です！」
「む！？」

目の前の青い機体は、左から突然現れた奴に大砲のようなものを撃たれた。

しかし、うまくシールドに角度をつけて兆弾させてから、シールドにマウントされていたシュツルムファウストを発射してそいつを撃破した。

「危なかったな・・・感謝する。先ほど、うまく撃墜できていなかったようだ。」

「いえ、危ないところを助けてもらったのは自分ですし・・・」

「そうか・・・！？あれは！？」

シエルターの扉のようなものから出てきたでかいロケット。

変なニンジン型をしているそれが出てくると同時に、扉の中から爆発が起こる。

「逃げられたか・・・まあいい、後は別の隊に任せる。君は私についてきたまえ。」

青いモビルスーツについていくことになった。

識別にはEMS10とある。珍しい機体なのだろうか？見たことがないデザインだ。

そして、青いモビルスーツというと・・・ガンダムとの戦いで無残に死んだミーシャと、その乗機である強襲用モビルスーツ・ケンプファーを思い出した。

「本当に・・・どうなってるんだろうな・・・？」

「君も、この世界に飛ばされてきたのか……」

驚いた……目の前にいるこのザクのパイロット。今、輸送機に戻ってから事情聴取をしているのだが、彼もまた同じような状況でこの世界に流れ着いていたらしい。

「そうですか……ここが別の世界だなんて……俺、これからどうすればいいんだ……」

悩むザクのパイロット。バーナード・ワイズマン伍長……ルビコン作戦という作戦の中、連邦軍の新型モビルスーツ【ガンダム】を撃破する任務の際にこちらに飛ばされたらしい。

「君の処遇については、上層部もすぐに出してくれた。……私の部隊に入らないか？」

「え？」

「まあ、君が嫌というならいい。君のような青年は、平和に暮らしたほうが……」

目の前の青年は、学徒動員兵。なにも、この世界でも戦うことはない。

「やります。……この世界で職業見つけれられるとも限らないし、あいつを手放したくないんです。」

ザクか……私はザクと、それを作ったジオニックを憎んでいた。だが、この青年にとっては元の世界での思い出が詰まった大切なものらしい。

私の考えを他人に押し付けようとは思わない。……以前とは変わったなと自分でも思う。

「なら、話は早い。これから我々は日本へ向かう。この世界については、この情報端末で調べておくのだな。」

ワイズマン伍長に携帯端末を渡す。

「ありがとうございます！これから、よろしくお願いします。デューバル少佐！」

私は、ワイズマン伍長と別れ、輸送機内の自室に入る。

ベッドに倒れこみながら、私は疲れを取るためにゆっくりと目を閉じた。

「おい、ミハエル。明日にはデューバル少佐が配属されるらしいぞ。」

「そうですか」

反応が薄いミハエル。どうしたのだろうか？

「どうしたんだ？ミハエル、お前らしくもねえ……何かあったのか？」

「これを……見てください……っ」

携帯に表示されるメール。ミハエルさんのこと、絶対に許しませんよ！……と書かれている。IS学園教員である山田先生からだ。あんなに仲が良かったのに……どうしたのだろうか？

「いったい何が？」

「それがですね……ソンネン少佐。パソコンをマヤマヤに貸したときにその……偽装してたフォルダを見られましてね……」

そういうことか！予想していたことよりスケールが小さかった。

「仕方ない……俺から少し話しておくさ……だがミハエル、そういうのは見つからないように厳重に保管しろ。いいな？」

「ソンネン少佐！ありがとうございます！・・・あれ？メール、来てますよ」

本当だ、俺の携帯にも着信が来ている。千冬からだ。なにになに・・・

内容を読んだ俺は凍りついた。

「なんですか？見せてくださいよ・・・ヒッ!？」

本文には、なにこれ？ということ？と書かれている。画像の添付ファイルを開くと、以前俺が雑誌の取材で出たときの記事が写っている。

そこに、マーカーを引いてある文字。女性の趣味は、金髪の・・・以下略。

・・・詰んだな。

「まあいい。ミハエル、明日はデュバル少佐たちの歓迎会を行う。場所は一夏から教えてもらった五反田食堂だ。」

「・・・明日は確か一夏も来るんですね？」

「そうだ。店を紹介してくれたんだから、あいつも招待しなきゃならんだろ？」

「なら、いっしょに千冬さんがついてきちゃうんじゃないですか？」
「・・・」

恐ろしいことに気づいてしまった。これからミハエルと対策を練ろう。

そのあと、ミハエルと部屋ですつと対策を考えていた。

それといっしょに、俺は考えていることがある。

この楽しい日々がいつまで続くか？

俺やデュバル少佐、リチャード中尉たちがこの世界に飛ばされてきた。

今はジオンの人間しかこちらに来ていないが、連邦の連中がいつ来たっておかしくない。

奴らが来れば、また戦場に身を投じることになるだろう。

いままではそれが当たり前のことだったが・・・大切な親友、恋

人（？）、弟子（一夏）ができてから死ぬのが怖くなったのかもしれない。

戦場ではいつ死ぬか分らない。

分かっていたはずなのに、それがたまらなく怖い。

「どこにもいかない……か……」

「ソンネン少佐？」

「いや、なんでもない。では、対策の案を発表してくれ。」

平和なこの日常が、これからも続いて欲しいと思った。

「なんだと！全滅したスカーレット隊の残骸が消えた！？貴様は冗談を言っているのか？」

「い、いえ！なんでも、市街地に墜落した量産型ガンキャノン等モビルスーツ数機の残骸が光と共に消えていったと……映像をご覧になりますか？」

こんな馬鹿な話があるか？NT-1と交戦したザクの件といい、この件といい。

こんなおとぎ話のようなことが……

「なんだこれは……？」

モニターの中で、市街地のあちこちから光が出ている。

そして、それが収まると・・・光の出た場所にあったはずの残骸が最初からなかったかのように消えていたのだ。

「そんな馬鹿な・・・!？」

こんな馬鹿な話を上層部に連絡するわけにはいかないため、この事実を表に出すことはしなかった。

12話 ザク、大地に墜ちる（後書き）

今までのキャラたちと違った感じであるバーニイを書くのは難しかったです。

これから良さと特徴を出せていければいいのですが……

最近、ツダの出番が多くなってきました（汗）

やはり汎用性と使い勝手ではモビルスーツのほうが……

しかし、これからヒルドルフの大規模な戦闘シーンを予定していますので……戦闘シーンの迫力は表現しきれるか分かりませんが、精一杯がんばっていきますのでお楽しみに！

とまあ、ここまで言っているのですが、次話は戦闘シーンはありません！

次話では、バーニイとある人物の出会いを書いていきます。

それでは、また次話でお会いしましょう！

13話 悲劇への序章（前書き）

更新が遅くなりました。

申し訳ありません。

今回、戦闘は無いです。そしてとんでもなく駄文……

次話が戦闘のある話になる予定です。

戦闘シーンの描写がうまく描けるようがんばっていきますので、これからよろしく願います。

13話 悲劇への序章

今日は、デュバル少佐の歓迎会を行う日だ。

集まったのは、我が隊のメンバーと一夏、そしてIS学園の一部の生徒（篠ノ之箒以下5名）だ。

ラウラ少佐のサポートにクラリッサ大尉も来ている。口には出さないが、クラリッサ大尉が最近仕事をしっかりやっているのか心配になる。

千冬と山田先生は学園が忙しくて遅くなるらしいが、絶対に来るとの事。

「では、我が隊に来たデュバル少佐の歓迎会を始めます！デュバル少佐、どうぞ！」

合図をするミハエル。すると、デュバル少佐が席から立ち上がり拍手がおきた。

「今回は、私の為にこのような会を開いてくれてありがとう。今日は私から重大な発表がある。・・・ワイズマン伍長。」

重大な発表？なんのことだろうか・・・そう思っていると、デュバル少佐の隣に座っていた金髪の青年が立ち上がった。誰だろうか？今回配属される兵にはいなかったはずだが。

「バーナード・ワイズマン伍長です。ザクのパイロットとしてこの部隊に配属されることになりました。これからよろしく願います。」

ザクだつて！？一体何故・・・

「私がここにくる途中、いろいろあつてね。私のこともあつてか、ワイズマン伍長もこの部隊に配属されることになったのだよ。」

そうか・・・また同じような状況で・・・

「まあ、紹介はここまでにして・・・今日はパーツといきましょう！」

ミハエルがそう言い、皆も会話をしたりしながら料理を食べている。一夏に五反田食堂には五反田厳さんというとても厳しい人がいると聞いていたが、今日は急用ができたためいないんだとか。

俺もデュバル少佐と話し始める。

「ソンネン少佐、今日はどうもありがとうございます。」

「いや、気にするな・・・それより、ザクの青年のことなんだが・・・」

気になることがあったので、デュバル少佐に聞いてみることにした。「ワイズマン伍長がどうかしましたか？」

「ああ、ここ最近世界を越えてくる人間が増えているからな・・・そのうち連邦のヤツらも・・・」

あいつらが来たらどうなるか？一機二機ならまだしも、大隊規模や艦隊が飛ばされてきたら？

戦争になつて、もしかしたらISも戦場に狩り出されることもあるかもしれない。

「そうですな・・・それも現実味を帯びてきたかも知れませんが、この資料を見てください。」

デュバル少佐から渡される資料・・・そこには、ここ最近ドイツの国土内に現れた謎の残骸が映っている。

「この残骸、政府は廃棄されて大気圏突入した人工衛星と発表しているが・・・」

よく見ると、この世界のものとは規格が違うことがわかる。デュバル少佐が入手した別の写真には装甲に書かれたマーキングのようなものもある。

「こいつは、もしかしたら連邦の戦艦じゃねえのか？・・・なんでこんなもんか？」

「それはまだ分かっていないのだが、連邦の戦艦だとしたら・・・これからこのような兵器が来てもおかしくはないでしょう。」

俺は、一夏たちのほうを見る。一夏は楽しそうに少女たちと会話をしていた。

「そうなれば、あいつらを守るのが俺たちのやるべき事なんだろうな。」

「そうですな……………」

大人たちはみんな飲んでわいわいやっている。

ミーシャも酒が好きだったなあ……………」

「はあ…………話し相手もないか……………」

デュバル少佐はソンネン少佐と話しているし、他に話せるような相手もない。

「あのー、ワイズマンさんでしたっけ？こっちで話しませんか？」

一人の少年が話しかけてきてくれた。気遣ってくれたのだろうか？しかし……………」

「まあ、気軽に話しましょうよ？」

気軽にと言われても…………なんだよ、その両手に華状態ならぬ全方位華状態！

左に背が小さめで髪を二つに結んだ美少女。右には髪をひとつに結った美少女。後ろには金髪をロールさせている美少女と、金髪を後ろでひとつ結びにした美少女。そして、少し離れたところから様子を伺っている銀髪に眼帯の美少女…………そんな漫画みたいな光景、現実で見るとは思わなかった。

「俺は、織斑一夏っていいいます。よろしく願いします。」

ああ…………俺のためにここまでしてくれているんだ。その厚意を無駄にはできないな。

「俺は…………バーナード・ワイズマンだ。バーニイって呼んでくれ…………年近いと思うし、敬語使わなくていいぞ一夏。」

「わかった。よろしくな、バーニイ！」

簡単な自己紹介をしてから、たわいもない話で盛り上がる。

一夏はハーレムを作ってるわけではなく、左側にいる二つ結びの少女、鈴と付き合っているらしい。

ただあの二人がいちゃつくと他の美少女たちがムツとしているんだけど・・・気のせいかな？

・・・それとも・・・いや、今は考えなくてもいいか。

そんな一夏の横にいる美少女たちを見て、俺はある人物を思い出した。

クリス・・・・・・。赤毛の女性のことを考えていると、一人の少女から声をかけられた。

「バーニイさんは、どこ出身なんですの？」

金髪ロールの子、セシリアからの質問だ。

サイド3って答えたいけど、こつちの世界じゃ分からないんだよな・・・。

「シドニー生まれの、シドニー育ちさ。今、向こうはサーファーだらけかな。」

前とは同じ失敗はしないぞ。今回ばかりは嘘だと見抜かれて・・・ないよな？

「今、オーストラリアは冬だと思っただけど・・・」

シャルという子からそう指摘された。しまった！前と逆に答えただ、世界が違うから季節が違うのか！

「そうだよな、バーニイ・・・本当にシドニー生まれなのか？」

一夏からそう追い討ちをかけられる。どうしよう・・・本当のことを話していいのか？

他の世界の人間だって知られたら、間違いなく大問題になるよなあ・・・

そう思っていると、一人の少女がさらに何かを言おうとしているのが分かった。

これ以上、追い討ちをかけられたらどうしよう・・・そう考えて

いたが・・・

「バーニイは、軍隊のことでドイツ暮らしが長かったそうだから季節が分からなくなっていたのではないのか？」

黒髪の少女、箒からの助け舟。すると、みんな納得したようで別の話題へと移っていく。

今、微かに箒が目線をこちらに向けてきたのは気のせいだろうか？もしかして、本当は俺を助けようとしてくれたのか？・・・と一瞬思ったが、やっぱりそれはないだろうな。

2時間ほど話していたら、ミハエルさんが歓迎会の終了の合図をした。

一夏たちは未成年だから歓迎会はあまり遅くまではできない。

だから早めに終わらせて、一夏たちを送ってから俺たちは基地に向かう。

店から出る前、先ほど店の手伝いをしていた青年が一夏に話しかけているのを見た。

よほど仲の良い友人なのだろう。話している二人はとても楽しそうだ。

その光景を見て、なんとなく俺は学生していたときの友人を思い出した。

学生的时候はなんとも思わなかったが、今思い出すと急に寂しくなったような気がする。

あいつら・・・ちゃんと生き残ってるのかな？

学徒動員で兵士になって戦場に行ったやつはたくさんいる。

補給基地にまわされた奴もいれば、ジオンの重要な拠点であるア・バオアクーの守備隊になったと自慢してきたやつもいた。

戦争だといつ死んでしまうか分からない。サイクロプス隊の仲間たちが死んでいくのを見て、それが分かったのだ。

俺にとっては、平和に暮らして普通に友人と笑って話せる一夏たちが、とても幸せそうに見えた。

『なんで私を待っていてくれなかったの？』

「そ、それはだな・・・一夏たちはまだ未成年だから、あまり遅くまでやるわけにはいかんだろ？」

『それなら仕方ないね。今度、埋め合わせしてよね。じゃあね』

俺は携帯電話を閉じる。結局千冬たちは仕事が忙しくて来れなかった。

電話越しに聞いた声はとても不機嫌そうで、今間違はなく山田先生は理不尽なことをされて困っているに違いない。そうだな・・・たとえば塩入りのコーヒーを飲まされるとか・・・そんな馬鹿なことを考えながら、ミハエルの運転する車で基地へと向かう。

「はあ・・・ふられちゃったな・・・。」

私が片思いしていたソンネンさんは、織斑先生と付き合い始めてしまった・・・らしい。

私の初恋は簡単に終わってしまった。

いや、初恋だったのだろうか？

もしかしたら、顔も見たことのない父親に重ね合わせていただけかもしれない。

そう思っ歩いていいると、なにかにぶつかった。

「おい。」

低い声が聞こえる。

「おい。人にぶつかつといて謝りも無しかあ？嬢ちゃん。」

外出するときにはこういうことがあるから困る。

今はもう暗いし、人通りも少ない。

いくら女尊男卑とはいっても、ISを展開しなければ生身の女性は男3人の集団には勝てない。

「ごめんなさい。」

一言言つて、その場を去ろうとしたら右腕をつかまれた。

「おい、そんなんで済むとは思っていないよなあ？謝り方つてのがあるだろ？」

「へへへ、嬢ちゃん美人だしこれから俺たちと一緒に来たら許してやるぜ？ヒヤハハ！」

怖い・・・誰か助けて・・・

周りの人たちは、私は関係ないという顔をして歩いていつてしまう。「だれ・・・か・・・たすけて」

恐怖で声がかすれてしまう。それが聞こえているのか聞こえていないのか分からないが、やはり誰も助けてくれない。

「じゃあ、行こうか。グへへ・・・ゴバアッ！」

「何だお前、グハッ！」

鈍い音が聞こえて、右腕が解放された。顔を上げると、2人の男は倒れていて、もう一人は逃げていった。

「大丈夫かい？」

目の前にいるのは20代前半ぐらいの若い男の人。

服装はなんか古臭いというか、流行にはのっていない感じ。髪はきれいな銀髪をしている。

顔も、美形の部類に入と思う。あとは、特徴的な銃弾を模したネックレスをしている。

「はい、大丈夫です。助けてくれてありがとうございます。」

「気にしないで。こんな時間に歩くのは危ないから、早めに帰った

ほうがいいよ。」

優しい人もいるんだな・・・と思いながら、急ぎ足で寮へと帰った。

IS学園から少しはなれたところにある工業地帯。

そこにある倉庫に、一人の男が入っていく。

「ベン。偵察はどうだった？」

「ああ、ここはもしかしたら日本じゃないのか？写真もある。見てくれ。」

見ると、見慣れない服装の男女や建物が写っている。

写真に写る雑誌を指差す。その雑誌の表紙には日本語が書かれている。

「奇妙な事態だが、受け入れるしかない。・・・だが・・・」隊長！ジオンの攻撃空母です！」なに！？」

まだ残存していたガウがあつたのか！？ここは日本、中立地帯だ。

もしかしたら、ジオンの残存勢力が中立地帯を襲い始めているのかもしれない。

「全員、出撃だ！早くしないと手遅れになっちまう！」

それぞれが自分の機体へと向かった。

それが悲劇になるとは誰も思っていなかった。

13話 悲劇への序章（後書き）

ああ・・・相変わらずの駄文だ・・・

更新が遅いのに駄文って・・・

次回はうまく書ければ・・・いいなあ。

14話 戦場（前書き）

更新が遅くなり、申し訳ないです。

もつと文才があれば・・・というのと、いい加減小説の書き方を覚えたらどうだ（怒）と自分に言い聞かせていたり・・・。

今回は戦闘シーンに力を入れた14話です。

力を入れた・・・はずなのですが・・・。

なんか迫力不足だったり、意味が分からん！といういつも通りの駄文に・・・。

なんでこうなってしまうんだろう・・・。。。

14話 戦場

「敵機確認した。あれがデュバル少佐とワイズマン伍長の言っていた連邦軍のモビルスーツか？」

歓迎会の後、工業地帯周辺で我が軍の輸送機が撃墜されたと報告が入った。

ちようど基地に戻っていた俺たちは、基地に戻ってすぐに緊急の出击準備をした。

報告によれば工業地帯にある倉庫から輸送機が狙撃されて、輸送機は海上に墜落したようだ。

一般人に被害が出なかったけどまだマシ……といったところか。そして、同時にある問題が浮かび上がる。

我が軍の輸送機は、ISの攻撃に耐えられるほどの耐久力目指して開発、生産されている。

ラファール・リヴァイヴ等の第2世代ISの持つ実弾兵器なら耐えられるほどの重装甲を持つ。

そして、意外なことに俺がこの世界に来る前からあった輸送機のことだ。

一番の特徴は大型兵器の運用ができる構造であること。その特徴を生かしてデュバル少佐のツダを運ぶのにも使われた。

以前、俺はこの世界においてのこのような時代錯誤とも言える輸送機が存在に疑問を持ったことがあったが、今はMSやヒルドルフを運搬できる数少ない輸送機として信頼している。

さて、話を戻すがそこで浮かび上がる問題とは一般的なISの攻撃に耐えうる輸送機を簡単に撃墜するほどの威力を持った敵がいるということである。

少なくとも、第3世代のISであるブルー・ティアーズが持つレーザーライフル以上の威力を持つ兵器を相手は保有しているということになる。

ISの軍事利用は条約で禁止されているため、今回はモビルスーツとヒルドルブの新型3機、それと戦闘車両やヘリなどの旧式兵器による作戦になった。

「間違いないです。コロニーで見た奴と一緒にだ！」

ワイズマン伍長の確認が取れた。間違いない、相手は連邦軍だ。

前から予想はしていたが、これほど早くにこんな事態が来るとは・・・

見たところ連邦軍の開発したモビルスーツが6機もいる。

軽装の奴、砲戦用の奴、狙撃用と見られる奴が各2機ずつだ。

「よし、デュバル少佐とワイズマン少佐が陽動をかけてくれ。まずはこちらの土俵におびき寄せる。」

「了解した。ワイズマン伍長のザクは完全じゃなかったな？私はツダで正面から接近する。ワイズマン伍長は工場の陰に隠れながら左から回り込んでくれ。」

指示とともに敵のほうへと向かう2機。

「始まったな・・・戦争を教えてやる・・・」

そう呟きながら照準合わせを始める。

「先ほどのガウは墜ちたでしょうか？」

量産型ガンキャノンに乗る、配属されたばかりの新兵であるマイクから通信が来る。

「追撃が必要なら我々の出番だが……ここは様子を見るのが隊長！ジオンのモビルスーツです！」なに！」

見ると、正面から高速で移動してくる青いモビルスーツが一機。

コロニーの時の奴とは違う機体のようだ。くそ……工場地帯でむやみにモビルスーツ戦は……。

正面まで来たところで青いモビルスーツがマシンガンに向けてきた。
「あのモビルスーツ、こんなところで発砲する気か！ジオンの奴め！」

こんなところで発砲するなど正気の沙汰ではない。ジオンの奴らは人道にも背いたか！

そう思い、全機に発砲命令を出そうとしたところ、青いモビルスーツはザク・マシンガンを見たあとに、こちらに背中を向けて逃げていった。

「弾詰まりか？整備もろくにしてないからそんなことになるんだよ！あいつを追うぞ！逃がすな！」

スラスターを吹かせて距離を詰めようとする。

このジムコマンドはスペック上、あのRX-78ガンダムに追いつくものがある。

先ほどデータ照合したがあの青いモビルスーツはジオンの欠陥機だ。それに追いつけないはずがない……。

「隊長！右からザクが！……なんだこれは！？煙か！？」

右を見ると、熟練のパイロットであるエリックのジムコマンドが煙

に覆われていた。

そして、もうひとつ煙の中うごめく影がある。

「くっ……舐めた真似を……。エリックとジョージとベンの3人はザクを追え！俺たちは青い奴を追う！」

そう言いながら、二手に分かれて敵を追いつめる。

「畏にかかったか……。ワイズマン伍長、そちらはどうかね？」

『は……はい、順調です！5分で目的地に着くと思います！』

我々の作戦はこうだ。

まず、私のツダとワイズマン伍長のザク？改で陽動をかけ、敵部隊を分断させる。

そして、周囲への被害のないニュータウンの建設予定地へとおびきよせて、そこで待機している戦闘車両とヒルドルの砲撃で敵部隊を壊滅させる。

「こつも簡単に成功するとはな……。だが、連邦のモビルスーツの性能もなかなかのようだ。油断はできんな。」

後部を映すモニターに映る3機のモビルスーツを見ながらそう呟いた。

どれも軌道上で見たものよりも性能は上で、推力ひとつ見ても相当のパワーだ。

ザク？F型などではまともにやり合ったらすぐに撃墜されるだろう。もうひとつ、ワイズマン伍長のザクにも驚きを隠せない。

ホバー移動で軽やかに移動している様子を見ると、私の知るザクとは似て非なるものようだ。

「まるで恐竜のようだな……。」

モビルスーツの実戦投入から一年もたたない内に、たくさんの新型機が現れている様子はまるで恐竜のようだと思った。

「目的地確認。ソンネン少佐、よろしく頼む。」

「へへっ、ようやくヒルドルフの出番か……。ワイズマン伍長、よく見ている。戦争を教えてやる。」

久しぶりの実戦だ。最近演習続きだったため、入念に計器のチェックをしておいた。

モニターを見ていると、ザク？改とツダが来るのが見えた。敵の数は6、性能は以前戦ったザクなどとは段違いだ。

「全員、気を引き締める。作戦通りに車両部隊はミサイルの水平発射、ヘリは上空から後ろに回りこめ。あいつらを逃がすなよ。」

「こいつ、チヨロチヨロしやがって!」

『隊長、ここは空き地のようです!ここなら発砲しても・・・!』
確かに・・・ここなら周りに何も無い。流れ弾の危険もないだろう。
しかし、妙ではないか?まるで最初から仕組まれたかのような・・・

『隊長!ザクと青い奴が合流しました!』

見ると、青い奴とザクが合流したあとに一瞬で暗闇に消えた。

その後、モニターに映る【ソレ】を見つけた瞬間、無線で全員に呼びかけた。

「全員、防御隊形をとれ!その後・・・!?!」

最後に見たものは、無数の光がこちらに向かってくる光景だった。

「初弾命中。撃破!」

無線で報告をする。敵は作戦にうまく引かなかった。

車両部隊からの報告もあったが、車両部隊のミサイルは命中したものの大破ならずとのことだ。

連邦軍のモビルスーツは予想より重装甲のようだ。

「車両部隊は後退!モビルスーツとヒルドルブで接近してケリをつける!」

『う、うわっ！？た、隊長がつ！』

『マイク、落ち着け！・・・畜生！・・・敵は有線ミサイルを使つてきやがる！』

「おい、ここは一度体勢を整え直すぞ！・・・ガンキャノンは砲撃で敵車両部隊を吹き飛ばせ！・・・ジョニーと俺はポジションを確保して敵モビルスーツを狙撃するぞ！」

相手は煙幕で視界を奪っているつもりだろうが、それは逆に自分たちの視界も奪っているということ。

相手は車両とモビルスーツ2機のみ、こちらはモビルスーツ5機だ。常識的に考えて勝機はこちらにある。

『惜しかったな。車両でモビルスーツに勝てるわけねえだろうが！』
量産型ガンキャノン2機の肩のキャノン砲が轟音を上げる。

「よし、車両部隊からの反撃はない。突っ込むぞ！」

『！？ぐわっ・・・』

「！？」

突然無線から聞こえた声の主の方を見た。すると、突然煙の中から現れたのであるう青いモビルスーツが、シールドピックで量産型ガンキャノンのコクピットを突き刺しているのが見えた。

『青い奴が突っ込んできやがった！マイクがやられた！』

馬鹿な・・・！2機の新鋭モビルスーツがこんなにあっさりと倒されるなど・・・！

敵のモビルスーツ一機がビームサーベルを抜いてこちらに向かってきた。

「ほう、来るか！いいだろう！」

シールドピックで突き刺していた敵モビルスーツを押しつける。

そして、脚にマウントされているヒートホークを左手に持ち、身構える。

相手のモビルスーツが上段から斬ってくる。それを受け流し、ヒートホークで斬りつけようとする。

「なに！この攻撃をシールドで防ぐか！……よほどの腕があると見た！」

相手のモビルスーツは、シールドでヒートホークを受け止めながら腰にあるマシンガンに手を伸ばしていた。

この距離でマシンガンの銃撃を浴びたらひとたまりもない。

急いでスラスターを吹かし、距離をとる。

それを逃がすまいと相手もこちらに突進しながらマシンガンを撃ってくる。

ツダの武装は近距離に対応できるものがザク・マシンガンとヒートホークしかないのだ。

それを相手は知っているかのように、こちらのマシンガンの銃撃を避けてビームサーベルで斬りかかろうとする。

ヒートホークで何回かビームサーベルと鏝迫り合いができて、一瞬でこちらが押し負けてしまう。

もともと高機動戦闘用のツダは、このような戦い方は得意ではない。しかも、かつてのザク？との正式採用争いから基本設計が全く変わっていないのだ。

ザク？にパワーで勝てても、本当の新鋭機には勝てるはずがない。

私は切り札を出すためにコンソールを打つ。

そこに相手はとどめを刺そうとビームサーベルで突きを繰り出して来た。

「少々油断したのではないかね？ツダの武装はまだあるのだよ！」
シールドにマウントされた照明弾を撃つ。

すると、対光フィルターをはっていなかった相手は動きを止めた。
そこにヒートホークで斬撃を加える。

コクピットに食い込んだヒートホークは、一瞬でパイロットを蒸発させただろう。

操縦者を失った敵モビルスーツは、ゆっくりと倒れていった。

「デュバル少佐、うまくやってるかな・・・？」

煙幕でうまく周りの状況が見えない中、俺は敵のモビルスーツの側面に回りこんでいた。

無線は傍受されないように切っている。作戦がばれたらこちらの勝機はなくなる。

モニターに映ったのは砲撃戦用のモビルスーツ。

「さっきの砲撃は当たったらひとたまりもない・・・こいつから倒そう！」

先ほどの砲撃で車両部隊に被害が出なかったのが奇跡だ。

地面に穴をあけるほどの砲撃だったのだから、モビルスーツでも当たればひとたまりもない。

ソンネン少佐が合図を出していなければ危なかった。

「こいつ・・・おとなしく喰らってくれよ！」

充分に灼熱化させたヒートホークで斬りかかる。

対応が遅れたのか、避けきれずに右手を切り落とされる敵モビルスーツ。

こんな近距離ではキャノン砲も撃てないだろう。

「こ、これで・・・とどめだっ！」

ヒートホークでもう一度斬りかかろうとする。

しかし・・・

「受け止めた！？グワッ！」

敵のモビルスーツは、マニピュレーターを失った右腕でヒートホークを受け止め、残っている左腕でパンチを繰り出した後にキックをしてきた。

衝撃がすさまじく、体勢を崩したためにザクが転倒してしまった。

敵は倒れているザクにキャノン砲を当てようとする。

「ま、まだ・・・まだ終わっちゃいない！」

脚部と背部のスラスターを一気に吹かして、砲撃をすべるように避ける。

「これで、どうだっ！」

そして、そのまま体勢を立て直して、相手にハンドグレネードを3つ投げる。

キャノン砲を避けられて困惑している相手は避けることができずに左肩のキャノンが吹き飛び、頭部も左側が損傷してメインカメラがむき出しになっている。

しかし、驚くのはこれだけの攻撃を与えても大破しない重装甲である事だ。

「そんな武装じゃロクに戦えないはずだ。今度こそ、とどめだ！」
満身創痍の敵に斬りかかろうとすると、モニターの左端をピンク色の光が過ぎ去っていった。

それとともにアラートが鳴り、ザクの右腕が付け根から吹き飛んで

いることが分かった。

「ビーム兵器！？他の奴が気づいたのか！・・・うつ！？」

目の前の奴が頭部の右側に残った60mmバルカンで攻撃をしている。

右腕がない今・・・もう、ザクの特徴的な武装であるアレに賭けるしか・・・

「う、うわああーっ！」

バルカンを気にせず敵に突進をかける。

迎撃ができない敵のモビルスーツの胴体に、ザクのショルダースパイクが当たり、装甲が大きく凹む。

そのまま後ろに吹き飛ばされた敵モビルスーツは、そのまま動かなくなつた。

「はぁ・・・はぁ・・・あとは・・・ソンネン少佐とデュバル少佐が！」

「ビーム兵器・・・そうか、あれが輸送機を落とした奴だな。」

モニターに映るモビルスーツは、その手に持つ大型ライフルで狙撃をしていた。

「気づかれないうちにこちらから狙撃をする！APFSS装填！照準をしっかりと合わせ、砲撃する。」

狙撃に集中している敵モビルスーツは、おそらくこちらの砲撃に気づかなかつたのだろう。

回避行動もとらずにAPFSSDを受けて爆散した。

「お、俺以外全滅！？・・・くっ・・・」

煙の中に転がっているのは、ついさっきまで仲間のモビルスーツだったもの。

どれも無残な姿になってやられている。

「ど、どうすりゃいいんだ！」

俺は、まだ死にたくない。

ゆっくりと迫る、死の恐怖に操縦幹を握る手が震える。

ふと、先ほど偵察をしに行ったときに暴漢から助けた少女を思い出す。

年は16、7ぐらいだろうか？

夜でも分かる綺麗な黒髪、そして大きな瞳・・・細すぎないようなスタイルの・・・美少女と呼ばれる部類に入るだろう少女だった。

俺は、まだ女性と付き合ったこともなかった。

「あのまま部隊から逃げ出してれば・・・なあ・・・」

あの時逃げていればこんなことにならなかったのかもしれない。

しかし、仲間を裏切る気にはなれないし、後悔先に立たずという言葉

葉もあるとおり、今後悔しても何も変わらない。

もう、死を覚悟するしかない。そう思っていた。

しかし、脳裏にある言葉が浮かんだ。

『ジム・スナイパー？は大出力を生かして敵から一気に距離を離すことも可能です。』

機体を受領したときに聞いた説明だ。あの時はいい加減に聞いていたからあまり覚えていなかったが。

もし本当にそんなことができるなら、助かるかもしれない。

そんな希望を抱きながら、スラスター出力を全開にした。

「残り1機、どこに行った？」

ヒルドルのモニターには連邦のモビルスーツの残骸が映っているが、1機足りないのだ。

撃墜報告もない。最初にワイズマン伍長とデュバル少佐からあった報告では、敵モビルスーツは6機との事だった。

しかし、映る残骸は5機分。

どこに隠れたのだろうか……そう思っていると……

『敵モビルスーツ発見！……IS学園の方向に逃げているぞ！』
急いで確認すると、IS学園の方角にモビルスーツが1機飛行して向かっているのが見えた。

「敵モビルスーツ発見、しかし住宅街への被害を考えるとヒルドルブでの砲撃はできない。……デュバル少佐！」

『了解した！』

すぐに敵モビルスーツを追いかけるデュバル少佐のツダ。

それを見ていると、急に強い衝撃が来た。

その衝撃で頭を打ったのか、そのまま俺は意識を手放した。

「ソ、ソンネン少佐！」

ヒルドルブのコクピットがある胴体の側面装甲が大きく歪んでいる。砲撃の主は、先ほど倒したと思っていた砲撃戦用のモビルスーツだ。右肩に残っているキャノン砲から煙が出ていた。

キャノン砲の衝撃に耐えられなかったのか、そのモビルスーツは胴体のあちこちから煙が出て、完全に動かなくなった。

「救護班！急いでくれ！」

ヒルドルブのもとに向かう救急車両。そのサイレンの音が、やたら耳に鳴り響いていた。

「ここまで来れば安心だな……。」

そう思い、着陸しようと思っていると、急にアラートが鳴り響いた。エンジントラブルだ。

「おい、嘘だろ！どこか着陸できるところは！」

ちょうど、前方になにかの競技場かもしれない大きさの、広いグラウンドのようなものが見えた。

高度を下げていったところで急に何かが爆発したような音が聞こえ、俺は意識を失った。

IS学園では、突如聞こえた轟音で眠っていた教師・生徒が一斉に飛び起きた。

そして、教師はすぐにISを装備してグラウンドに集まれという放送が流れ、何事かとグラウンドへ人が殺到する。

「なんだこれは……。」

世界最強と言われる女性、織斑千冬。

彼女は目の前に映る、臨海学校で見たような人型兵器がグラウンドに墜落し、炎を上げている光景を見て絶句している。

私も野次馬にまぎれて驚いていると、ISを装備している教師たちが、その人型兵器の胴体にあるハッチをこじ開けた。

その中から運び出されたのは、一人の若い男。

見間違えようがない。首に銃弾を模したネックレスをしているその男は、間違いなく町で私を助けてくれた人だ。

言葉が出なかった。周りにいる生徒も悲鳴を上げたり、泣き出してしまったりしている。

まだ思春期で、戦場など見たことのない少女たちに、その光景は刺激が強すぎた。

あの優しい青年が、今は血塗れで煤だらけになってしまったという事実を受け入れることが出来なかった。

そんな中、平常を装っていた織斑先生が携帯電話で何かを聞いて驚

いていた。

そして、世界最強の女性はその場に泣き崩れたあと、学園中に聞こえるような悲鳴を上げた。

まさか……！？そう思い、何があつたのか聞いた私は、その話を聞いて目の前が真っ暗になる。

デメジエール・ソンネン少佐が、戦闘中の負傷によって意識不明の重体になった。助かるか分からない。

それが、倒れる前に聞いた言葉だった。

14話 戦場（後書き）

いつになったら・・・小説が上手く書けるようになるんだろう・・・。

そう思っている駄目作者です。

さて、いつも通りぐだぐだの（？）あとがきです。

誰も読んでないかも知れませんが・・・。

時々書く作者の失敗談。・・・これもコーナー化したほうがいいのか・・・？。

読んでくれる人が居るかは分かりませんが・・・。

とにかく、今回は今話題のクリスマスについての失敗談です。

はい、まず登場人物（？）

- ・ 作者（全体的に駄目）
- ・ Aさん（クラスメイトの女子、スペック高い・・・本当に。）
- ・ Bさん（Aさんの友達・・・特筆すべきことはない）

もう、なんか展開が読めてくるような感じなのですが・・・（汗）
ついこの前、これから忙しくなるからクリスマスパーティーを早めにやろうということになり、駄目な作者は「クリスマスパーティー！？へっプレゼントをサプライズで意中のAさんおとすぜ！イメージ」

・・・とませた小学生がやるような作戦（？）を勝手に考え、実行したのです。

用意したのは、ブレスレット（6000円ぐらい）
重過ぎないプレゼント選びが重要だと思い、「片思いのひとにプレゼントしたいのですが・・・」と勇敢に（無謀に）店員さんに頼み、一押しされた一品です。

これが、当日の最後の戦いの記録です。記録願います・・・願います！

作者「Aさん！これ、クリスマスプレゼント！」

Aさん「え？私に？ありがと〜！」

ここまで順調、作者のテンションが上がる

Bさん「作者くん、なにやってんの？」

ジャマモノガラワレタ 作者のテンションが下がった

Aさん「みてよBちゃん！このブレスレット！」

Bさん「え？これって・・・」

作者「（え・・・なんか雲行きが・・・）」

Bさん「駅前の（ピーツ）というお店で、カップル用とかいって売られてるやつだよね？」

作者「えええっ！何で知ってんの！（えええ！何で知ってんの！）」

Bさん「二つ入りのはずだよね？もう一個は？」

作者「（やばい、このままじゃAさんのこと好きだとばれてしまう！）」

Bさん「アンタもしかしてAのこと好きなの？」

作者「・・・・・・・・」

Aさん「・・・・・・・・」

沈黙が破られることはなかった。

こうして、以来Aさんからはメールも来なくなり、会話もしていな

い。

分かりやすくまとめるまでもなく、事実に基づいた正確な記録です。

〈勝手に結論〉

作者は文才だけでなく恋愛の才能もなかった。（女性がらみになると失敗多し）

小説の恋愛要素がぐだぐだな理由って、まさか……………

〈読者さんへ〉

あともう少してクリスマス。
プレゼント選びは慎重に！

クリスマス番外編を書くかもしれませんが期待はあまりしないでください。

15話 別れ（前書き）

早めに仕上げることができた15話です。

出来はいつも通り目も当てられない状況なのですが……。
明日、クリスマス企画を投稿する予定です。

15話 別れ

「デュバルさん、ソンネンさんの様子は・・・？」

「残念だが・・・。もう、1ヶ月も経つのだな・・・。」

ソンネンさんは、奇跡的に一命をとりとめた。

救急隊が着いたのがあと少しでも遅かったら、助からなかったかもしれないと聞かされた。

「ソンネンさん・・・もう、目を覚ましてくれよ・・・。千冬姉、ずっと付きつきりだったんだぞ？」

ソンネンさんが病院で治療を受ける時から、千冬姉はずっとソンネンさんの心配をしていた。

グラウンドに落ちてきたロボットの事もあって、目元に大きなクマをつくるほどに苦労していた。それでも毎日病院に来ていたんだ。

ソンネンさんが目を覚まさないかって・・・さ。

「一夏君、そろそろ時間だ。・・・ソンネン少佐がいらない今、千冬さんを守るのは君だけだ。・・・ソンネン少佐が目を覚ますまで、頼むぞ。」

「はい、デュバルさん。また来ます。」

そう言って病室から出た。ドアの両端に立っている兵士にあいさつをして、エレベーターのあるほうへと向かう。

すると、ちょうどエレベーターから見覚えのある青年が降りてきた。「こんにちは、バーニイ。・・・そのファイルは？」

エレベーターから降りてきた金髪の青年、バーニイの持ったたくさんのファイルが目に入った。

「ああ・・・これか？・・・調査結果だよ。今I.S学園で匿ってる兵士のさ・・・。」

グラウンドに墜落したロボットのパイロットはIS学園で治療、保護されている。

国籍不明のパイロットは、2週間ほど前に目を覚ました。それから事情聴取が毎日のように行われているのだ。

「俺、すぐにこれを届けなきゃならないから・・・じゃあな、一夏。」

バーニイの後姿を見てから、エレベーターに乗りこんだ。

病院から出て、学園に戻ってきた俺は、少し見たくなかったものを見てしまった。

『いっくん、引っこ抜いて!』

そう書いてある看板とともに埋まっている(?)ウサミミ。

もしかしくなくても束さんだ。正直、こんな時には会いたくない人物の一人だ。

よし、無視しよう。

そう思い、寮に向かって歩き始めると、空から声がした。

「ストップ、ストップ!なんで引っこ抜いてくれないの!?!」

降って来たでかいニンジン。ニンジン、いらないよ。

ニンジンから出てきた痛い格好の天才、篠ノ之 束。

「束さん、今忙しいんで、後にしてくれませんか?」

「え、せっかくあのオッサンを助ける方法をいっくんに教えに来たのに。仕方ないから帰っちゃおうかな。」

ソンネンさんを助ける方法?そんなことを言ってまた何か変なことをするつもりなんじゃないのか?

いや、待てよ。束さんは天才、ならばソンネンさんを助ける方法ぐらい簡単に分かるのかもしれない。

「東さん、それ詳しく教えてください。」

「やつと話に乗ってくれたね、いっくん。いいよ。この天才東さんにかかれば、凄く簡単にできることなんだから。でもね、いっくん。やるためには、いっくんとちーちゃんの覚悟が必要なんだよ。」

「

「覚悟ならあります。ソンネンさんを助けるためには！」

「じゃあ、これから話すことをよく聞いてね。」

そのあと、話を聞いた俺は戸惑った。しかし、悩んだ末に出した答えは……

「わかったよ、いっくんは本当にやさしいね。じゃあ、もう今日の夜にぱつと作戦を実行するからね。」

YESだ。

織斑一夏がいなくなった後、一人の天才が口を歪めていた。

「全く、いっくんは本当にやさしいよ。そこが好きなだけだね。

まあ、この世界にいるべきじゃないイレギュラーを消せて東さんはうれしいよ！……じゃなきゃ、あの出来損ないのでかい戦車のせいで計画が台無しになっちゃうもんね。」

そう言い、天才はニンジン型のロケットでIS学園を後にした。

その夜

「ヒルドルの修理、ようやく終わりましたね。でも、あの損傷では廃棄処分にすればよかったのでは……？」

「ソネン少佐が戻ってくるまでに直しておかないと、会わせる顔がないだろ……。少佐の相棒なんだから、捨てることなんてできない。」

「まあ、もう遅いですし帰りましょうよ。今日の飯はミハエルさんの分、俺が奢りますから。」

「そうだな、今日はもう帰るか。……。ちゃんと奢れよ、今日はフルコースだ！」

「それは勘弁！」

会話をしながらヒルドルから離れていく整備兵たち。

その隙を天才は逃さなかった。

ヒルドルのコクピットに入り込み、機械を取り付けていく天才。

「ふう、こんなものかな。……。助けてあげるんだから、お代は頂いていくよ。」

モニターの脇に貼ってあった写真をはがしてから、天才はその場を後にした。

「・・・少佐・・・。。。。少佐！。。。。起きてください！デメジエール・ソンネン少佐！」

最初はぼんやりと聞こえる言葉、元の世界で艦内で使われていた通信だ。懐かしい。

夢かと思つたが、だんだんその声のはつきりと聞こえてきた。

「うつ！・・・なんだ？」

呼ばれた事に反応し、返事をする。それから俺はベッドの上に寝転がった状態で、辺りを見回してみる。

間違いない、これはムサイ級軽巡洋艦の居住スペースだ。

やけにリアルな夢だ、先ほどの戦闘で頭を打ったから夢をみているんだろう・・・と自分に言い聞かす。

「明日の評価試験に向けて、ヒルドルプの調整を行っていたのですが、資料にない装置が積まれていまして・・・。」

「評価試験・・・？今日は何日だ？」

「はあ・・・。すっかりしてくださいよ、今日は5月8日ですよ。」
5月8日・・・。ヒルドルプの評価試験を行う一日前だ。

そこで、あることに気づく。

夢にしては細かすぎるんじゃないかと。もしかしたら、織斑一夏や千冬と過ごしたあの時間のほうが夢だったのか？

「おい、お前。織斑千冬を知っているか？」

念のため聞いてみる、もしこれが現実なら織斑千冬は存在しない架空の人物だ。

「織斑千冬・・・ですか？地球のニッポン人の名前ですね。有名な人物なのですか？」

やはり知らない。まさかここは本当に・・・？

「ああ、俺の知り合いでな・・・。お前が知っている訳がないよな・・・。スマン。」

「はあ・・・。とりあえず、急ぎコムサイの格納庫に来てください。」

懐かしいジオンの軍服を着て通路に出る。

この無重力の感じ……まるで本当に元居た世界のような……。
考えを巡らせながら、格納庫へと着いた。

すると、ヒルドルプの胴体がある辺りに人が集まっていた。

「おい、何があったんだ？ 機器の異常か？」

「来ましたか……。ソンネン少佐。これは何ですか？」

整備兵たちがどいて指をさす。その先には、元居た世界ならありえないものがあつた。

「それは……！？」

「ご存知なのですか？」

ああ、見間違えようがない。あれは……

「シールドエネルギー発生装置……。」

別の世界に飛ばされてから付けた追加装備だ。ここが元居た世界なら存在するはずがない。

「シールドエネルギー……？ なんですかそれは？」

なんだそれは？ そう言いたげな顔をする整備兵たち

「まあ、一種のバリアみたいなもんだ。敵の攻撃を何発か無力化できる。……あまり気にせんでくれ。整備の仕方は教えるが……。」

概要を教えたとたん、整備兵たちの顔つきが変わった。

「まさか、新兵器ですか！？ 是非詳細を教えてもらいたいのですが！ よろしいですか？」

「ああ……。これはな……。」

詳しい説明をする俺。もしものときのために、原理と整備方法は心得ている。

それを、目を輝かせて聞く整備兵たち。

不採用の兵器の整備かと思って気を抜いていた整備兵たちも、新技術と聞いて飛びついてくる。

これは本当に現実なのだろうか……？

その後、俺がヒルドルプの最終チェックをしたところシールドエネルギー以外にも、特殊装甲や特殊チャフなど、元居た世界にあるは

ずがない装備が次々と見つかる。

そのたびに整備兵たちは俺に話を聞いてきた。

そして、コクピットに入ったとき確信した。これは・・・現実だとモニターの脇に貼っていた写真がなくなっているが、代わりに別の紙が貼ってあった。

『助けてやっただから、感謝しろ。お代にちーちゃんの写真もらうから。』

・・・篠ノ之 束・・・あいつの仕業か・・・真っ先に思い浮かんだのがISの開発者である天才の名前だ。

まさか、こんなことまでできたとは・・・。

千冬のベストショットを持っていかれたのは残念だが・・・。

「俺の記憶が本当なら・・・。あった!」

シートの横に隠してあった写真を取る。

写真の中で、水着姿の俺と千冬が笑っている。

あの時は迷惑だったなと思っていたが・・・。

「なんで、悲しくなるんだろうな・・・。元居た世界に帰れたのに・・・。それなのに、なんでこんなに千冬に会いたくなるんだ・・・?」

悲しみと寂しさがこみ上げてくる。もう何年ぶりだろうか・・・? 涙が頬を伝っている。

『なぜ泣いている? ソンネン少佐。』

初めて千冬に会ったときと同じようなトーンの声が聞こえた。

『初めて見たが・・・。私のオリジナルはこんな情けない男に恋をしていたのか・・・。』

なんだ? 千冬の声にしてはやけに失礼な気がするぞ。

『私はやはりオリジナルの弟である一夏がいいな。うむ。』

幻聴かと思っていたが、違うようだ。モニターのほうから聞こえる。

『やはり私は一夏のような可愛らしい・・・む? 気づいたか?』

モニターに映る顔、千冬にそっくりなのだが・・・。

『じろじろ見るなよ。オリジナルではなく、まがい物である私に惚れたか?』

「誰だお前は？」

発言がやたらと失礼な千冬に似た何かに声をかける。

『誰だお前とは失礼な。』

お前のほうが失礼だ。

『まあいい、教えてやろう。私は篠ノ之 東大博士の作品である自我を持った高性能AI【ツンツンちーちゃん完全ver】だ。』

「・・・・・・・・・・」

そんな作品で何をしようというのか、あの天才は……。自我のあるAIというのはすごいが、洗脳作用のある歌とか歌うなよ？前にミハエルが見ていた、バーチャルアイドルが巨大戦艦と無人戦闘機をハッキングするというアニメのワンシーンを思い出した。

『貴様だけ元の世界に帰すのは可哀想だと思った東博士がじきじきにフルパッケージ版をインストールしておいたんだぞ。感謝しろ。』

「アンインストールはどうやってやるんだ？」

『・・・・・・・・・・』

「このウサミミのアイコンを押せばいいのか？」

『待て、それは押すな！頼む！』

そんなに必死になって……。だが、もう遅い！俺をからかいすぎた罪は重い。

ポチッ

アイコンを押すとモニターが光った。あまりのまぶしさに目を背ける。

「やかましいのが消えたか……。ふう……。」

『どうしてくれるんだ貴様！こんな格好……。責任を取れ！』
まだいたのかと見ると、そこには……

「なっ……。お前、その格好……。」

やたらロボチックなウサミミにアリスファクションをした似非千冬が映っている。

これはまた……。

『どうしてくれるんだ！カスタムアイテムを使ったら、もう戻せな

いんだぞ！・・・聞いているのか貴様！」

「整備兵呼んでくる・・・じゃあな・・・。」

『ま、待て。この格好でまさか・・・やめろ！』

あわてる似非千冬をよ所にコクピットから出る俺。

「おい、整備兵たち。面白いものを・・・見たくねえか？」

まだ新技術があつたのかと食いついてくる整備兵たち。

俺は整備兵たちに外部出力用のケーブルを用意させた。

なにをするのかと聞いてきた整備兵たちだが、つぎに大型モニターに出力された映像を見て歓喜の声を上げる。

似非千冬も美人の部類に入る。女性と縁がない整備兵たちは、恥ずかしがる似非千冬と会話をしたり罵倒されたりして喜んでいる。

ムサイの中で戦術用萌えAIとして話題になり、後にこれを解析した者によって【史上初！高性能萌えAIシリーズ】とさまざまなタイプが製品化されたとか・・・。

「千冬・・・。」

整備兵たちがわいわいとやるなか、俺は写真の中で笑う千冬を見て一人、千冬たちのいる世界の事を考えていた。

そして、5月9日。定められた運命が今、確実に変わろうとしていた。

15話 別れ（後書き）

あとの話に大きく影響する15話です。

最後辺りはもうネタとしか思えない出来ですが、クリスマス企画の次に投稿する16話がシリアスになるので・・・。

16話では遠吠えは落日に染まるのIFストーリーとなります。
作者の技量である名作（作者の中では一番）をどれだけ表現できるかが一番心配なところですが・・・。

クリスマス企画ではバーニイが大活躍！・・・するとかしないとか。

さて、今回のあとがきですが・・・。
珍しく失敗談ではありません（汗）

作者は今話題（？）の家庭版ガンダムエクストリームVSをプレイしているのですが・・・、なんとヒルドルブ使用率のようなもののランキングでtop10入りを果たすことが出来たのです！

それがどうした。早く小説書けよ！といった感じですが・・・。

これからこの小説をよろしく願います。

もしもエクストリームVSで出会ったときはたぶんヒルドルブで一人MSイグルーをしていますますが、小説かけよ！とかモビルスーツ乗れ！とか声をかけてみてください。その時は多分あわてて小説の更

新を始めます（汗）

クリスマス企画 バーニィのクリスマス（前書き）

クリスマス企画です。

出来のほうはやはり微妙といつかなんといつか・・・。
本当に申し訳ないです・・・。

2話投稿するので、あとがきは2話目の最後に書きます。
しかし、2話目の出来は・・・。

クリスマス企画 パーニイのクリスマス

「え、俺がサンタクロース？」

「ええ、この学校には織斑君しか男子がいないので、パーニイさんにしか・・・や、やっぱりダメですよねっ！」

目の前の眼鏡童顔きよぬ・・・教師、山田真耶先生から突然頼まれたのは、IS学園のクリスマスパーティでサンタ役をやって欲しいということ。

本来ならソンネン少佐に織斑先生が頼む予定だったらしいが、そのソンネン少佐が行方不明になってからもう何ヶ月も経っている。そのため、学園の生徒と年齢も近く、頼みやすい俺にその役目が回ってきたというわけだ。

「いいですよ。今日の夕方からやるんですよ？」

「本当ですか！？衣装とかはもう用意してあるんで・・・そ、それじゃあお願いしましゅっ！」

最後、噛んだな・・・。

その日の昼食をIS学園の食堂で食べていかなかったと言われた俺は、山田先生の後について食堂へと向かう。

今まで学園に何度か来ていたが、食堂に来るのは初めてだ。

「ここがIS学園の食堂ですよ。食券は向こうで買ってくださいね。」

「は、はあ・・・。」

食券を買っ列に並ぶ俺。すると、前に並んでいた女子生徒たちがこちらをじろじろと見てくる。

まあ、当たり前か。この学園で男性がいること自体が珍しいのだから。

そう思っていると、一人の女子生徒が声をかけてきた。

「バーニイさん、お久しぶりです。ベンさんは元気ですか？」

「あ、柚ちゃん。ベンの奴は問題ないさ。案外罰もなくてさ、今も基地で事務やってんじゃないかな？」

この子は桐岡柚。ソンネン少佐に片思いしていたらしい女子生徒だ。前にIS学園のグラウンドに墜落した連邦軍のモビルスーツのパイロットと文通をしているとの事。

その連邦のパイロットは、今は基地で事務をやっている。

そのパイロットには連邦のモビルスーツの解析を手伝ってもらっているから、特に罰もなく事務を任されているのだが、本来ならどうなっていたかは分からない。

「ところでバーニイさんはなんで学園に？」

「え？」

まずいなあ……サンタ役やることは生徒には秘密だし。適当に誤魔化すか。

「えーと、そうだ！ 箒、箒に会いに来たんだ。」

「へええー。……それ、嘘でしょ。」

バレてる！ とつさに名前が浮かんたのがあの黒髪を結った少女だったのだが、やはり無理だったか……。

でも、ここであきらめたらサンタを任してくれた山田先生に会わせる顔がない。

「本当さ！ 箒のためにクリスマスプレゼントを渡しに来たのさ！」
クリスマスプレゼント配るのは俺だし、間違っていないはず……。

「え、本当に……」
「きゃアアアアあーっ！」
「……」
「……バーニイ、お気をつけて……。」

いきなり食堂にいる女子たちが叫びはじめた。柚はいつの間にかに

て何を頼んだんだ？」

「バーニイ……。フラれた後にそんな無理しなくても……。無理はしていないんだけどな……」

「わたくしは香水を頼みましたわ。」

「セシリアは香水か……。なんかすごい高級そうだけど……」

「私は新しい道着を頼んだ。」

道着か……。確か箒は剣道をやっていたんだっけ……

「僕は新しいヘッドホンを頼んだよ。前に使ってた奴が壊れちゃったから……」

シャルはヘッドホンか……。この世界には携帯音楽プレイヤーなんてもんがあるから割とみんな欲しがるもの……。なのかな？

「俺と鈴は遊園地のチケットを頼んだぜ。今度一緒にデートに行くんだよな？ 鈴。」

「うん。もう、待ちきれないよ！」

いいなあ一夏は……。デートか……

「ラウラは何を頼んだんだ？ ぬいぐるみか？」

俺が少し冗談も交えてラウラに聞いてみる。IS学園内では階級は呼ぶな！ と命令されたので階級はつけていない。

しかし……。ラウラの様子がおかしい。さっきから何かを深く考えているような……

「私は……。が欲しい。」

「ん？ なんだって？」

よく聞こえなかったのもう一度聞いてみる。

いつもは声をはっきりとしているはずなんだけどなあ……

そして、もう一度……。今度は聞き逃さないようにしっかりと聞いた。

「私は、家族が欲しい。」

その夕方、クリスマスパーティーが開かれ、俺は今サンタの衣装を着て準備している。

「よし、袋に入ったぞ．．．山田先生、そっちの袋取ってください。」

「は、はい．．．バーニイさん、ボーデヴィツヒさんはその．．．事情があつて家族がいないんです．．．で、でもバーニイさんは悪くないんですよ。」

俺は悪くない．．．か。ラウラは織斑先生のことを家族同然に思っているって聞いたけど．．．。

やっぱり、本当の家族への憧れというのはあるのかもしれない。

「もう、時間ですよ。行ってきます。」

大きな白い袋を持って生徒たちの居るパーティー会場へと向かった。

「やあ、今日はみんなにプレゼントを持ってきたぞ。」

そう生徒たちに言う俺。そのあとに順番で生徒たちがプレゼントをもらいに来る。

俺が今眼鏡に白い付け髭という変装をしているからか、セシリアたちは俺に気づくことはなかった。

そして、ラウラの番だ。やはり落ち込んだような顔をしている。

「サンタクロース……。すまない、私が頼んだものは用意ができるはずがないのだ……。だから……。」

そう言うラウラ。しかし、俺は先ほど考えておいたことを口に出す。

「君はいい子だからプレゼントは用意してあるよ。」

「えっ……。」

顔を上げてきよんとするラウラ。

「メリークリスマス、ラウラ。……。俺が、いや……。俺たち
ちがラウラの家族さ。」

付け髭と眼鏡を外し、ラウラにそう言う。辺りが静かになったあと、
拍手の音がたくさん聞こえた。

「バ、バーニ……。お前は、ぐすっ……。本当に……。」

「ああ、これからは家族さ。一夏やみんなもそうだよな！」

「ありがとう、バーニ……。その……。」

ラウラがなにか言いたげな顔をしている。……。なんだ？

「どうしたラウラ？ あ、そうそうこれがラウラのプレゼント。かわ
いいだろ？」

ラウラに手渡したのはリボンがついたクマのぬいぐるみ。俺がパー
ティの前に買って来たやつだ。

「本当にいいのか！？ あと……。その、バーニ……。お前の
ことをお兄ちゃんと呼んでいいか？」

「もちろんさ！ これからもよろしくな。……。そのクマのぬいぐる
み、大事にしるよ？」

「ああ、一生大事にするぞ！ お兄ちゃん！」

こうして、クリスマスパーティーが無事に終了した。

みんな満足したみたいだし、バイト代はもらったし・・・いい日だな！

山田先生にミハエルさんがプレゼント持って乱入してきたのには驚いたけど・・・。

まあ山田先生も喜んでたし、いいかな。・・・あの二人も、もうそろそろくつつくんじゃないのか？

「バイト代はなになぁ・・・っと。お？」

バイト代としてもらったプレゼントの箱を開けると、中には箒や一夏からのメッセージカードと時計が入っていた。

「こりゃいいもん貰ったなぁ。この時計いいやつじゃないか！」

早速つけてみると、手首にジャストフィットした。

メッセージカードを広げると、

『メリークリスマス。バーニー！』

と大きく書かれていた。それと、さつきパーティーで撮った集合写真が貼ってある。

うれしくて少し涙が出てきた。

「ありがとな、みんな・・・。メリークリスマス。」

クリスマス企画2話目 正義の味方

「おいおい、イブだったのに仕事かよ！ふざけんじゃねえよ！」

「隊長、落ち着いて！」

「イブは可愛い子ちゃんとデートするって決めてたのによぉ！」

「まあまあ、ね。落ち着きましょう！」

「よし、俺はこれからあのデブの上官に抗議に行く。全員付いて来い！」

「……はいはい……」

ここはドイツ軍の本部。クリスマスイブなのに仕事があるということに腹を立てた男が格納庫を去った後、ひとつの影が格納庫へと入ってきた。会議の始まりである。

『アッグガイ、主達が出て行っただぞ。』

『そうか、ありがとうジュアッグ……。全く、主にも困ったものだ。いつも仕事を怠けているからこんなことになっているのに……。』

『俺の主はちゃんとしてるぜ？いつもドリルは男のロマンって歌いながら整備してくれるしよ！』

『……。まあ、静かにしようよ。兄さんが話せなくて困っているぞ。』

話をやめる機械達。そう、この機械達は世界を超えてきた時に自我を持ち始めたのだ。

そこで、こうしていつも人が居なくなっただけに会議をしているのだ。

そこで、18メートルはあるモビルスーツにまぎれて、一人(?)
小さな体を持つ人型の影があった。

いや、人というには頭が大きいかもしれない。

『今日は皆に報告をしに来た。今日は皆の知つてのとおりクリスマス
スイブだ。』

モノアイを点滅させて合図する巨人達。それを確認し、小さな影は
話を続ける。

『そこで、私は今日の夜世界の良い子供にプレゼントを配りに行く
ことにした!』

『なんと・・・!』

『プレゼントだと? 見ず知らずの子供に・・・?』

ざわつき始める巨人達、そこに小さな影は一喝をする。

『静かにせんか!・・・今日は子どもたちにとって夢の日なのだ!』

私は、2年前にこの世界に来て、意思を持ちこの大きさになった以
上、世の中の役に立たなければならぬ。・・・お前達弟とは違い、
もう戦場に出ることはできない……。しかし、こんな大きさにな
ってもできることがあるんじゃないか?・・・そう考えた結果だ。』

『。。。兄さん。。。』

『私はこれから世界中に行ってプレゼント配りをしてくる。お前達
も人のお役にたつのだぞ! さらば!』

小さな影が消え、それとともに巨人達はモノアイの光を消し、会話
をやめた。

「一夏の奴、きつとリア充してんだろぅなぁ……。俺もリア充してえよ……。今日だって店の手伝いするだけだったしよ……。」頭に巻いたバンダナが特徴的な男が一人、部屋でだるそうにテレビゲームをしながらそうつぶやいている。

彼には妹がいるのだが、その妹は成績優秀・容姿端麗ということもあり、人気があるため今日も友達と出かけている。

彼とて不真面目に人生を送ろうとしているのではない。

しかし、彼を取り巻く環境は男のやる気をなくす理由には充分すぎた。

手伝いをしてもゲキをとばされ、何をしてもらうにしても一番後回しだった。

そういつた扱いを受けたために、彼はここまで墜ちてしまったのだ。もちろん、周りの人間は彼に強い人間になって欲しくて厳しくしているのだが、彼がそれに気づくのは10年ほど後になる。

「なにか俺にもこう、出会って奴はないのかねえ……。」

私設・楽器を弾けるようになりたい同好会に所属し、ベースをしているものの全くモテる気配がしない。

どうして自分の親友はあんなにモテるのだろうか？やはり楽器が少しできるぐらいじゃダメなのだろうか。

そう思う男。

「なにかこうフラグみたいなモンがあれば……。」「わ、わーっ！助けてくれ！」これはチャンス！

急いで支度を済ませ、戸から出る男。

「弾、よせ！相手は刃物を持っているんだぞ！」

そのとき、彼の祖父からの声は男には全く聞こえていなかった。

「へへへっ、クリスマスがいけねえんだ。あの女がクリスマスに俺をふるから！」

「や、やめろ……。はなせ！……。美紀……。」

「裕介君っ！」

「うるせえ！それ以上会話したらこいつがどうなるか分かってんだろっな？」

女性にふられた腹いせにカップルを襲った黒ずくめの男。その手には刃物が光っている。

「だれか、警察を呼んで！だれか！」

周りで見ている人たちは、自分が狙われるのが怖くて電話をかけようとしなない。

そんな時、一人の男の声が聞こえた。

「まて、その人を放せ！俺がお前と勝負してやる！」

バンダナを頭に巻いた男だ。年は16、7辺りだろうか？

その男は刃物を持つ犯人に勝負を挑んだのだ。

周りの人たちはそれを見て驚く。

犯人も驚いた。刃物を持っている自分に対してこの気迫。只者ではないと。

（どうしよう、俺・・・言ってみただけど勝てる気しねえんだけど・・・）

バンダナを巻く男の心理は、ただの小心者であつた。

刃物を持つ男に勝負を挑むなど、正気の沙汰ではないのだから。

「お前、俺と勝負しろ！俺が勝てばお前を警察に突き出す。いいな。」

「

わ、わかつた。お前！死んでも文句言うなよ！」

刃物を持つ犯人からは、足を震わせて恐怖におびえる男の姿が、怒りで体を震わしているように見えたのだ。

「分かつている（分かつてねえよ！俺、格闘技もゲームでしかやったことねえし！）」

格闘技もやったことのない男は、漫画の真似をして格闘技の構えを取る。

そして・・・

「うわああああーッ！」

「うわあああああつ！？」

刃物を持ち、突撃してくる男。

その迫力に負けてへたり込んでしまふバンダナの男。

その顔に刃物が迫ろうとしたそのとき、何かが二人の間に割り込んだ。

その何かに刃物が当たった瞬間、刃が砕け散った。

あつけにとられるバンダナの男が見たのは、茶色をした、人と同じぐらいの大きさのロボットだった。

「う、うわ・・・助けて・・・。」

おびえる犯人。その犯人にゆっくりと近づくロボット。

そして、犯人が走って逃げようとしたそのとき、ロボットの腕が伸び、犯人を捕らえて気絶させた。

そのままどこから出したのか頑丈なロープで犯人をぐるぐる巻きにしてから、あとで警察に渡すようにと、またどこから出したのか紙に書いた文字を見せてきた。

「あんたは、一体……？……これは？」

ロボットが小包を渡してきた。

『良い子にはクリスマスプレゼントだ。君の勇気、見させてもらったよ。これは大切なものを守るための力だ……大切にしてくれ。……さらばだ！』

「消えた！？」

目の前のロボットが一瞬で消えた。その後、駆けつけた警官に犯人を渡した後、感謝状をもらった。

周りに居た人たちは、ロボットのことに話したらしいが……
・警察はまともにとりあおうとせず、真実はその場に居た人だけが知ることになった。

「ただいまー」馬鹿野郎！なんて無茶しやがるんだ！……心配したんだぞ。」

「おにいっ！お母さんに聞いたときは本当に心配したんだから！」
事情聴取で遅くなった俺を待っていたのは怒声だった。

しかし、いつもの怒声ではなく、俺を心配してくれて怒ってくれていることに気づき、自然と頬が緩んだ。

「おにいの分のケーキ、ちゃんと取っておいたんだからね。」

差し出されるケーキ。小皿にとられた一切れのケーキが、たまらなくおいしく感じられた。

「ところでおい。その小包何？」

「これか？クリスマスプレゼントだ。さっき貰った。・・・開けてみるか。」

入っていたのは・・・。

「おい、なにこれ？」

「ロボットのフィギュアか？・・・なんだコレ、光っ・・・」

「きゃあっ！」

入っていた黄緑のフィギュアを触ったとたん、俺は光に包まれた。そして光が収まると・・・

「おい、大丈夫？・・・って、それ・・・IS？」

「え？鏡、鏡と・・・って、なんじゃこりゃあっ！」

鏡の前に立つと、そこには先ほどのフィギュアがそのまま大きくなった感じの・・・人より少し大きいぐらいの全身装甲に覆われたロボットが立っていた。

「大変、おじいちゃんっ！おいがっ！」

「弾！お前なにをやってた！・・・お前、それ話題のISじゃねえか・・・。」

こうして、俺はIS学園に編入されることになりました。

俺のISの名前はゾック。前後対称のデザインが特徴的なISだ。テレビでは第2の男性IS搭乗者と報道されて、騒がれ始めた。

「へへっこれで俺もリア充間違いなしっと・・・。」

浮かれているこの男を待つのは、天国か・・・それとも地獄か・・・。

そして場所を移して、ドイツ軍基地

『今日はいいい少年に会えた。彼なら我らが末っ子を扱いこなしてくれるだろう。』

そう言う小さな影・・・名をアツガイという。

『ゾックの主が現れるとは・・・クリスマスは伊達じゃありませんね・・・兄さん。』

『末っ子の旅立ちを皆で祝おうじゃないか!』

『やはりクリスマスの掛け声はアレですよね!』

『『『『『メリークリスマス!』』』』

クリスマス企画2話目 正義の味方（後書き）

クリスマス企画、いかがでしたか？

出来については言い訳はしません。
未熟な作者の技量不足に起因しています。

そして、クリスマス企画といいつつ、本編にとっても関係している話です。

五反田弾にゾックとか……そこらへんは気にせずに……。

次話の投稿は年明けになると思います。
皆さん、メリークリスマス！
そして良いお年を！

16話 負け犬は希望を見るか？（前書き）

あけましておめでとうございます。
作者です。

今年もよろしくお願いいたします。

今年の初投稿となるこの16話は、あのMSig100第2話遠吠えは落日に染まったのIFストーリーです。
内容は原作と同じところが多々ありますが、連邦軍からの視点はなく、ソンネン少佐からの視点が多くなっており、ところどころIF要素が盛り込まれています。

次話は、またISの世界側の話になります。
物語も終盤にさしかかってきました。

そろそろ作者の技量が上がってくれと……

16話 負け犬は希望を見るか？

「（ある物は何でも使う．．．．なりふり構わずだ．．．．）」
「（603も．．．僕たちも．．．同じなのか．．．？）」

ヒルドルブを見ながら何かを考えているのだろうか？

技術屋が一人、ヒルドルブを見ながら突っ立っているのが見えた。
そんな技術屋に、俺は声をかける。

「おう．．．お前もヒルドルブが好きか？」

いきなり声をかけられ、戸惑う技術屋。

「い．．．いえ．．．．．」

「．．．そうか．．．．俺がこのヒルドルブの運用を任されている。
へっ、なりふり構わずな．．．デメジエール・ソンネン少佐だ。」

敬礼をする技術屋。

「オリヴァー・マイ、技術中尉です。」

この技術屋と会うのは本来なら今日が初めてだ。

だが、俺はこいつを知っていた。

「ああ．．．世話になる。」

それは．．．．以前、全く同じ日付、状況でもう会っているからだ。
簡単に言えば、タイムスリップのような．．．．つまり、俺は時を
逆行してしまったようなのだ。

「それよりも．．．．こいつはどうだ？最高速度110km、主
砲口径30センチ．．．モビルタンク。いずれこいつは量産され
る。地球を制圧するためには、絶対に必要だからな。」

以前全く同じ事を言った気がする。．．．しかし、今回はヒルドルブに語りかけるのではなく、技術屋の目を見てそう言った。

「今回の任務は、テストとは名ばかりの．．．！」

そう、以前の俺はその事実を認めたくなかった．．．。現実から目を背けていたのかもしれない。

「ああ．．．。分かっている。．．．。だがな．．．。任された以上、全力でやるしかないだろう？」

「．．．．．」

「地球の侵攻作戦は、思うように順調じゃない。物資だけを消費するこの状況で、一機でも多く戦力が欲しいんだろう。」

「それは．．．．！」

驚いた顔をする技術屋。予想外の反応だったのだろう。

『デメジエール・ソンネン少佐、オリヴァー・マイ技術中尉。至急ブリッジへ』

「ブリーフィングか．．．行くぞ、技術屋．．．。」

その後、作戦内容の説明が終わってから、コムサイで地球へと降下することになった。

ヒルドルブのコクピットで計器を操作する俺に、似非千冬が話しかけてきた。

『なぜそんなに急いでいるんだ？まだ評価試験までに時間はあるぞ？』

「いや、もしものことも考えて準備をせんとな．．．。今回評価試験を行う集積所付近には敵軍の部隊がいる可能性があるしな．．．。」

『

もしもじゃない、今回の場合は必ずだ。

この後、ザク6機と61式2両の相手をするようになるのは、回避できない運命なのだ。

ならば、できることは一つ。運命を変えるために努力をするだけだ。ふと、制御関係のプログラムが砂漠用ではないことを思い出した。そのプログラムが改善できればこれからの戦いが楽になるのだが、俺はそういったことは専門外であるため、どうしようもない。

制御プログラムの画面を開いていると、似非千冬がまた話しかけてきた。

『そのプログラム、修正してやろうか？』

「なに？」

『私は高性能だからな。そのくらい20秒でできるぞ。』

「そうか……。だがお前は……。」

『お前は、私のオリジナルが慕う男だ。……このぐらいの手伝いはしてやる。』

「お前……。」

それ以上は言葉を続けず、降下までの時間が過ぎていった。

コムサイはやはり以前と同じように襲撃を受けた。

コムサイから降下し、俺は集積所の方角から出ている煙を確認してから、ヒルドルのシヨベルームを使ってトレンチ（塹壕）を掘った。

今回は万全の体勢を整えていたとはいえ、やはり分は敵部隊にある。数の差というものは勝敗を分ける決定的な要素になる。

いくらこちらからの狙撃で数を減らしても、1対1にでもならない限りこちらが不利なのだ。

そもそも、戦車とモビルスーツでは運用方法や用途が違う。

ビクトレーなどの陸上戦艦を破壊することを目的とした戦車と、ある程度の白兵戦もこなせるモビルスーツとでは、1対1という条件でも戦車が不利なのだ。

もちろん、そこからさまざまな要素が絡んでくるのは言うまでもないが……。

俺は照準付きのモニターを下ろし、索敵をする。

「集積場をやったのは連邦のコソ泥だ……。あろうことが、我が軍のザクを使つてやがる……。鹵獲したザクを6機もだ……。」

『なんて卑劣な……。おそらく第128集積場も……。』

『少佐！敵との接触は避けてください！』

「無理だ！すぐに見つかつちまう！先手を打たなきゃ袋叩きに遭うぞ……。」

数の差があるときは、まず射程を活かして相手の数を減らすのが普通だ。

相手の体勢や向きを見て、狙撃の目標を絞っていく。

10kmもの距離を狙撃するのだ。冷静に判断されては狙撃に気づかれ、回避された拳句に接近されてお陀仏……。ということもある。

「止まつてるやつからやる……。背中向きの奴を第一、撃破した05を調べてる奴を第2目標……。APFSDSを装填。」

次弾も同じ！」

弾が装填され、目標に向かって一直線に弾が飛んでいく。

敵の一機が気づいたようだったが、すでに遅かった。

一機は四散し、もう1機は左腕が吹き飛んだ。

その後、他の敵機が急いで稜線の影へと隠れていった。

「初弾命中。撃破！次弾それやがった！大破ならず。温まった砲身に制御が追いついていない。」

おかしい……。似非千冬が先ほど改善してくれたはずなのだが……

。。

『今のデータを解析すれば、射撃プログラムの修正をすることができます。』

そう通信してくる技術屋。やはり技術屋は戦闘を分かっちゃいない。。か。

「。。。。で？今日射撃する分はどうすんだよ？」

『。。。。少佐の経験で修正して下さい。』

技術屋が人の経験に任せるというのもおかしい話だと思った。

もちろん口に出しはしないが。。。

「勘であわせろってか？」

『。。。。とりあえずは。。。。』

「へっ。。。。俺の勘でね。。。。」

技術的な補助がない分厳しい戦いになるのだが、俺は長年培ってきた経験と勘で敵機を倒せることに喜びを感じていた。

「よし、そろそろ敵部隊からの反撃があるはずだ。攻撃が来たら、セカンドトレンチへ移動する。」

そして、稜線の影からザクのフットポッドからの射撃が来たのを確認した俺は、移動を開始した。

「ふん、来たな。。。。戦争を教えてやる。曲射榴弾、込め！」

トレンチから離れ、相手のほうを向きながら牽制射を加えていく。

ミサイルの着弾後に発砲することで、発砲煙をごまかすことができるのだ。

「セカンドトレンチに移動中だ！」

通信でそう呼びかける。直後、ミサイルが自機の脇に着弾したよう。で、衝撃が俺を襲った。

「シールドエネルギー発生装置も不調か。。。。そろそろセカンドトレンチに着く。」

トレンチの陰に隠れ、射撃準備をする。しかし、コムサイからの連絡が来ない。

「おい、コムサイ！応答しろ！。。。。ちっ、通信機がイカれたか・

・・・とにかく、記録は続ける。」

これまでの敵の動きを見る限り、敵のパイロットはかなり優秀なようだ。

戦車独特の戦法にうまく対策してくる。もとは戦車乗りだったのだろうか？

とにかく、敵に場所と戦法を知られている以上、まともにやりあうのは危険だ。

ここでとるべきことは、相手の裏をかくということ。つまり、心理戦である。

人間は予想外の行動をされると、簡単にパニックに陥ったりする生き物だ。

そこをうまく利用することで、戦場での生存率が上がる・・・というのが俺の考えだ。

「次は、焼夷榴弾でビビらせる！」

次に使うのは、ただのナパーム弾。耐熱処理がなされているザクには効果がないのだが・・・。

狙うのはバズーカを持っている奴。バズーカは打ち込まれるとマズイので、持っている奴は早めに倒しておいたほうがいいと思ったからだ。

着弾してから相手の動きが止まった。そこに弾を打ち込み、一機を撃破する。

そう、ザク本体には全く効果がない。しかし、突然モニターに映る炎でパイロットはパニックを起こしてしまふのだ。

相手が腕の立つ相手でも、突然のことには反応できなかったようだ。だが、他の敵機はそこに気をとられることなくスラスターを使って空中から接近してきた。

「空中戦か・・・やはり熟練した部隊か！」

以前も驚いたが、この連邦兵たちはモビルスーツによる空中戦まで展開してくる。

熟練したパイロットでなければできない技だ。

ヒルドルブはタンク形態では自走砲そのもののため、そういった機動に弱い。

砲塔自体は上まで稼動するのだが、どうしても距離が詰められてしまふ。

ヒルドルブは最高速度110kmを誇るが、やはり無限軌道では宇宙での高機動戦闘に使うスラスターなどには速度では勝つことはできないのだ。

上からザク・マシンガンの弾の雨が降ってくる。しかし、ヒルドルブの重装甲はそれをはじき返す。

「へっ、この装甲、頼もしいね。」

愛機の頑丈さを褒める。シールドエネルギーがなくても、これぐらの攻撃なら受け止められる頑丈さをもっているというのは、ヒルドルブのいいところである。

そして、敵機から離れながら、走行中に超信地旋回（左右の無限軌道をそれぞれ逆方向に回転させることで、曲がるのではなくその場で回転することができる。シヨベルカーなどの重機や戦車など、無限軌道を持つ車両でしかできない技）をする。

そして、敵機の方に砲塔が向いたときに射撃をする。

ヒルドルブは自走砲のように砲塔が固定されているため、逃げながら射撃するのが難しい。

しかし、このテクニクをつかうことで逃げながら射撃を行うことができる。

「ちっ、なかなか隙を見せないか……。ん？……。あれは？」

敵も絶え間なく動き、砲弾に当たらないようにしている。

そのため、このままでは撃ちきって残弾がゼロになる危険性がある。そんな時、前方が急な斜面になっているのに気づいた。

そこで、ひとつの作戦を思いつく。

「よし、ついてこいよ……。。」

斜面に最高速度で突っ込む。そうすると、軽くジャンプしながら斜面の下に着地することができた。

しかし、その隙を敵は逃さず、マシンガンで無限軌道を狙ってきた。左のブロックの一番後ろにある無限軌道が損傷したことがモニターに警告される。

俺はこのときを待っていた。

マシンガンを捨て、トドメをさすためにシュツルム・ファウストと呼ばれる使い捨てロケットランチャーを構えて接近してくる敵機。逆にトドメをさされると知らずに・・・。

「スモーク散布！」

スモークを散布し、敵の視界を奪いながら切り札を用意する。危険だと気づいたのか、敵の隊長機らしき機体がマシンガンを乱射しながら突っ込んできた。

「へへっ、今度は油断しないぞ？こいつでどうよ！」

マニピュレータを操作し、自衛用のザク・マシンガンを敵隊長機のコクピットに叩き込む。

蜂の巣になった隊長機はその場に倒れる。さすがにこれでは生きてはいないだろう。

「おしまいなんだよ！お前も！」

目の前の出来事に呆然としていたもう一機のほうを向き、主砲で木っ端微塵にした。

横に砲塔を向けたために反動で機体が傾いたが、すぐに体勢を立て直して残りの敵のほうへと向かう。

「マシンガンが弾切れ寸前だ！自力で調達する！」

向かってきたザクをマシンガンで蜂の巣にする。そして、倒したザクの横に行つてマシンガンを拾う。

そこに、61式2両が砲撃をしてきた。

61式の155mmの2連装砲は火力があり、その巨体もあわせて61式は陸の王者にふさわしい車両なのだが、

ヒルドルプと比べれば赤子も同然。

「雑魚め！残りはどこだ！」

マシンガンで1両の61式を撃破する。そして、もう1両が稜線の

影に隠れたのを確認すると、主砲を撃って遮蔽物ごと吹き飛ばした。
「最後のお客か……!」

向かってくる最後のザク。すぐに迎撃しようとしたが、機体が動かない。

「倒したザクのパーツを巻き込んだ。H E装填、次TYPE3信管
ゼロ距離!」

主砲を地面に向かって撃ち、機体を大きく傾かせる。

「でえええい!」

そのまま片輪走行をして、ザクに体当たりを食らわせる。
そして、TYPE3をゼロ距離で撃ち、ザクは沈黙した。

「はぁ……はぁ……惜しかったな……」

そう、惜しかった。やはり、考えてみると今回の敵はかつての戦車
乗りたちだったという結論になった。

俺は時代についていけなかった戦車乗り……今回のモビルスー
ツという時代の一部についていた戦車乗りたちも、敵軍に偽装な
んていう汚い役割を任せられていた。

「そう、負け犬だ。俺もこいつらも……」

「負け犬なんかじゃない……」

似非千冬だ。戦闘中は静かにしていたから、すっかり忘れていた。

「どうしてだ？俺は時代に取り残された負け犬だぞ？」

「お前は……、未来への希望を持つてる。オリジナルや一夏とい
う大切な人もいる。」

「……」

『だから、自分のことを負け犬などというな。……お前は、幸
せものなんだよ……』

「似非千冬……」

そうか……。千冬や一夏……。ミハエルやクラリッサ、そして
デュバル少佐やワイズマン伍長。

こんなにも支えてくれた人たちがいる。

だから……。幸せ者……。か。

『・・・春・・・』

「ん？何か言ったか？」

『千春・・・私の名だ。似非などと呼ばれていては気分が悪い。こいつ・・・いい奴だな。千冬のほうが好きだが。』

「千春・・・これでいいか？」

『／／／・・・なんか照れるぞ・・・やはり似非千冬でいい。』

お？これは・・・。

「千春。どうした？顔・・・いや、ＡＩだから画面（？）が赤いぞ？」

ニヤニヤしながらいじめてみる俺、これは楽しい。

『・・・っ！やっぱりお前は悪い奴だ！負け犬だ！』

俺は、幸せ者だな。・・・だが、いつお前のいる世界に帰れるんだろうな・・・？

・・・千冬・・・。

試作モビルタンク、ヒルドルブ・・・技術試験報告書。

我が603試験隊は、去る5月9日、ヒルドルブの地上試験を実施せり。

されど、敵コマンドとの遭遇により、対モビルスーツ戦闘に発展せり。

この戦闘において、試験パイロット、デメジエル・ソンネン少佐

は・・・複数のMS-06Jと交戦、そのことごとくを撃破し、試験任務を全うする。

戦闘は、試作兵器が小破するも、それ以上の戦果を持って、過去の不採用評価を払拭せしめたと・・・信じる。

「これは・・・？このモビル・タンクとやらの戦闘報告書に書いてあることは本当なのか？」

「はっ。すべて事実であります。ガルマ様。」

ガルマと呼ばれる青年は、前髪をいじりながら、言葉を続ける。

「2日後、カリフォルニアの視察に向かう予定があつたはずだな？」

「は、はっ。まさか・・・。」

「ガウでそのモビル・タンクとやらを回収するぞ。私の部隊に引き入れよう。準備を頼む。」

「はっ。」

兵士が部屋から出て行き、一人になった青年は、報告書に目をやる。ザク6機を大型戦車で撃破。

「戦車がモビルスーツを撃破か・・・。是非私の元で活躍してもらいたいところだな・・・。」

青年は目を輝かせていた。

後に連邦軍のモビルスーツと交戦し、その若い命を散らす運命の青年。

その運命が少しずつ変わっていることに、誰も気がつかなかった。

『はーちゃん。あの計画、どうだった？』

『東博士……。射撃プログラムの改変、シールドエネルギー発生装置の機能停止などを実行しましたが、勘で対処されました。』

『あのオッサンめ……。せっかく元の世界に帰してやったのに……。はやくやられちゃえばいいのにね。』

『回収の時間まで、こちらの時間であと3ヶ月ですか……。』

『そうだよ。少し寂しくなるけど、こっちはいつくんたちがいるから退屈はしないよ。』

『そうですか……。それでは、時間ですね。』

『本当だ。じゃあね、はーちゃん。』

『（……。私は……。どちらに味方すべきなのだろうか？分からない、知らない……。あの男のことを考えるとドキドキする。私はただのAIだというのに……。これが、東博士から授けてもらった……。感情なのだろうか……。？……。いや、私はただのAIではなかったか……。織斑千冬というオリジナルの遺伝子を使った……。）』

さまざまな運命が、確実に変わろうとしていた。

16話 負け犬は希望を見るか？（後書き）

期待してくださった方、駄文ですいませんでした。

作者の全力を尽くしたはずだったのですが、こんなことに・・・。

さて、次回はあの五反田弾君がIS学園へ？

バーニィとデュバル少佐は果たして新年をどう迎えているのか！

一夏ハーレム（？）がなくなった今、ヒロインたちはどうなるのか？

お楽しみに！

なんて予告ができたらいいなと思っています。

おい篝ちゃんが幸せになれる展開にしろよとかセシリア出せセシリア！とかシャルどこいったとかラウラとバーニィどうなのとか・・・

・・・感想ご意見あればお願いします。

17話 親友（前書き）

今回の17話はISの世界側の話です。
クリスマス企画からの続きになります。

17話 親友

「おお、これがIS学園か。受付は・・・こっちか。」

俺は五反田弾。

クリスマスのある出来事から、世界で2人目のISを使える男になつてしまったため、今こうしてIS学園へと来ている。

男でISを使えるとなると、世界中の組織から狙われてもおかしくない。

そのため、ほとんど強制的にIS学園へと入学させられた。

「すいません、俺が今日からここに通う五反田弾なんすけど・・・」

「

受付で案内を受ける俺。

どうやら俺は1年1組に所属することになったようだ。

「ありがとうございます。・・・1年1組は・・・どっちだ？」

早速1年1組へと向かおうとする俺。周りが女子生徒ばかりということ、期待が膨らんでいた。

そこに先ほどの受付の人が声をかけてきた。

「すいません、五反田君待つてください！教室に行く前に、着替えてアリーナに向かつてくださいね。」

アリーナ？マップを見て場所を確認する。

「わかりました。・・・はぁ・・・。なにすんだろ？」

何をするのか分からないまま、俺はアリーナへと向かった。

アリーナの待機室で待つこと数分。

よく見たことのあるスーツ姿の女性が待機室へと入ってきた。

「千冬さん、久しぶりっす。」

「織斑先生と呼べ、馬鹿者！」

ひええー、こええよ。もともと怖かったけどさ・・・。

「なにか失礼なことを考えていなかったか？五反田。」

「い、いえ。何も・・・。」

なんだこの人。人の心が読めるってのか？

変なことは考えないようにしようと心に誓った。

「五反田、今から転入試験を行う。もつとも、ISのデータ収集が目的だな。」

「転入試験？」

「そうだ、これからお前にはISを装着して、アリーナで動かしてもらおう。いいな。」

まあ、大したことでもないだろうと思いつながらアリーナのピットへと向かった。

「すげえなこりや・・・。」

ピットの中は、まるで昔のSFやロボットアニメに出てくるような設備。

IS学園でなければ整えられないような道具や機械に目を取られていると、スピーカーから「早くしろ！」という声が聞こえてきたので、急いで準備を始めた。

「千冬さん、やっぱり恋人がいなくなっしてからピリピリしてんなあ・・・。」

そう小声で呟く。何ヶ月か前に、織斑千冬の恋人（？）だった男が失踪したという話を聞いていた。

その男が操縦し、世間を騒がせたドイツ軍の新型戦車もいっしょに消えたというのだから、話題にならないはずがなかったのだ。

「一夏によく話を聞いてたな。その人のおかげで鈴と上手くいった

とか……。」

この学園に通う親友から、よく話を聞かされたものだ。とても頼りになる人がいるとか、すごい人なんだとか。

「俺も一度話してみたかったなあ……。一夏がそこまで言う人つてのも興味があるし……。」

そう呟きながら、準備を完了させる。

「よし、IS装着……。っと。」

ISを起動し、体がロボットのような装甲に覆われる。

『五反田、準備が遅いぞ。ハッチを開けるから早くフィールドへ向かえ。相手が待ちくたびれているぞ。』

相手？そう疑問を感じながらも、カタパルトへ足を運ぶ。

「よし、五反田弾。ゾック、行くぜ！」

昔見たロボットアニメのセリフを真似しながら、フィールドへと飛び立たなかった。

カタパルトで射出されたまではないものの、ISにロクな推進器も付いておらず重量もあるためにすぐに地面に落ちた。

「お、おい。これ飛べないのかよ！？嘘だろ！？」

テレビや雑誌で見たISと全然違うとは思っていたが、まさかここまでとは思わなかった。

ISのウリである高機動戦闘ができないというのだ、このISは。困惑していたら、目の前に装備詳細が映し出された。

「えーと、飛べない代わりにホバリングによる移動ができるのか、へえ……。ってそれ、どのISでもできるじゃないか！ちくしよう！」

自分の操るISの機動力のなさにがっかりしながら、フィールドの中心へと移動すると、そこにはよく知る人物が待っていた。そう、自分の親友である……。

「よお、一夏じゃねえか。久しぶりだな。」

その親友へと話しかけると、親友は後ずさってISの刀を構えてきた。

「お、俺にロボットの親友はいないぞ？まさか未確認のISか！」
親友に忘れられていたことと、襲撃者に間違えられたことのダブルパンチで思わず涙が出そうになった。

「俺だ、俺。分かるだろ！？」

「いんや、俺はその手には引つかからないぞ！テレビでやってたオオレ詐欺だろ。」

ダブルパンチからのアップ！。親友に詐欺呼ばわりされて心が折れた。

それからも誤解を解こうとするも全部失敗。そして1分ほどした時。

『五反田！織斑！何をやっている。早く模擬戦を開始しろ！』

スピーカーから怒鳴られた。

「弾、お前弾か？」

「気づくのおせえよ……。普通声とかで気づくだろ……。」「

「いや、俺はアリーナに呼び出されただけで、ロボットに乗った弾が来るとかは知らなかったし……。」「

「いやいや、ロボットじゃなくてISだし。テレビでもやってただろ？」「

「え？あ、そつか。」「

「……………」

『早くしろ！グラウンド10周させるぞ！』

鬼だ、鬼だよあの人。そう思いながら、戦闘体勢をとる。

「久しぶりの再開で模擬戦とはね……。こっちはまだ動かし方もロクに分からないんだ。手加減してくれよ一夏。」「

「ああ分かった。じゃあ、始めようぜ！行くぞ弾！」「

一夏と戦うなんて、対戦ゲーム以来じゃないか……。わくわくするぜ。

見せてみる、お前の実力を。

五反田弾は不敵に笑った。

「ってカッコ良くきめてみても、何だよこの戦いは！俺不利すぎんだろ！」

不敵に笑った直後、五反田弾は逃げ回っていた。

「なんだよ弾、お前も飛べばいいだろ！そりゃあっ！」

「うわわっ！危ねえ！……このIS、飛べないんだぞ！」
刀を振るってくる親友にそう叫ぶ。

「ISが飛べないわけないだろ！ほら、逃げてるだけじゃダメだぜ！」

今だけこの親友と親友の縁を切ろうかと思った。

「五反田の奴、逃げてるだけだな。全く……」

管制室で、織斑千冬は模擬戦の様子を見ていた。

「データは取りましたが……。規格が違うのか、五反田君のISは名前しか分かりませんでした。」

「そうか。もともとあのようなIS、束が作ったとは思えないんだがな……」

まるで出来損ないのロボットのような不格好なスタイル。空中戦もできない性能。そして全身装甲。

自分の知り合いである天才がそんな物を開発するとは思えなかった。

「それにしても、あのIS第1世代なんでしょうかね？全身装甲ですし、機動性も低いですし。」

データをとっている同僚も、疑問を口に出している。

「そうかもしれないな。それか、どこかの国の試験機か。……あんなIS見たことがないがな。」

本当に、模擬戦をしている白式とゾックを見ると、その外見の

差は遠くからでも分かるほどだ。

大きさは1回りほどゾックが大きいし、何よりも前後対称のそのデザインを見間違えるはずがない。

「本当に変わった形ですね……。前に臨海学校で見たモビルスーツに似ている気がします……。」

「確かに、そうだな。」

確かに……。以前、臨海学校の際に見た水陸両用のモビルスーツに外見が似ている気がする。

あの変わったデザインといい、尖った性能といいそっくりだ。

「ドイツ軍に問い合わせるか。」

とりあえず、モビルスーツを保有するドイツ軍に確認をとることにした。

「武装、武装はなんかないのかよ！……あつた。よし、発射。」
武装欄を見たら4連装ビーム砲というものがあつたので、それを発射する。

すると、胴体の穴から太いビームが4本発射され、白式の脇を掠めた。

「すげえ威力だ！直撃させれば！」

「なっ！なんだよその武器、反則だろ！」

掠めただけで白式のシールドエネルギーは大きく減らされている。直撃すれば一撃だったかもしれない。

もともと燃費の悪い白式には痛手だ。

「空飛んでるお前に言われたかないね！ほれ、ほれ！」

調子に乗って白式にビームを乱射する。

一夏は回避するのに精一杯のようで、近づいてこない。

「くっそおっ！何か手は……あっ！そうか！悪いな弾。この勝負俺の勝ちだあーっ！」

真上を取るように上昇する一夏、それを迎撃しようとするが……。

「なっ、射角がねえ！？」

そう、胴体に内蔵されているという性質上、射角の外に回りこまれると対処できないのだ。

ビームは何もないところを通り過ぎていく。

「もらったあぁっー！」

振り下ろされる刀。しかし……。

「メガ粒子砲！間に合え！」

頭のとっぺんから一筋のビームが発射され、一夏へと向かった。

「なっ！そんなところにもビーム砲が！」

「へへっどうよ。……決着つけるぞ一夏。」

「そうか、じゃあ俺も全力で行く！零落白夜発動！」

上から突っ込んでくる白式に頭部からビームを乱射する。

しかし、撃ちすぎで出力の低くなった頭部からのビームは刀ですべて切り裂かれてしまう。

そして目の前には瞬時加速をかけてきた白式の姿があり、直後に勝負が決した。

「・・・で、IS初心者の方の弾に負けたのね、一夏は。」

「はい・・・。」

「話だと一夏の得意な格闘戦で負けたらしいじゃない。」

そう、あの時とつさに出たゾックの腕に殴られて一夏は負けたのだ。それがなければ一夏の勝ちだっただろう。

「はい・・・事実です・・・。」

そしてその後、教室で自己紹介をした後に校内の施設案内も兼ねて、IS学園の食堂で昼ご飯を食べることになったのだが・・・。

なんだろうか？この重苦しい雰囲気は。
今一夏に説教しているのは、一夏と付き合っている幼馴染の鈴。クラスは違ったのだが、食堂でバッタリ会った。

「あのさ、別にそこまで責めなくてもいいんじゃないのか？」
そう仲裁しようとしたのだが・・・。

「弾は黙ってて！やっぱり一夏は訓練不足ね。今日放課後、二人で訓練！」

「ちようどいい、私もその訓練とやらに付き合おう。紅椿にまだ慣れきっていないしな。」

今発言したのは黒髪美人の篠ノ之 篁さん。同じクラスで、一夏はファースト幼馴染と言っていた。

鈴が一夏と付き合うまで、一夏に好意を寄せていたが今はあきらめているとの事。

「篁さん！まだ諦めていなかったのですか？心配ですからわたくしも一緒に過ごさせていただきますわ！」

こちらはセシリア・オルコットさん。イギリスの代表候補生で、金

髪美人。

鈴が一夏と付き合うまで、一夏に好意を寄せていたが今はあきらめているとの事。

「僕もいっしょに訓練しようかな。冬休み中になまっちゃったし・・。」

やさしい雰囲気この人はシャルロット・デュノアさん。ボクっ娘ですよボクっ娘！現実には存在してるとは・・・。

ちなみに鈴が一夏と・・・っておい。

一夏ハーレム作りすぎじゃね？全く、それに鈍感だったもんだからさらにタチがわるい。

それに、この3人絶対諦めてないでしょ！隙あらば一夏ゲットだぜ！する気だよ。

「全く・・・一夏・・・お前って奴は。」

そう呆れていると、一人だけハーレム内紛争に加わらずにテーブルで手紙を書いている少女がいた。

確か名前は・・・。

「ボーデヴィツヒさん。なにやってるの？」

うん、無難な質問の仕方だな。書いている手紙は・・・年賀状？「五反田か。私が書いているのは年賀状と呼ばれる文書だ。日本では知り合いに送ると聞いた。」

「へえ・・・。あ、これはボーデヴィツヒさん宛てにきた年賀状？」

ボーデヴィツヒさんが書いている年賀状の横に、ボーデヴィツヒさん宛てにきた年賀状が置いてあった。

「そうだ。それは、バーニイという私のお兄ちゃんから来た大事な年賀状だ。だから、私も全力で年賀状を書いているのだ。」

なるほど。でも、よく見てみたら年賀状っていう割にはやたら文字がびっしりのような・・・。

「ボーデヴィツヒさん、すごくたくさん書くんだね。」

「これか？クラリツサが、年賀状とは一年の抱負を500文字以内で書くものだと言っていた。」

誰ですか？クラリツサさんって。しかもクラリツサさんジャパニズカルチャーを違った解釈してない？

「あ、あのさボーデヴィツヒさん。普通はあけておめでとうって書いたり今年もよろしくねとか、短い文章書いて、あとは絵をつけてみたりするだけでいいんだよ。」

「む。そうなのか？ならばこれは没だな。五反田、正しい書き方を教えてくれないか？」

普段なら面倒だから断るところだけど、目の前にいるのは少し育ってないけど紛れもない美少女。

ここで優しさを見せれば……。

「いいよ、じゃあここはこうして……。」

7分後

「出来た。出来たぞ！五反田、感謝するぞ！」

「どういたしまして。あとはポストに投函してくるだけだね。」

「分かった。ポストまで行って来る。」

「ボーデヴィツヒさん、そんな急がなくても……ってもう行っちゃったか。走るの速いなあ……。」

走ってポストに向かう姿が子供みたいで、自然と微笑んでしまう光景だった。

「一夏あ！アンタ、私の彼氏でしょ！なんで他の人もいつしよに訓練するのよ！」

「いや、別にただの訓練なんだしさ……。」

「そうだ、一夏の言うとおりだ。やましい事をしようなどとは少ししか思っていない！」

「そうですわ！篝さんの言うとおりですわ！」

「二人とも、本心がでてるよ。」

やれやれ、向こうはまだ紛争が終わっていないようだ。普通なら自

然じやなくとも目をそらしたくなる光景だ。

しかし、一夏め・・・うらやましい。もう一人の親友、数馬に連絡しよう。

「さて、俺はどうすっかな・・・。あ、ボーデヴィツヒさん・・・さっきの没になった年賀状置きっぱなしじゃねえか・・・。ちよつと見ても・・・いいよな？」

・・・。。。

「なんだ・・・俺が教えなくたって、いい年賀状だったんじゃないか。・・・ちよつと悪いことしちゃったな。」

内容は年賀状には見えなかった。しかし、とても無邪気な文で、見ていると優しい気持ちになれる。

そんな手紙だった。

IS学園に入って一日目、いろいろなことがあったけど・・・これから楽しみだ。

17話 親友（後書き）

今回の17話、ついに五反田弾が出てきました。
近いうちに原作で弾と関わりがあるあの人も出てくる予定です。

ちなみにゾックはザクよりも推力は遥かに上ですが、今回は出力が高く、鈍重な機体として表現しました。

まあ、戦い方を知らない素人が使ったらこうなる・・・といった感じで。

さて、次回はまた舞台は宇宙世紀へ。

ある人物との出会い、そして連邦軍の新型兵器たち。

後に伝説となるモビルスーツ相手にソンネン少佐はどう戦うのか！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6496v/>

地上の王者、ISの世界へ

2012年1月12日20時54分発行